

第27号住居跡 (第71・72図)

位置 調査3区の南部, H 214区。

規模と平面形 長軸3.88m, 短軸3.72mの方形である。

主軸方向 N-20°-W

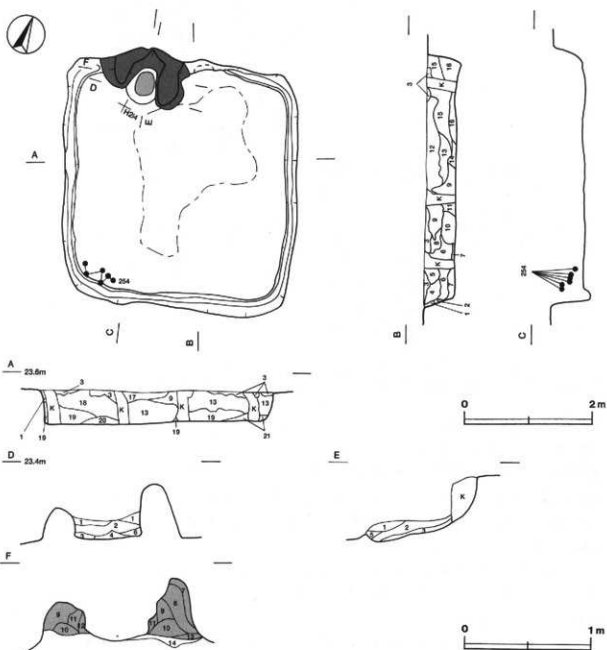
壁 はほぼ直立している。壁高は50~64cmである。

壁溝 全周している。上幅13~27cm, 下幅5~12cm, 深さ9~14cmで, 断面形はU字形である。

床 はほぼ平坦で, 中央部がよく踏み固められている。

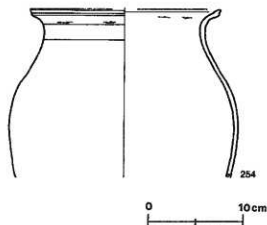
竈 北壁の中央部西寄りにルームと粘土と砂粒で構築されている。天井部は崩落し, 両袖部が残存している。

規模は, 焚口部から煙道部までの最大長95cm, 袖部の最大幅120cmである。煙道部は壁外へ19cm掘り込んでおり, 煙道は外傾して立ち上がっている。火床部は床面をわずかに掘りくぼめられており, 火熱を受けて赤変硬



第71図 第27号住居跡実測図

化している。西袖はロームを掘り残して基部とし、その上にロームと砂粒と粘土を混ぜた土を積んで構築されている。東袖は袖部下から東側の床面に広がるわずかなくぼみに、ロームや粘土や焼土などを埋め込んで、平坦部をつくり、その上に西袖と同様にロームと砂粒と粘土で構築されている。竈土層断面図中、第1・2層は崩落した天井部、第3層は火床部、第7～13層は袖部である。東袖部下から北壁際中央部にかけてくぼみがあり、その床面から焼土が確認されており、以前火床部であった可能性が考えられる。竈の東側に標道であったと思われる壁外への掘り込みがわずかにあり、その付近の壁面には粘土が付着していることから、竈が北壁中央部に構築されていた可能性が考えられる。従って、最初は、竈が北壁の中央部に構築され、北壁の中央部西寄りに作り替えられたと推定される。



第72図 第27号住居跡出土遺物実測図

竈土層解説

- | | |
|---------|--|
| 1 灰 褐色 | 粘土粒子中量、焼土中ブロック・焼土小ブロック・砂粒少量 |
| 2 暗赤褐色 | 焼土中ブロック・焼土小ブロック中量、焼土大ブロック・粘土粒子・砂粒少量 |
| 3 赤褐色 | 焼土中ブロック・焼土小ブロック多量、灰少量 |
| 4 褐色 | ロームブロック |
| 5 暗褐色 | 焼土粒子中量 |
| 6 暗赤褐色 | 焼土粒子・炭化粒子中量、ローム粒子・焼土小ブロック・砂粒少量、焼土大ブロック微量 |
| 7 灰褐色 | 砂粒中量、ローム粒子・粘土粒子少量 |
| 8 灰褐色 | 砂粒多量、粘土粒子少量、ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 9 灰褐色 | 砂粒多量、粘土粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 10 灰褐色 | 粘土粒子・砂粒中量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 11 灰褐色 | 砂粒中量、ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量 |
| 12 暗赤褐色 | 焼土粒子少量、焼土中ブロック・炭化物・炭化粒子少量 |
| 13 暗赤褐色 | ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量、焼土粒子・炭化物微量 |
| 14 灰褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量、焼土中ブロック・炭化粒子微量 |

覆土 21層からなる。ほとんどの層に焼土やロームブロックが含まれており、ブロック状の堆積であることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|--------|--|
| 1 暗褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック・炭化粒子微量 |
| 2 褐色 | ローム粒子少量、ローム小ブロック微量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子少量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化粒子微量 |
| 5 暗褐色 | ローム粒子少量、ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 6 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量、ローム大ブロック・ローム中ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量 |
| 7 黒褐色 | ローム粒子少量、ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子微量 |
| 8 黒褐色 | ローム粒子少量、ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子微量 |
| 9 暗褐色 | ローム粒子中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 10 暗褐色 | ローム粒子中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 11 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 12 暗褐色 | ローム粒子少量、ローム大ブロック・ローム小ブロック・炭化粒子微量 |
| 13 暗褐色 | ローム大ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 14 暗褐色 | ローム粒子・砂粒少量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量 |
| 15 暗褐色 | ローム粒子少量、ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・粘土中ブロック微量 |
| 16 黒褐色 | ローム粒子少量、ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土中ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・粘土小ブロック・砂粒微量 |
| 17 黒褐色 | ローム粒子少量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 18 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量、ローム大ブロック・ローム中ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量 |
| 19 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量、ローム中ブロック・焼土小ブロック・炭化粒子微量 |
| 20 暗褐色 | ローム粒子少量、ローム大ブロック・ローム中ブロック・焼土小ブロック・炭化粒子微量 |
| 21 黒褐色 | ローム粒子少量、ローム大ブロック・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |

遺物 土師器片187点（杯・高台付杯11、甕・甕176）、須恵器片12点（杯・高台付杯5、甕・甕7）、土製品2点（支脚）、鉄滓5点、炭化材2点が出土している。これらの多くは、南西コーナー部を中心とした覆土上層から覆土中層にかけて出土している。そのほか、混入した縄文土器片5点、攪乱により混入した瓦質土器片1

点が出上している。第72図254の土師器甕は、南西コーナー部の覆土中層と覆土上層から出土した破片が接合したものである。

所見 本跡に伴うと考えられる出土遺物はないが、地積状況が人為堆積であることから、出土土器は本跡の廃絶時のものと考えられ、時期は8世紀後葉と推定される。また、竈は、北壁の中央部に構築された後、やや西にずれた位置に作り替えられたと考えられる。

第27号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第72図 254	甕 土師器	A [20.0] B (17.5)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎気味に立ち上がり、頸部はくの字状に歪曲する。口縁部は外反し、頸部は外上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面輪積み痕を残す紐ナデ。体部内・外面ナデ。	砂粒・白色粒子 橙色 青透	30% P.L.62 体部外面腐層付着

第28号住居跡（第73図）

位置 調査3区の南部，H2f7区。

規模と平面形 長軸3.08m、短軸2.76mの長方形である。

主軸方向 N-90°-E

壁 ほぼ直立している。壁高は38～44cmである。

壁溝 北壁の中央部を除いて、壁下を巡っている。上幅20～32cm、下幅4～9cm、深さ2～4cmで、断面形はU字形である。

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。

竈 東壁の中央部に粘土とロームで構築されている。天井部は崩落し、袖部が残存している。炭椀は、焚き口から煙道部までの最大長98cm、袖部の最大幅99cmである。煙道部は壁外へ27cm掘り込んでおり、煙道は外傾して立ち上がっている。火床部は床面からわずかに掘りくぼめられており、火熱を受けて赤変硬化している。竈土層断面図中、第3層が火床部の覆土である。

竈土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、粘土粒子・砂粒少量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・砂粒少量、炭化物微量
- 3 焦暗赤褐色 焼土粒子中量、焼土小ブロック少量、炭微量

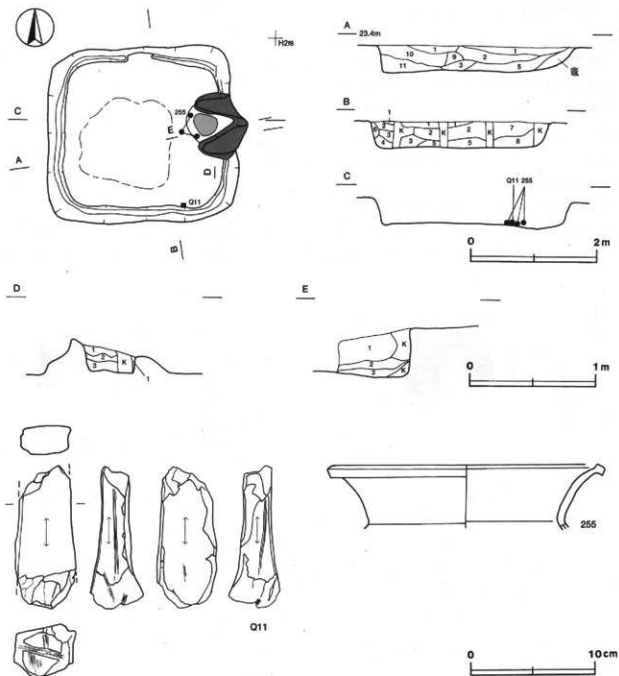
覆土 11層からなり、レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 焦暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
- 2 黒褐色 ローム大ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 4 暗褐色 ローム中ブロック・ローム粒子少量、ローム大ブロック微量
- 5 灰褐色 ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量、ローム中ブロック・ローム小ブロック・粘土小ブロック微量
- 6 褐色 ローム粒子少量
- 7 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 8 黒褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 9 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック微量
- 10 黒褐色 ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 11 褐色 ローム粒子中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック少量

遺物 土師器片35点（坏・高台付坏13、甕・甗22）、須恵器片33点（坏・高台付坏6、蓋2、甕・甗25）、石器1点（砥石）、鉄器1点（刀子）が出上している。これらの遺物は、中央部の覆土中・下層を中心に出土している。そのほか、攪乱により混入した陶器片1点が出上している。第73図255の須恵器甕は竈前の床面から出土した破片が接合したものである。Q11の砥石は、南壁際の覆土下層から出土している。出土状況から、255は本跡に伴う土器と考えられる。

所見 本跡の時期は、床面の出土土器から、8世紀後葉から9世紀前葉と考えられる。



第73図 第28号住居跡・出土遺物実測図

第28号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第73図 255	甕 須臾器	A 21.2 B (5.0)	口縁部の破片。口縁部は外反し、 肩部は上下に突出している。	口縁部内・外面ロクロナデ。	雲母・砂粒・白色 粒子 灰黄色、普通	10% 口縁部外面 採付者

遺物番号	器種	計測値				石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第73図Q11	砥石	(11.3)	4.8	4.1	(207.0)	凝灰岩	平砥面4、溝状砥面2(幅0.2~0.4cm)	P L71

第30号住居跡 (第74・75図)

位置 調査3区の南部, H2e3区。

重複関係 第31号住居跡の南壁を掘り込んでおり, 本跡の方が新しい。

規模と平面形 長軸3.78m, 短軸3.52mの方形である。

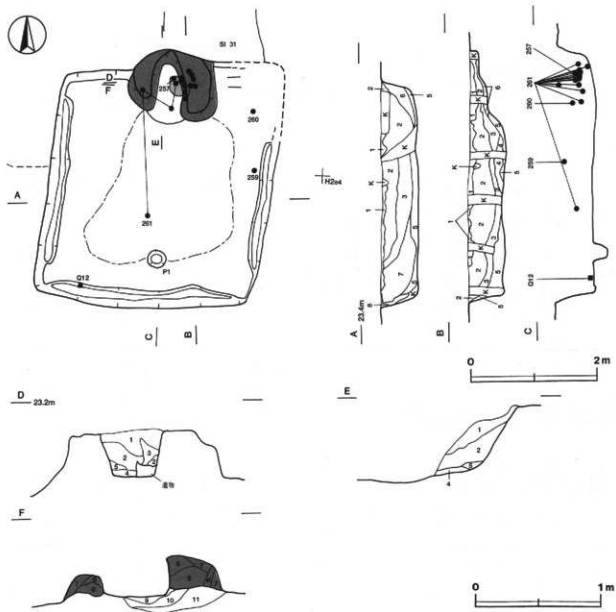
主軸方向 N-9°-E

壁 はほぼ直立している。壁高は51~63cmである。

壁溝 各コーナー部を除いて, 壁下を巡っている。上幅14~36cm, 下幅8~14cm, 深さ2~6cmで, 断面形はU字形である。

床 はほぼ平坦で, 中央部が踏み固められている。

竈 北壁の中央部にロームと粘土と砂粒で構築されている。天井部は崩落し, 袖部が残存している。規模は, 焚口部から煙道部までの最大長115cm, 袖部の最大幅139cmである。煙道部は壁外へ15cm掘り込んでおり, 煙道



第74図 第30号住居跡実測図

は外傾して立ち上がっている。火床部は床面から6cmほど掘りくぼめられており、火熱を受けて赤変硬化している。甕土層断面図中、第9～11層は火床部・東袖部掘り方の埋土、第6・8層は袖部、第4層は火床部の覆土である。

甕土層解説

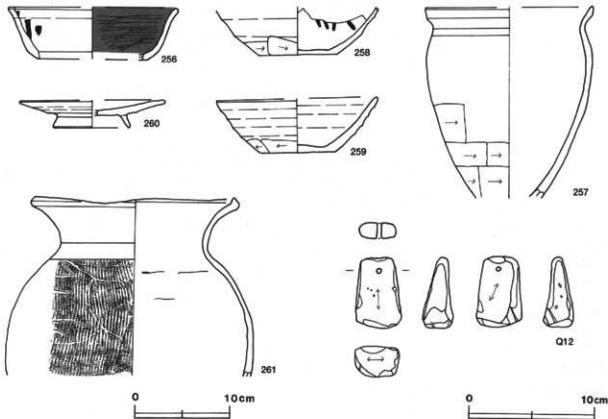
- | | |
|----------|--|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・粘土小ブロック・粘土粒子少量、焼土小ブロック微量 |
| 2 灰褐色 | 粘土粒子中量、ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土大ブロック・焼土小ブロック微量 |
| 3 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量、焼土中ブロック・焼土粒子微量 |
| 4 黒暗赤褐色 | 焼土粒子多量、灰少量 |
| 5 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック少量、粘土粒子・砂粒微量 |
| 6 灰褐色 | ローム粒子・砂粒中量、ローム小ブロック・粘土粒子少量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 7 暗褐色 | ローム粒子中量、粘土粒子・砂粒少量、ローム小ブロック・焼土粒子微量 |
| 8 灰褐色 | 粘土粒子・砂粒中量、ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量、焼土小ブロック微量 |
| 9 暗赤褐色 | 焼土粒子多量、焼土小ブロック・炭化粒子少量、焼土中ブロック・炭化物微量 |
| 10 暗赤褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量、砂粒微量 |
| 11 黒暗赤褐色 | ローム粒子多量、ローム小ブロック・焼土粒子少量、ローム大ブロック・炭化粒子微量 |

ピット 1か所。P1は長径29cm、短径28cmの円形で、深さ24cmである。南壁寄りの中央部に位置していることと形状から、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 8層からなり、レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|--------|--|
| 1 黒褐色 | ローム粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量、ローム小ブロック・焼土中ブロック・焼土粒子微量 |
| 3 黒暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・粘土粒子微量 |
| 4 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子微量 |
| 5 暗褐色 | ローム粒子少量、ローム中ブロック・ローム小ブロック微量 |
| 6 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土小ブロック微量 |
| 7 暗褐色 | ローム小ブロック中量、ローム粒子少量、ローム大ブロック・ローム中ブロック微量 |
| 8 褐色 | ローム粒子中量 |



第75図 第30号住居跡出土遺物実測図

遺物 土師器片208点(坏・高台付坏69, 鉢9, 甕・甌130), 須恵器片187点(坏・高台付坏47, 蓋11, 高台付皿1, 甕・甌128), 石器1点(砥石), 鉄器1点(刀子)が出土している。これらの出土遺物は, 竈周辺を中心に, 覆土中層から覆土下層にかけて出土している。第75図256の土師器坏は覆土中層から出土している。257の土師器甕は竈内の覆土下層から逆位で出土している。258の須恵器坏は覆土中から, 259の須恵器坏は東壁際中央部の覆土中層から, 260の須恵器高台付皿は北東コーナー部の覆土下層から出土している。261の須恵器甕は, 中央部の下層から出土した破片と竈内の覆土下層から出土した破片が接合したものである。Q12の砥石は南西部の覆土下層から出土している。出土状況から, 257・261は本跡に伴う土器と考えられる。

所見 本跡は, 竈の西袖部はロームを掘り残して基部とし, 東袖部は掘りくぼめた後に埋土をして, その上に作っており, 西袖部と東袖部の作り方が異なる構築方法である。時期は, 本跡に伴う土器から9世紀中葉と考えられる。

第30号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・変成	備考
第75図 256	土師器 坏	A [13.4]	底部から口縁部にかけての破片。体部は外傾して立ち上がり, 口縁部は外反する。	口縁部及び体部外面ロクロナデ。体部内面ロクロナデ後, ヘラ削き。体部下端手持ちヘラ削り。内面黒色処理。	砂粒・白色粒子にふいば色 普通	5% P.L.62 体部外面に「川」の墨書
		B 4.1				
		C [8.6]				
257	土師器 甕	A [13.4]	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎気味に立ち上がり, 頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は外反し, 端部は外上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面上半ナデ。外面下半ヘラ削り。	砂粒・白色粒子 赤色 普通	30% 体部内・外面煤付着
		B (15.2)				
258	須恵器 坏	B (3.7) C [6.0]	底部から体部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面と底部内面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部1方向の手持ちヘラ削り。	砂粒・白色粒子 にふいば黄色 普通	10% 体部内面に釈読不能の墨書
259	須恵器 坏	A [12.8]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がり, 口縁部はわずかに外反する。	口縁部と体部内・外面及び底部内面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部1方向の手持ちヘラ削り。	長石・砂粒・白色 灰色 普通	40% 体部外面煤付着
		B 4.3				
		C [5.8]				
260	須恵器 高台付皿	A [11.6]	高台部から口縁部にかけての破片。短いくの字状の高台が付く。体部は外方に開き, 口縁部に至る。	口縁部と体部内・外面及び底部内面ロクロナデ。底部側面ヘラ削り後, 高台貼り付け。	砂粒・白色粒子 黒色粒子 灰色 普通	30%
		B 2.2				
		D 6.0				
		E 1.0				
261	須恵器 甕	A 20.8	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎気味に立ち上がり, 頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は外反し, 端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦方向の平行叩き。体部内面に輪痕み痕残る。	砂粒・白色粒子 灰色 普通	50% P.L.63
		B (18.7)				

遺物番号	器種	計測値					石質	特徴	備考
		径(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
第75図Q12	砥石	5.6	3.7	2.3	0.4	567	凝灰岩	穿孔あり。掘り紙。紙面3	P.L.71

第31号住居跡(第76・77図)

位置 調査3区の南部, H2d3区。

重複関係 第30号住居に南壁を掘り込まれていることから, 本跡の方が古い。

規模と平面形 長軸4.34m, 短軸4.20mの方形である。

主軸方向 N-12°-W

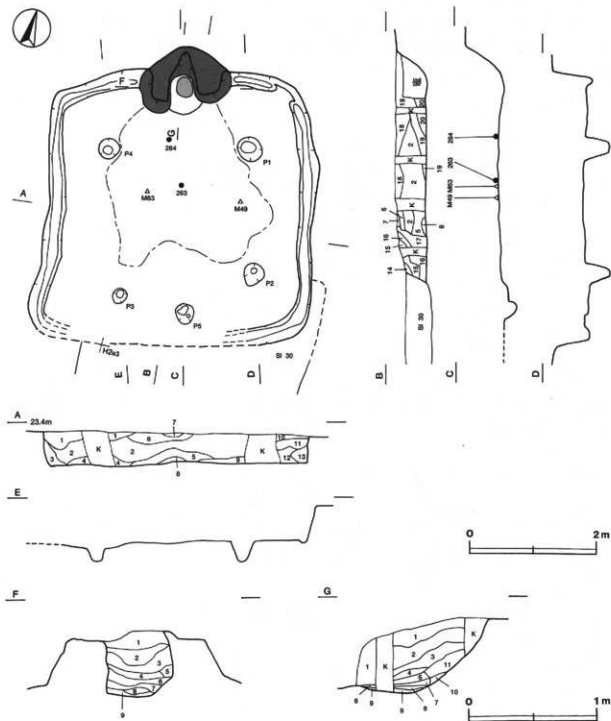
壁 ほぼ直立している。壁高は54~59cmである。

壁溝 北東コーナー部と南壁を除いて, 壁下を巡っている。上幅19~31cm, 下幅6~19cm, 深さ4~10cmで,

断面形はU字形である。

床 はほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。

竈 北壁の中央部に粘土とロームで構築されている。天井部は崩落し、袖部が残存している。規模は、竈口部から煙道部までの最大長109cm、袖部の最大幅154cmである。煙道部は壁外へ41cm掘り込んでおり、煙道は緩やかな傾斜で立ち上がっている。火床部は床面から10cmほど掘りくぼめられており、火熱を受けて赤変硬化している。竈土層断面図中、第1層は崩落した天井部である。第6～9層は火床部の覆土である。



第76図 第31号住居跡実測図

土層解説

1 灰褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・粘土粒子少量、焼土中ブロック・焼土小ブロック・砂粒微量
2 灰褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック少量、粘土粒子・砂粒微量
3 灰褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック・焼土小ブロック・粘土粒子・砂粒微量
4 暗赤褐色	焼土粒子多量、焼土中ブロック・焼土小ブロック少量
5 暗赤褐色	焼土中ブロック・焼土小ブロック中量、焼土粒子少量
6 暗赤褐色	焼土粒子多量、焼土中ブロック・焼土小ブロック中量、焼土大ブロック少量、炭化粒子微量
7 暗赤褐色	焼土粒子中量、焼土中ブロック・焼土小ブロック・炭化粒子少量、ローム粒子・炭化物微量
8 灰赤色	炭多量、焼土粒子・焼土小ブロック・炭化粒子微量
9 暗赤褐色	焼土中ブロック・焼土小ブロック中量、炭化物・炭化粒子少量、ローム粒子・炭微量
10 暗赤褐色	焼土小ブロック・焼土粒子多量
11 暗赤褐色	焼土小ブロック多量、焼土粒子・粘土粒子少量

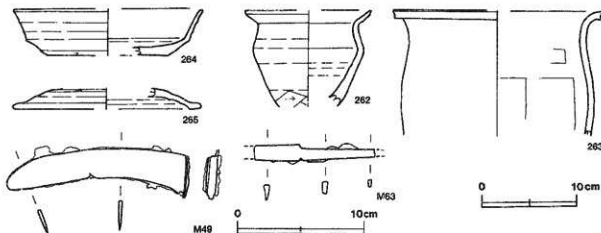
ピット 5か所 (P1~P5)。P1~P4は長径24~42cm、短径23~39cmの円形または楕円形で、深さ21~44cmである。各コーナー寄りに配置されていることと形状から、支柱穴と考えられる。P5は径30~32cmの円形で、深さ18cmである。南部の中央に位置していることと形状から、出入り施設に伴うピットと考えられる。

覆土 20層からなり、レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子少量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
2 暗褐色	ローム粒子少量、ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
3 褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック微量
4 暗褐色	ローム粒子少量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
5 暗褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子・砂粒微量
6 暗褐色	ローム粒子少量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・砂粒微量
7 濃い赤褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量、ローム小ブロック・焼土小ブロック微量
8 褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・砂粒微量
9 褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
10 黒褐色	ローム粒子少量、ローム小ブロック・炭化粒子微量
11 暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
12 暗褐色	ローム粒子中量、ローム中ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
13 暗褐色	ローム粒子中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック微量
14 暗褐色	ローム粒子中量、粘土粒子・砂粒少量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
15 暗褐色	粘土粒子・砂粒中量、ローム粒子少量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
16 濃い赤褐色	砂粒多量、粘土粒子中量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量、ローム小ブロック・焼土中ブロック・焼土小ブロック・炭化物微量
17 暗赤褐色	焼土粒子・粘土粒子・砂粒中量、ローム粒子・炭化物・炭化粒子少量、ローム小ブロック・焼土大ブロック・焼土中ブロック・焼土小ブロック微量
18 暗褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
19 暗褐色	ローム粒子中量、炭化粒子少量、ローム中ブロック・焼土中ブロック・焼土粒子・炭化物・粘土小ブロック・砂粒微量
20 暗褐色	ローム粒子中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量

遺物 土師器片262点 (坏・高台付坏57, 甕・飯205), 須恵器片91点 (坏・高台付坏67, 壺4, 甕・飯20), 土製品4点 (支脚), 鉄器2点 (鎌, 刀子), 鉄滓1点が出土している。これらの遺物は、甕を含む北壁周辺を中



第77図 第31号住居跡出土遺物実測図

心に覆土上層から覆土下層にかけて出土している。そのほか、混入した縄文土器片2点、埴乱により混入した瓦質土器片1点、陶器片1点が出土している。第77図262の土師器小形壺は竈内の覆土中から、263の土師器甕は中央部の覆土下層から出土している。264の須恵器坏は竈前の床面から、265の須恵器甕は覆土中から出土している。M49の縁は中央部の床面から、M63の刀子は中央部の床面から出土している。出土状況から、262・264・M49・M63は本跡に伴う出土遺物と考えられる。

所見 本跡の時期は、竈内や床面の出土土器から、8世紀前後と考えられる。

第31号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第77図 262	小形 土師器 壺	A [10.0]	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎気味に立ち上がり、頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は外反する。	口縁部及び体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。	砂粒・白色粒子にぶい黄褐色。普通	10% 口縁部内面・体部外側面付着
		B (7.7)				
263	土師器 甕	A [21.8]	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎気味に立ち上がり、頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は外反する。	口縁部内・外側削ナデ。体部外面ナデ、内面ヘラナデ。	雲母・砂粒・白色粒子。にぶい赤褐色。普通	10%
		B (13.0)				
264	須恵器 坏	A [15.0]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部と体部内・外面及び底部内面ロクロナデ。底部外側部回転ヘラ削り、1方向の手持ちヘラ削り。	雲母・砂粒・白色粒子・赤色粒子にぶい褐色。普通	20% 体部内面煤付着
		B 4.7				
		C [9.4]				
265	須恵器 甕	A [14.8]	口縁部から天井部にかけての破片。天井部は笠形で、口縁部内面に埋りかえりが付く。	口縁部及び天井内側部内・外面ロクロナデ。天井部回転ヘラ削り。	雲母・砂粒・白色粒子・赤色粒子。灰褐色。普通	20% 口縁部内面煤付着
		B (1.7)				

遺物番号	器種	計測値				材質	特徴	備考
		全長(cm)	背幅(cm)	刃幅(cm)	重量(g)			
第77図M49	鎌	14.4	0.3	2.5	48.3	鉄	刃部の一部欠損。	P L74

遺物番号	器種	計測値						材質	特徴	備考
		全長(cm)	刀身長(cm)	身幅(cm)	重ね(cm)	差長(cm)	重量(g)			
第77図M63	刀子	(9.6)	(3.8)	1.5	0.6	(5.8)	(16.1)	鉄	刃部あり。刃先・基部の一部欠損	

第32号住居跡 (第78・79図)

位置 調査3区の南部東寄り、H2d9区。南東部が調査区域外である。

規模と平面形 南北軸は4.12mである。南東部が調査区域外であるため、東西軸は3.46mだけが確認された。

平面形は方形または長方形と推定される。

主軸方向 N-17°-E

壁 ほぼ直立している。壁高は55～68cmである。

壁溝 北西コーナー部から南西コーナー部までの、壁下を巡っている。上幅20～36cm、下幅4～11cm、深さ8～14cmで、断面形はU字形である。

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。

竈 北壁の中央部に粘土とロームで構築されている。規模は、焚口部から煙道部までの最大長130cm、袖部の最大幅150cmである。煙道部は壁外へ30cm掘り込んでおり、煙道は緩やかな傾斜で立ち上がっている。火床部は床面からわずかに掘りくぼめられており、火熱を受けて赤変している。竈上層断面図中、第3層は崩落した天井部、第7層は火床部の覆土である。

覆土層解説

1	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量, 粘土小ブロック・粘土粒子・砂粒微量
2	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量, ローム中ブロック・焼土小ブロック・粘土小ブロック少量, 砂粒微量
3	灰褐色	焼土大ブロック多量, ローム中ブロック・ローム小ブロック・粘土粒子中量, 焼土小ブロック・焼土粒子・砂粒少量
4	褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・粘土小ブロック・粘土粒子中量, 焼土中ブロック少量
5	暗赤褐色	焼土大ブロック・焼土粒子多量, 焼土小ブロック・粘土小ブロック中量, 砂粒少量
6	赤褐色	焼土中ブロック・焼土小ブロック多量
7	極暗赤褐色	焼土中ブロック・焼土小ブロック中量, 灰少量
8	褐色	ローム粒子中量, 焼土小ブロック・砂粒少量
9	極暗赤褐色	焼土粒子中量, ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量, 炭化物微量

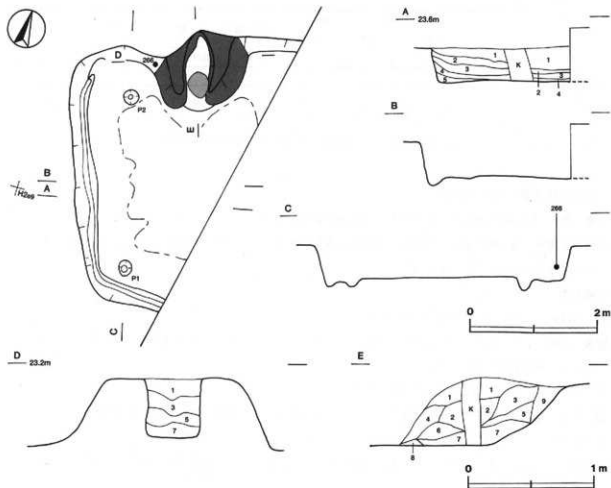
ピット 2か所 (P1・P2)。P1・P2はそれぞれ長径24cm・25cm, 短径23cm・22cmの円形及び楕円形で, 深さ11cm・23cmである。北西コーナー・南西コーナー寄りに配置されていることと形状から, 主柱穴と考えられる。

覆土 5層からなり, レンズ状に堆積していることから, 自然堆積と考えられる。

土層解説

1	黒褐色	ローム粒子少量, ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
2	暗褐色	ローム粒子中量, ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土粒子微量
3	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量, ローム大ブロック・焼土小ブロック・炭化粒子微量
4	暗褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, ローム中ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
5	暗褐色	ローム粒子中量, ローム小ブロック・炭化粒子微量

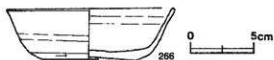
遺物 土師器片66点 (坏・高台付坏1, 甕・甔65), 須恵器片16点 (坏・高台付坏5, 甕・甔11), 土製品2点 (支脚, 不明), 鉄器1点 (鎌) が出土している。これらは, 甕を含む北壁と西壁周辺を中心に, 覆土中層から覆土下層を中心に出土している。そのほか, 混入した縄文土器片17点が出土している。第79図266の須恵器坏



第78図 第32号住居跡実測図

は、北壁際西寄りの覆土下層から出土している。

所見 本跡の時期は、出土土器から8世紀前葉と考えられる。



第79図 第32号住居跡出土遺物実測図

第32号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	子皿の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第79図 266	坏	A 13.2	底部から口縁部にかけての破片。	口縁部、体部内・外面及び底部内	小礫・砂粒・白色	50%
	須恵器	B 4.1	体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	面ロクロナデ。体基下端回転へうすり。底部回転へうすり。	粒子	
	C 7.6				灰色、普通	

第33号住居跡 (第80・81図)

位置 調査3区の南部、II 2b9区。

規模と平面形 長軸3.70m、短軸3.68mの方形である。

主軸方向 N-10°-W

壁 ほぼ直立している。壁高は58~62cmである。

壁溝 北壁の東部を除いて、壁下を巡っている。上幅24~48cm、下幅4~11cm、深さ4~10cmで、断面形はU字形である。

床 ほぼ平坦で、竈前から南壁の手前にかけて帯状に踏み固められている。

竈 北壁の中央部に粘土とロームで構築されている。天井部の一部と袖部が残存している。規模は、笑口部から煙道部までの最大長110cm、袖部の最大幅155cmである。煙道部は壁外へ46cm掘り込んでおり、煙道は緩やかな傾斜で立ち上がっている。火床部は床面から7cmほど掘りくぼめられており、火熱を受けて赤変している。竈土層断面図中、第4層は火床部の覆土である。

竈土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量
- 2 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、粘土粒少量
- 3 灰褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・粘土粒子中量、砂粒少量、焼土中ブロック・焼土小ブロック微量
- 4 暗赤褐色 ローム小ブロック・焼土粒子中量、灰少量

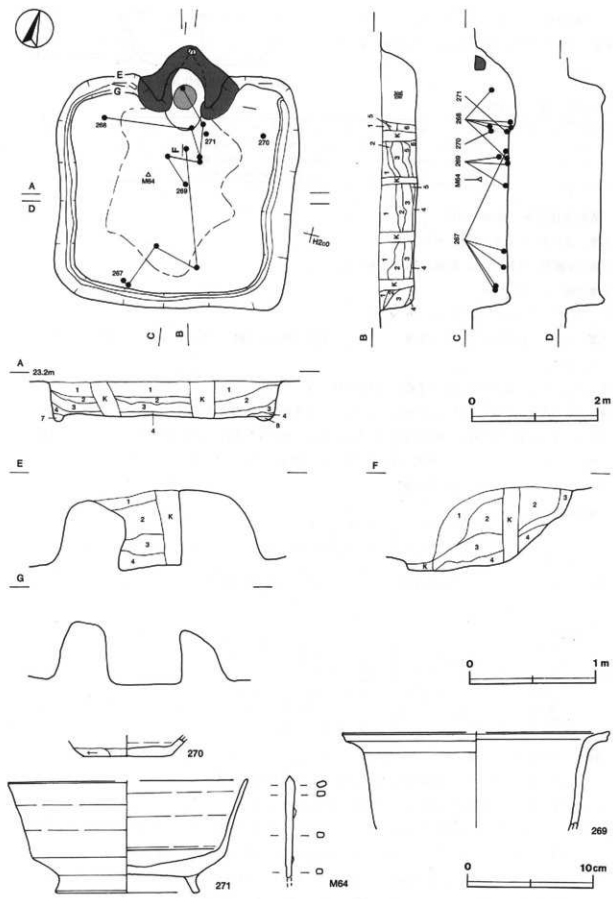
覆土 8層からなり、レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。土層断面図中、第7・8層は炭溝の土層である。

土層解説

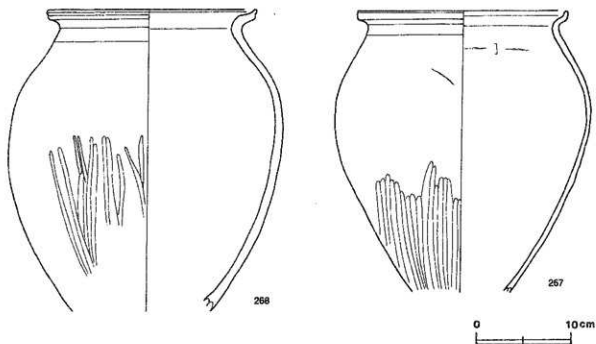
- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、ローム中ブロック・焼土中ブロック・焼土小ブロック微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、ローム中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒微量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、ローム大ブロック・ローム中ブロック・焼土小ブロック微量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量
- 5 灰褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量、ローム中ブロック微量
- 6 灰褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量、ローム中ブロック・焼土中ブロック・焼土小ブロック微量
- 7 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量
- 8 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土粒微量

遺物 土師器片172点(甕・甌)、須恵器片50点(坏・高台付坏35、蓋3、甕・甌12)、鉄器1点(鎌)が出土している。これらの遺物は、北東部と南西部を中心に、覆土上層から覆土下層にかけて出土している。第81図267の土師器甕は、南壁際中央部の覆土中層及び覆土下層から出土した破片と中央部の床面から出土した破片が接合したものである。268の土師器甕は、北西コーナー部の覆土中層と竈前の床面と竈内の覆土上層から出土した破片が接合したものである。第80図269の土師器甕は、中央部の床面及び覆土下層から出土した破片が接合したものである。270の須恵器坏は、北東コーナー部の覆土中層から出土している。271の須恵器高台付坏は、竈前の床面から出土している。M64の鎌は中央部の覆土上層から出土している。

所見 本跡の時期は、出土土器から9世紀前葉と考えられる。



第80图 第33号住居跡・出土遺物実測図



第81図 第33号住居跡出土遺物実測図

第33号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第81図 267	甕 土器	A 22.0	体部から口縁部にかけての破片。 体部は内湾気味に立ち上がり、口 縁部は外反し、肩部はわずかに上 方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面 ナデ、外面上半ナデ、F半腹方向 のヘラ磨き。胴部内面に輪轡み痕 残る。	砂粒・白色粒子 褐色 普通	60% P L 63
		B (20.2)				
268	甕 土器	A 21.7	体部から口縁部にかけての破片。 体部は内湾気味に立ち上がり、口 縁部は外反し、口縁端部は外上方 につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・ 外面上半ナデ、外腹下半腹方向の ヘラ磨き。	砂粒・白色粒子 赤褐色 普通	70% P L 63
		B (31.4)				
第80図 269	瓶 土器	A [27.8]	体部から口縁部にかけての破片。体部 は外傾して立ち上がり、肩部はくの 字状に屈曲する。口縁部は外反し、 肩部は外上方につまみ上げられて いる。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・ 外面ナデ。	砂粒・白色粒子 明赤褐色 普通	10%
		B (10.1)				
270	坏 土器	B (1.7)	底部から体部にかけての破片。平 底。体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面。底部内面ウロコナ デ。体部下端手持ちヘラ磨り。底 部1方向の手持ちヘラ磨り。	雲母・砂粒 灰褐色 普通	5%
		C [7.0]				
271	高台付 甕土器	A [18.9]	高台部から口縁部にかけての破 片。短いハの字状の高台が付く。 体部は外傾して立ち上がり、口縁 部はわずかに外反する。	口縁部と体部内・外面及び底部内 面ウロコナデ。底部屈曲ヘラ磨 り後、高台貼り付け。	小礫・砂粒・白色 粒子 灰褐色 普通	50%
		B 8.9				
		D 11.6				
		E 1.4				

遺物番号	器種	計 測 値						材質	特徴	備考	
		全長(cm)	胴身長(cm)	胴身幅(cm)	胴部部長(cm)	胴部幅(cm)	厚さ(cm)				重量(g)
第80図864	甕	(8.0)	1.3	0.8	5.8	0.5	(0.0)	0.4	(7.9)	全焼製器。一部の欠片	P L 73

第34号住居跡 (第82～84図)

位置 調査3区の南部西寄り、G 213区。

規模と平面形 北西コーナー部が調査区域外である。長軸4.44m、短軸4.22mの方形である。

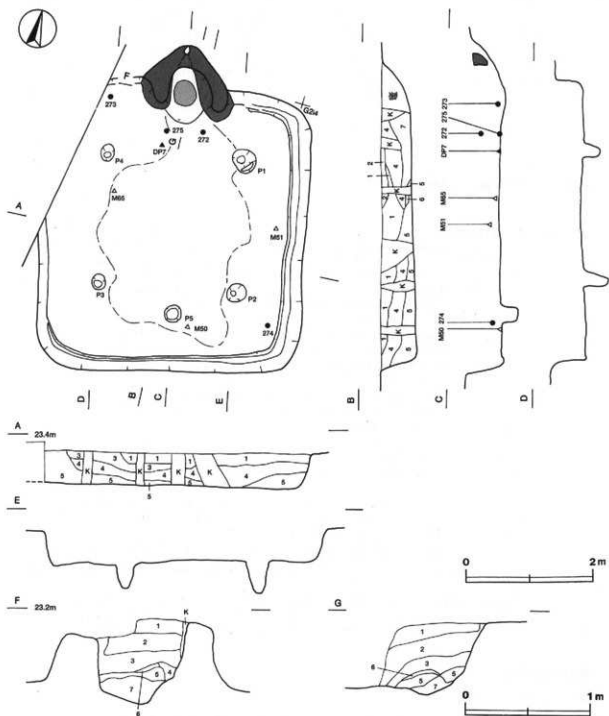
主軸方向 N-13°-W

壁 ほぼ直立している。壁高は52~60cmである。

壁溝 北東コーナー部から南西コーナー部にかけて、壁下を巡っている。上幅12~37cm, 下幅4~16cm, 深さ4~6cmで、断面形はU字形である。

床 竈前にわずかに高まりがあるが、ほぼ平坦である。中央部がよく踏み固められている。

竈 北壁の中央部に粘土とロームと砂粒で構築されている。天井部の一部と袖部が残存している。規模は、笑口部から煙道部までの最大長120cm, 袖部の最大幅149cmである。煙道部は壁外へ55cm掘り込んでおり、煙道は外傾して立ち上がっている。火床部は床面からわずかに掘りくぼめられており、火熱を受けて赤変硬化している。



第82図 第34号住居跡実測図

竈土層断面図中、第5・7層は火床部の覆土である。

竈土層解説

- | | |
|----------|---|
| 1 暗褐色 | ローム粒子中量、砂粒少量、ローム小アブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量 |
| 2 灰褐色 | 砂粒中量、ローム小アブロック・ローム粒子少量、ローム中アブロック・焼土小アブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 にいれ赤褐色 | ローム粒子・砂粒中量、焼土小アブロック・焼土粒子・粘土粒子少量、ローム小アブロック・炭化粒子・粘土小アブロック微量 |
| 4 にいれ赤褐色 | 焼土粒子・砂粒中量、焼土小アブロック・炭化物・粘土粒子少量、ローム小アブロック・ローム粒子・焼土大アブロック・炭化粒子微量 |
| 5 暗赤褐色 | 焼土粒子中量、焼土小アブロック・炭化物・炭化粒子・灰・砂粒少量、ローム小アブロック・ローム粒子・焼土中アブロック微量 |
| 6 にいれ赤褐色 | ローム粒子・焼土小アブロック・焼土粒子・炭化粒子少量、ローム小アブロック・砂粒微量 |
| 7 灰褐色 | 灰多量、焼土小アブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量 |

ピット 5か所（P1～P5）。P1～P4は長径24～37cm、短径20～36cmの円形及び楕円形で、深さ29～55cmである。各コーナー寄りに配置されていることと形状から、主柱穴であると考えられる。P5は長径28cm、短径26cmの円形で、深さ28cmである。南壁寄りの中央に位置していることと形状から、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

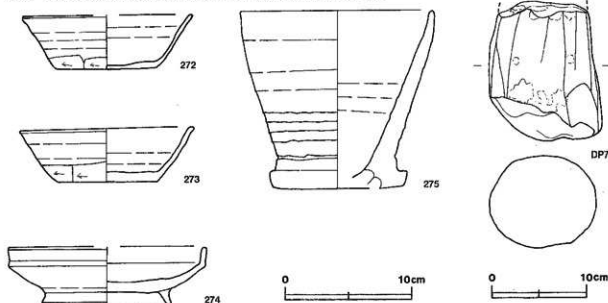
覆土 7層からなり、レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

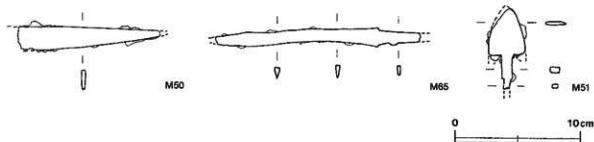
- | | |
|--------|---|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム小アブロック・ローム粒子少量、ローム中アブロック・砂粒微量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子少量、ローム大アブロック・ローム中アブロック・ローム小アブロック微量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子少量、ローム小アブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 5 暗褐色 | ローム小アブロック・ローム粒子少量、ローム中アブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 6 極暗褐色 | 炭化材・粘土粒子少量、ローム粒子微量 |
| 7 暗褐色 | ローム粒子少量、ローム小アブロック・焼土小アブロック・炭化物・粘土粒子微量 |

遺物 土師器片235点（杯・高台付杯17、甕・瓶218）、須恵器片95点（杯・高台付杯56、甕1、蓋5、甕・瓶29、捏ね鉢4）、土製品1点（支脚）、鉄器3点（刀子2、鎌1）が出土している。これらの遺物は、中央部を中心に、覆土中層から覆土下層にかけて出土している。第83図272の須恵器杯は、竈前の覆土中層から出土している。273の須恵器杯は竈西側の床面から正位で、274の須恵器甕は南東部の覆土下層から正位で出土している。275の須恵器捏ね鉢は、竈内の覆土中層と竈前の床面から出土した破片が接合したものである。DP7の支脚は、竈前の床面から出土している。第84図M50の刀子は南壁際の床面から、M51の鎌は東壁際の覆上下層から、M65の刀子は中央部の覆土下層から出土している。出土状況から、273・275、M50・M51・M65は本跡に伴う遺物と考えられる。

所見 本跡の時期は、床面の出土土器から8世紀後半と考えられる。



第83図 第34号住居跡出土遺物実測図(1)



第84図 第34号住居跡出土遺物実測図(2)

第34号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第33図 272	坏 須恵器	A [13.4]	底部から口縁部にかけての破片。	口縁部と体部内・外面及び底部内	赤母・砂粒・白色	50%
		B 4.3	平底。体部は外傾して直線的に立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。	面クロロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ削り痕を残す。2方向の手持ちヘラ削り。	灰白色	
		C 8.0			普通	
273	坏 須恵器	A 13.5	体部から口縁部の一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部と体部内・外面及び底部内面クロロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部1方向の手持ちヘラ削り。	小塵・赤母・砂粒 灰白色 普通	70% P.L.63 二次焼成
		B 4.4				
		C 7.8				
274	盤 須恵器	A [15.4]	高台部から口縁部にかけての破片。短いハの字状の高台が付く。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部と体部内・外面及び底部内面クロロナデ。底部回転ヘラ削り後、高台削り付け。	小塵・赤母・砂粒・白色砂子 灰色 普通	80%
		B 4.6				
		D 10.0				
		E 1.3				
275	押ね鉢 須恵器	A 15.0	底部と口縁部の一部欠損。平底。底部は径が体部より大きく、体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部及び体部内・外面クロロナデ。底部外面割離多く調整不明。	小塵・赤母・砂粒・白色砂子 黄灰色 普通	90% P.L.63
		B 14.1				
		C 10.4				

遺物番号	器種	計測値				特徴	備考
		全長(cm)	最大径(cm)	最小径(cm)	重量(g)		
第58図P7	支脚	(14.6)	(11.8)	(9.3)	(1490.0)	門筒状。基部が激しく焼けている。粘土付着	

遺物番号	器種	計測値					材質	特徴	備考	
		全長(cm)	刀身長(cm)	身幅(cm)	刃口(cm)	重量(g)				
第84図M30	刀子	(11.3)	(2.6)	1.9	0.3	(8.7)	(22.5)	鉄	両側あり。切先・基部の一部欠損	P.L.72
M65	刀子	(16.3)	(13.0)	1.2	0.5	(3.3)	(20.7)	鉄	両側あり。刀先・基部の一部欠損	P.L.72

遺物番号	器種	計測値							材質	特徴	備考	
		全長(cm)	鎌身長(cm)	鎌身幅(cm)	肩幅(cm)	刃長(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
第84図M51	鎌	(6.3)	(3.7)	(3.3)	(1.9)	2.0	(0.7)	0.5	(16.3)	鉄	長・内形式。基部一部欠損	P.L.73

第35号住居跡 (第85図)

位置 調査3区の中央部、G2J0区。

規模と平面形 南東コーナー部分が調査区域外である。長軸4.48m、短軸4.20mの方形である。

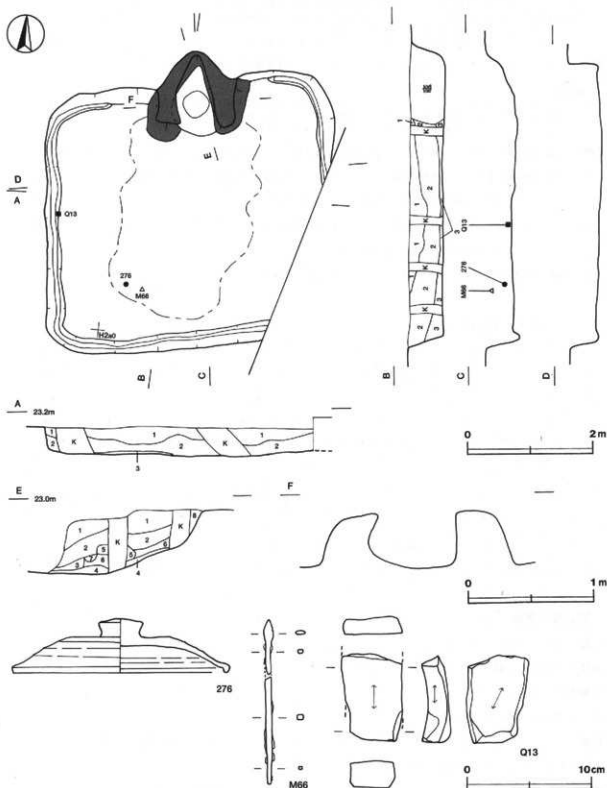
主軸方向 N-6°-W

壁 ほぼ直立している。壁高は45~53cmである。

壁溝 調査区域外の南東コーナー部を除いて、壁下を巡っている。上幅20~26cm、下幅4~12cm、深さ4~12cmで、断面形はじ字形である。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

竈 北壁の中央部に粘土とロームで構築されている。天井部は崩落し、袖部は残存している。規模は、竈口部から煙道部までの最大長138cm、袖部の最大幅165cmである。煙道部は壁外へ54cm掘り込んでおり、煙道は緩やかな傾斜で立ち上がっている。火床部は床面から3cmほど掘りくぼめられている。竈土層断面図中、第4層は



第85図 第35号住居跡・出土遺物実測図

火床部の覆土である。

覆土層解説

1 暗褐色	ローム粒子・砂粒少量、ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土小ブロック・粘土粒子微量
2 に近い赤褐色	ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・粘土粒子少量、ローム小ブロック・炭化粒子・砂粒微量
3 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量、ローム小ブロック・砂粒微量
4 暗赤褐色	焼土粒子中量、ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子・砂粒少量
5 暗赤褐色	焼土粒子中量、焼土小ブロック・炭化粒子少量、ローム粒子・焼土小ブロック・砂粒微量
6 に近い赤褐色	焼土粒子中量、焼土小ブロック・炭化粒子・灰少量、ローム粒子・焼土中ブロック・炭化物微量
7 に近い赤褐色	焼土粒子少量、炭化粒子・砂粒少量、炭酸塩
8 に近い赤褐色	焼土粒子・砂粒中量、ローム粒子・炭化物・炭化粒子・粘土粒子少量、ローム小ブロック・焼土小ブロック微量

覆土 3層からなり、レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

1 暗褐色	ローム粒子中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土中ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
2 黒褐色	ローム粒子少量、ローム小ブロック・焼土小ブロック・炭化粒子微量
3 暗褐色	ローム粒子中量、ローム大ブロック・ローム小ブロック微量

遺物 土師器片147点(坏・高台付坏2, 甕・甔144, 不明1), 須恵器片103点(坏・高台付坏49, 甕1, 蓋6, 高甕2, 甕・甔43, 不明2), 灰釉陶器片2点(不明), 石器1点(砥石), 鉄器・鉄製品3点(刀子, 鎌, 釘)が出土している。これらの遺物は、覆土各層から平均的に出土している。そのほか、混入した縄文土器片2点が出土している。第85図276の須恵器蓋は南西部の覆土下層から逆位で出土している。Q13の砥石は西壁際の覆土下層から、M66の鎌は南西部の覆土上層から出土している。

所見 本跡の時期は、覆土下層の出土土器から9世紀前葉と考えられる。

第35号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第85図 276	蓋 須恵器	A 17.1	定形。天井部は笠形で、覆宝珠状のつまみがつく。口縁部は短く折り返している。	口縁部及び外周部内・外面クロコナダ。天井部回転ヘラ削り後、つまみ削り付け。	小糠・雲母・砂粒・白色粒子 灰色 青油	100% P L 63 外周部外面 火押#
		B 4.4				
		F 3.5				
		G 1.3				

遺物番号	器種	計測値				材質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第85図Q13	砥	7.0	4.8	2.3	97.7	凝灰岩	縦溝3面	P L 71

遺物番号	器種	計測値						材質	特徴	備考
		全長(cm)	器身長(cm)	器身幅(cm)	器身厚さ(cm)	器身重量(g)	重量(g)			
第85図M66	鎌	13.1	1.7	0.8	9.6	0.5	1.8	0.4	0.9	鉄 全鋼製式 鎌・鋸の形に P L 73

第37号住居跡(第86図)

位置 調査3区の中央部, G 2 g 8区。

規模と平面形 長軸4.10m, 短軸3.92mの方形である。

主軸方向 N-10°-W

壁 ほぼ直立している。壁高は30~37cmである。

壁溝 全周している。上幅18~27cm, 下幅6~16cm, 深さ6~8cmで、断面形はU字形である。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

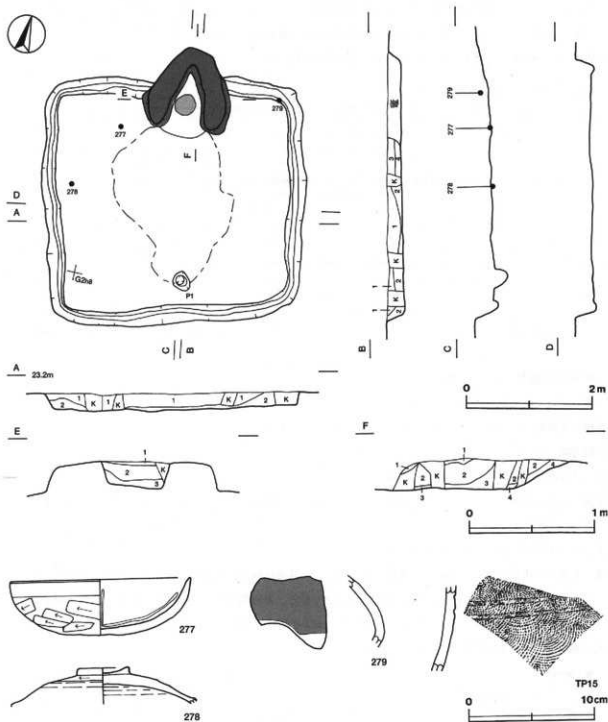
竪 北壁の中央部に粘土とロームと砂粒で構築されている。天井部は崩落し、袖部が残存している。規模は、焚口部から煙道部までの最大長142cm, 袖部の最大幅120cmである。煙道部は壁外へ46cm掘り込んでおり、煙道

は緩やかな傾斜で立ち上がっている。火床部は床面からわずかに掘りこぼめられており、火熱を受けて赤変している。竈土層断面図中、第2層は天井部の崩落土である。

竈土層解説

- 1 灰 褐色 粘土粒子・砂粒中量、ローム粒子少量、焼土小ブロック微量
- 2 褐 灰色 粘土粒子多量、砂粒中量、ローム小ブロック少量
- 3 極暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量
- 4 暗 赤褐色 ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・砂粒少量、炭化粒子・粘土粒子微量

ピット 1か所。P 1は長径32cm、短径27cmの楕円形で、深さ22cmである。南壁寄りの中央に位置していることと形状から、出入り口施設に伴うピットと考えられる。



第86図 第37号住居跡・出土遺物実測図

覆土 4層からなり、レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・焼上粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム大ブロック・ローム小ブロック・焼上粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量、砂粒少量、ローム小ブロック・焼上粒子・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 砂粒中量、ローム粒子・焼上小ブロック・焼上粒子・炭化粒子少量、ローム小ブロック微量

遺物 土師器片52点(坏・高台付坏9, 甕・瓶43), 須恵器片7点(坏・高台付坏2, 蓋3, 甕・瓶2), 灰釉陶器片1点(瓶), 土製品1点(支脚), 鉄製品2点(釘), 鉄滓2点が出土している。これらの遺物は、北西部を除き、覆土上層から覆土下層にかけて出土している。第86図277の土師器坏は、北西部の覆土下層から斜位で出土している。278の須恵器蓋は、西部の覆土下層から出土している。279の灰釉陶器瓶は、北東コーナ部の覆土中層から出土している。T P 15の須恵器甕は甕の覆土中から出土している。

所見 本跡の時期は、覆土下層の出土土器から8世紀前後と考えられる。

第37号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第86図 277	坏 土師器	A 14.4	定形。丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部にわずかに外反する。	口縁部内・外面、底部内面横ナデ。体部内面横ナデ後、放射状の縦文。体部下端手持ちヘリ削り。	砂粒・白色粒子 褐色 普通	100% P L 63 二次焼成
		B 4.4				
278	甕 須恵器	B (2.8)	口縁部からつまみにかけての破片。天井部は丸く、外周部はなだらかに下降し、ボタン状のつまみがつく。	口縁部及び天井外周部内・外面口ロナデ。天井部回転ヘリ削り後、つまみ削り付け。	小粒・砂粒・白色 粒子 灰色、普通	20%
		F 4.0				
		G 0.5				
279	瓶 灰釉陶器	B (5.8)	体部上平片。	体部内・外面口ロナデ。体部外面に灰釉。	砂粒・黒色粒子 灰白色 褐色は淡褐色、普通	5% 二川宮

遺物番号	器種	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第86図 T P 15	甕 須恵器	体部の破片。体部外面に同心円状の厚き目、横方向に流線が走る。内面ナデ。	砂粒・白色粒子 灰色、普通	5%

第38号住居跡(第87・88図)

位置 調査3区の中央部、G 2 e 9区。

規模と平面形 長軸4.20m、短軸4.08mの方形である。

主軸方向 N-0°

壁 はほぼ直立している。壁高は33~42cmである。

壁溝 南東・南西コーナーを除いて、壁下を巡っている。上幅16~26cm、下幅6~14cm、深さ7~9cmで、断面形はJ字形である。

床 はほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。

竈 北壁の中央部にロームと粘土で構築されている。天井部は崩落し、袖部が残存している。規模は、焚口部から煙道部までの最大長108cm、袖部の最大幅144cmである。煙道部は壁外へ34cm掘り込んでおり、煙道は緩やかな傾斜で立ち上がっている。火床部は床面から3cmほど掘りくぼめられており、火熱を受けて赤変している。

竈土層断面図中、第4層は火床部の覆土である。

竈土層解説

- 1 暗褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量、ローム大ブロック・焼上小ブロック・炭化物・粘土粒子・砂粒微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼上小ブロック・粘土小ブロック・砂粒少量、焼上中ブロック微量
- 3 灰褐色 ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量、焼上小ブロック・焼上粒子微量
- 4 極暗褐色 ローム粒子・焼上小ブロック・灰少量
- 5 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、ローム中ブロック・砂粒少量、焼上大ブロック・粘土粒子微量

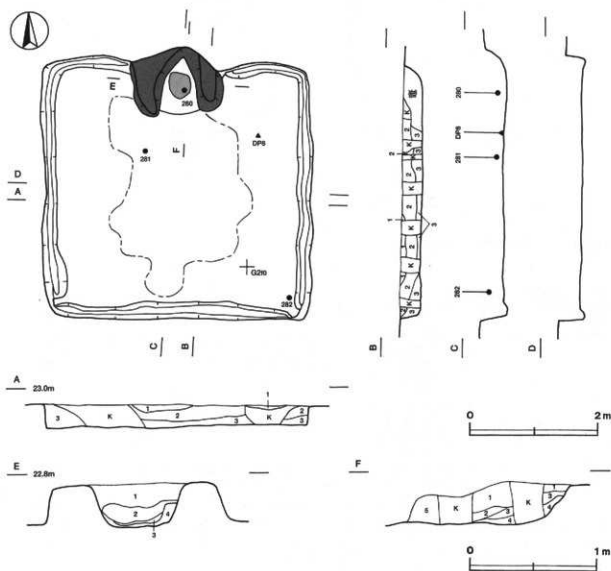
覆土 3層からなり、レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

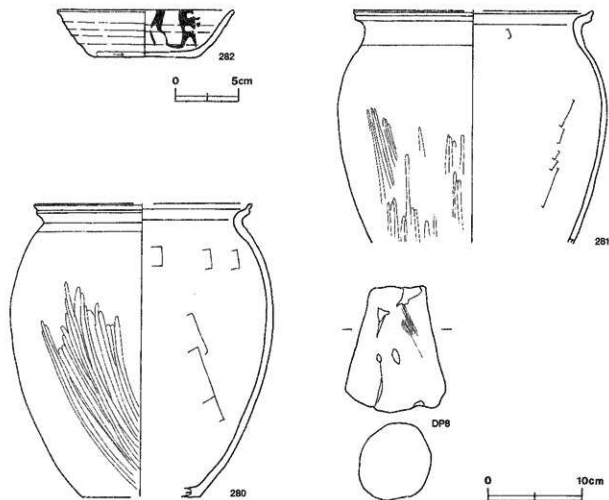
- 1 黒 褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土粒子微量
- 3 暗 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック・焼土粒子微量

遺物 土師器片111点（坏・高台付坏1，甕・瓶110），須恵器片35点（坏・高台付坏32，甕2，甕・瓶1），土製品1点（支脚），鉄製品2点（不明）が出土している。これらの遺物は、覆土上層から覆土下層にかけて全体的に出土している。そのほか、攪乱により混入した陶器片2点が出土している。第88図280の土師器甕は、竈内の覆土下層から斜位で出土している。281の土師器甕は、中央部の覆土下層から出土している。282の須恵器坏は、南東部の覆土中層から出土した破片と覆土中から出土した破片が接合したものである。DP8の支脚は、北東部の床面から出土している。出土状況から、280は本跡に伴う土器と考えられる。

所見 本跡の時期は、竈内の覆土中から出土した土器により、8世紀後葉と考えられる。



第87図 第38号住居跡実測図



第88図 第38号住居跡出土遺物実測図

第38号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
280	土器	A [22.6]	底縁から口縁部にかけての破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がり、頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は外反し、肩部は外上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面下半ヘラナデ、外面上半ナデ、外面下半縦方向のヘラ磨き。	砂粒・雲母・白色 褐色 普通	60% P L 64 二次焼成
		B 30.6				
		C [12.0]				
281	土器	A [25.0]	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は外反し、肩部は外上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面下位ヘラ磨き、内面ヘラナデ。	砂粒・白色粒子・ 赤色粒子 褐色 普通	20%
		B (24.4)				
282	須恵器	A 13.9	底部から口縁部の一部欠損。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面及び底部内面 ロクロナデ。体部が満手持ちヘラ削り。底部1方向の手持ちヘラ削り。	砂粒・雲母・白色 粒子 暗灰色、普通	70% P L 63 体部二次焼成 西面テール付着
		B 4.8				
		C 8.0				

遺物番号	器種	計測値				特徴	備考
		全長(cm)	最大径(cm)	最小径(cm)	重量(g)		
新88(DP8)	支脚	(13.0)	(10.4)	5.5	(765.0)	円筒状。糸割破損	

第39号住居跡（第89図）

位置 調査3区の北東部，G3d1区。

規模と平面形 北西コーナー部を残し，大部分が調査区域外である。確認されたのは，南北軸3.06m，東西軸1.60mだけであり，平面形は方形または長方形と推定される。

主軸方向 N-20°-W

壁 ほぼ直立している。壁高は37cmほどである。

壁溝 確認された北西コーナー部の壁下を巡っている。上幅17~28cm，下幅5~8cm，深さ5cmで，断面形はU字形である。

床 ほぼ平坦で，確認された北西コーナー部はよく踏み固められている。

ピット 1か所。P1は長径26cm，短径22cmの楕円形で，深さ22cmである。北西コーナー寄りに配置されていることと形状から支柱穴と考えられる。

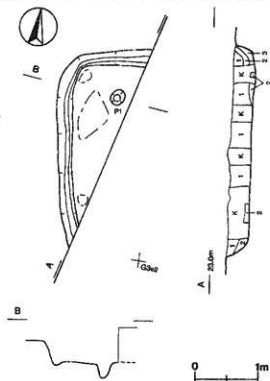
覆土 3層からなる。レンズ状に堆積しており，自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒中量，ローム小ブロック少量，炭化粒少量
- 2 暗褐色 ローム粒中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック微量
- 3 褐色 ローム粒多量，ローム小ブロック微量

遺物 土器片4点（坏・高台付坏2，甕・瓶2），須恵器片5点（坏・高台付坏2，甕・瓶3）が出土している。すべて細片で，覆土上層及び中層から出土している。そのほか，混入した縄文土器片2点が出土している。

所見 本跡の時期は，出土土器がすべて細片であり，伴うものもないため，明確な判断は困難である。混入した縄文土器片を除き，出土土器がすべて8世紀から9世紀代と考えられることから，時期は8世紀から9世紀代と推定される。



第89図 第39号住居跡実測図

第40号住居跡（第90・91図）

位置 調査3区の北部，G2b0区。

規模と平面形 長軸4.14m，短軸3.94mの方形である。

主軸方向 N-10°-W

壁 ほぼ直立している。壁高は30~37cmである。

壁溝 北東コーナー部と北西コーナー部と南壁の壁下を巡っている。上幅20~26cm，下幅4~13cm，深さ6cmで，断面形はU字形である。

床 ほぼ平坦で，中央部が踏み固められている。

竈 北壁の中央部にロームと粘土と砂粒で構築されている。天井部は崩落し，袖部が残存している。規模は，焚口部から煙道部までの最大長115cm，袖部の最大幅132cmである。煙道部は壁外へ33cm掘り込んでおり，煙道は外傾して立ち上がっている。火床部は床面からわずかに掘りくぼめられている。竈土層断面図中，第1層は崩落した天井部，第4層は火床部の覆土である。

覆土层解説

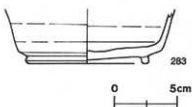
1	灰褐色	砂粒多量。ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量。焼土大ブロック・炭化粒子微量
2	にぶい赤褐色	砂粒中量。ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・粘土小ブロック・粘土粒子少量。焼土中ブロック・炭化粒子微量
3	暗赤褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量。焼土小ブロック微量
4	暗赤褐色	ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量
5	灰褐色	砂粒多量。ローム粒子・粘土粒子少量。焼土粒子・炭化粒子微量
6	暗褐色	ローム粒子中量。ローム小ブロック少量。ローム中ブロック・炭化粒子・砂粒微量
7	暗褐色	ローム粒子中量。ローム中ブロック・ローム小ブロック少量。焼土粒子・炭化粒子・砂粒微量
8	褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック多量。ローム粒子・焼土大ブロック中量。焼土中ブロック・焼土小ブロック・粘土粒子少量。砂粒微量

覆土 4層からなる。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

1	暗褐色	ローム粒子中量。ローム中ブロック・ローム小ブロック・炭化粒子微量
2	暗褐色	ローム粒子中量。ローム小ブロック少量。ローム中ブロック微量
3	暗褐色	ローム粒子中量。ローム小ブロック少量。ローム大ブロック微量
4	暗褐色	ローム粒子中量。ローム小ブロック微量

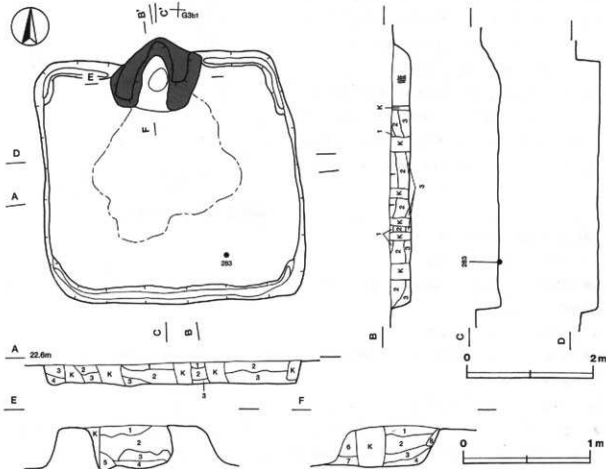
遺物 土師器片21点(坏・高台付坏2, 甕・瓶19), 須恵器片14点(坏・高台付坏6, 蓋1, 甕・瓶7)が



出土している。これらの出土遺物は、南壁中央部付近の床面から覆土中層にかけて出土している。そのほか、攪乱により混入した陶器片3点が出土している。第90図283の須恵器高台付坏は、南部の床面から出土している。出土状況から、283は本跡に伴う土器と考えられる。

所見 本跡の時期は、床面の出土土器から8世紀中葉と考えられる。

第90図 第40号住居跡
出土遺物実測図



第91図 第40号住居跡実測図

第40号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計面積 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第90図 283	高台付 坏	B (4.3)	高台部から体部にかけての破片。	体部内・外面及び底部内面クロナデ。	砂粒・雲母・白色	70%, P.L.63 体部・底部外面煤付着
	須恵 器	D 9.5	平底にハの字状の高台が付く。体部は内彎気味に立ち上がる。	底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け。	粒子	
		E 0.6			にぶい黄色、普通	

第41号住居跡 (第92・93図)

位置 調査3区の北部, G 2 b 7区。

規模と平面形 一辺3.26mの方形である。

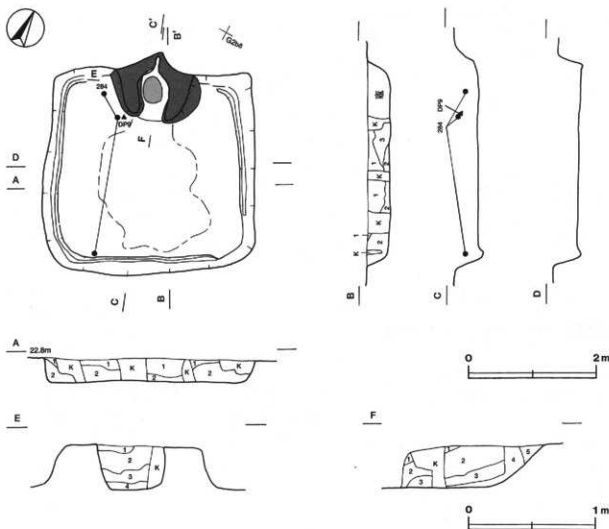
主軸方向 N-26°-W

壁 ほは直立している。壁高は41~48cmである。

壁溝 東コーナー部を除いて、壁下を巡っている。上幅22~29cm, 下幅4~8cm, 深さ4~8cmで、断面形はU字形である。

床 ほは平坦で、竈前から両壁の手前にかけて帯状に踏み固められている。

竈 北西壁の中央部にロームと粘土と砂粒で構築されている。規模は、突口部から煙道部までの最大長111cm, 最大幅142cmである。煙道部は壁外へ32cm掘り込んでおり、煙道は外傾して立ち上がっている。火床部は床面



第92図 第41号住居跡実測図

からわずかに掘りくぼめられており、火熱を受けて赤変硬化している。覆土層断面因中、第2層は崩落した天井部、第4層は火床部の覆土である。

覆土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・砂粒少量、焼土粒子微量
- 2 灰褐色 砂粒多量、ローム粒子・粘土小ブロック・粘土粒子少量、ローム大ブロック・ローム小ブロック・焼土大ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・粘土中ブロック微量
- 3 暗赤褐色 ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・砂粒少量、焼土中ブロック・炭化物微量
- 4 暗褐色 焼土粒子・炭化物中量、ローム粒子・焼土小ブロック・炭化粒子・砂粒少量、ローム小ブロック・焼土中ブロック微量
- 5 におい赤褐色 ローム粒子中量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量、ローム小ブロック・炭化物微量

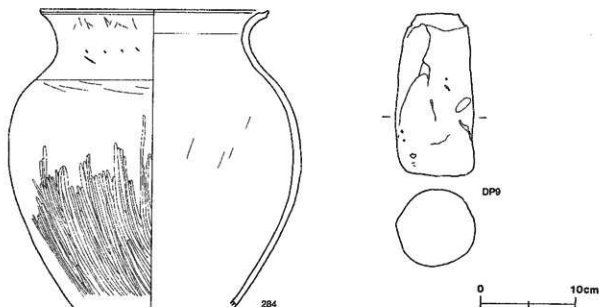
覆土 3層からなる。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量、ローム大ブロック・ローム中ブロック微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、ローム中ブロック微量
- 3 灰褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・粘土粒子少量、ローム大ブロック・ローム中ブロック微量

遺物 土師器片34点(壳・甕), 須恵器片2点(坏・高台付坏), 土製品1点(支脚)が出土している。これらの遺物は中央部と東コーナー部の覆土中層を中心に出土している。そのほか、攪乱により混入した土師質土器片1点(不明)が出土している。第93図284の土師器甕は、北西部及び南コーナー部の覆土中層から出土した破片が接合したものである。DP9の支脚は北西部の覆土中層から出土したものである。

所見 本跡に伴う出土土器はないが、時期は、覆土中層の出土土器から8世紀中葉と推定される。



第93図 第41号住居跡出土遺物実測図

第41号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第93図 284	甕 土師器	A 23.6 B (31.2)	体部から口縁部にかけての破片、体部は内角気味に立ち上がり、頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は外反し、肩部は外上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面上半ナデ。下半縦方向または斜め方向のヘラ巻き。	砂粒・白色粒子 におい褐色 普通	90% P L64 体部二次焼成

遺物番号	器種	計測値				特徴	備考
		全長(cm)	最大径(cm)	最小径(cm)	重量(g)		
第93図DP9	支脚	(17.0)	8.2	6.0	(1050.0)	円筒状	

第42号住居跡 (第94図)

位置 調査3区の北部, F 2j0区。

規模と平面形 長軸3.84m, 短軸3.50mの方形である。

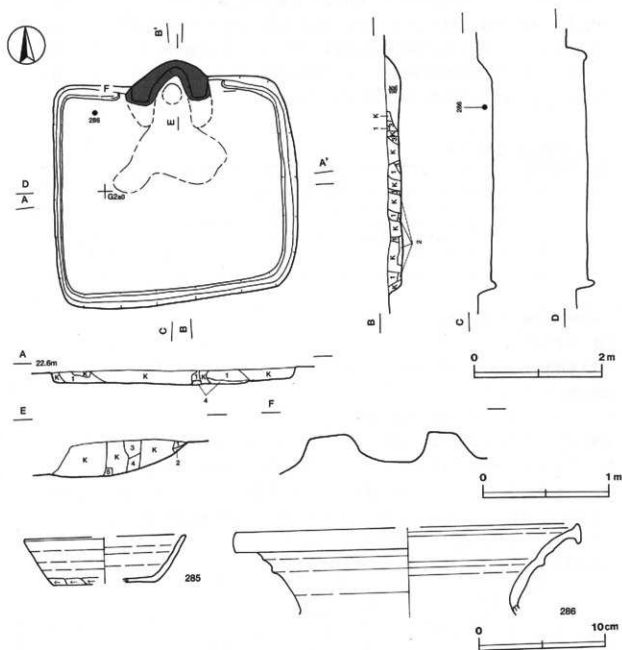
主軸方向 N-0°

壁 ほぼ直立している。壁高は29~31cmである。

壁溝 全周している。上幅20~25cm, 下幅5~12cm, 深さ6~11cmほどで, 断面形はU字形である。

床 ほぼ平坦で, 竈前の中央部がよく踏み固められている。

竈 北壁の中央部に粘土とロームで構築されている。天井部は崩落し, 袖部が残存している。規模は, 焚口部から煙道部までの最大長110cm, 袖部の最大幅136cmである。煙道部は壁外へ34cm掘り込んでおり, 煙道は緩やかに傾斜して立ち上がっている。火床部は床面からわずかに掘りくぼめられている。



第94図 第42号住居跡・出土遺物実測図

覆土層解説

1 暗赤褐色	ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・砂粒少量
2 暗褐色	ローム粒子少量、ローム小ブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量
3 濃い赤褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量
4 暗赤褐色	焼土粒子中量、焼土小ブロック・炭化粒子・灰少量、ローム粒子・砂粒微量
5 暗赤褐色	ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量

覆土 4層からなる。レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子少量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
2 暗褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック微量
3 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
4 暗褐色	ローム小ブロック・ローム小ブロック少量、ローム大ブロック・ローム粒子微量

遺物 土師器片41点(杯・高台付杯1, 甕・瓶40), 須恵器片25点(杯・高台付杯20, 甕・瓶5)が出土している。これらの遺物は、中央部の覆土下層から覆土中層を中心に出土している。そのほか、攪乱により混入した陶器片3点、磁器片1点が出土している。第94図285の須恵器杯は、竈内の覆土中から出土している。286の須恵器甕は、北西部の覆土中層から出土している。出土状況から、285は本跡に伴う土器と考えられる。

所見 本跡の時期は、竈内の出土土器から8世紀中葉と考えられる。本跡の竈前面の覆土上層から出土した破片と第43号住居跡の東壁際中央部の床面から出土した破片が接合したことから、第43号住居が使用された時期には、すでに本跡はある程度埋没していたことが考えられる。

第42号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第94図 285	須恵器杯	A [12.8]	底部から1/3縁部にかけての破片。	口縁部、体部内・外面及び底部内面	雲母・砂粒・白色 粒子 黄色色、普通	20% 体部外面煤 付着
		B 3.7	平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口ロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部2方向の手持ちヘラ削り。		
		C [8.0]				
286	須恵器甕	A [27.0]	口縁部片。口縁部は外反し、肩部は上下に突出している。	口縁部内・外面口ロナデ。	砂粒・白色粒子・ 黒色粒子 黄灰色、普通	5%
		B (7.2)				

第43号住居跡(第95・96図)

位置 調査3区の北部、F2j8区。

規模と平面形 長軸4.60m, 短軸4.50mの方形である。

主軸方向 N-6°-W

壁 ほぼ直立している。壁高は38-48cmである。

壁溝 全周している。上幅16-32cm, 下幅4-9cm, 深さ6-8cmで、断面形はU字形である。

床 中央部の一部にわずかな高まりがあるものの、ほぼ平坦であり、中央部がよく踏み固められている。

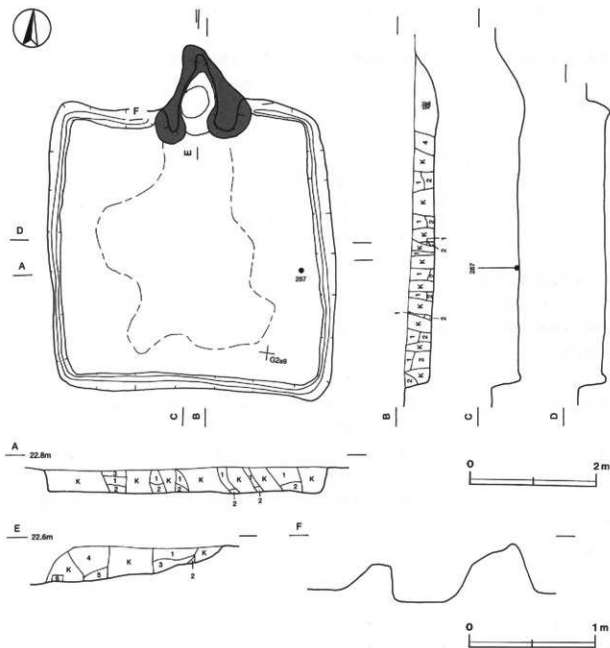
竈 北壁の中央部にロームと粘土と砂粒で構築されている。規模は、焚口部から煙道部までの最大長142cm,

袖部の最大幅156cmである。煙道部は壁外へ90cm掘り込んでおり、煙道は緩やかな傾斜で立ち上がっている。

火床部は床面からわずかに掘りくぼめられている。

覆土層解説

1 灰褐色	砂粒少量、ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量、ローム小ブロック・炭化物・炭化粒子・焼土小ブロック微量
2 暗褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
3 濃い赤褐色	焼土粒子・炭化物・炭化粒子・砂粒少量、ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック微量
4 灰褐色	ローム粒子中量、粘土粒子・砂粒少量、ローム小ブロック・焼土小ブロック・炭化粒子微量
5 暗赤褐色	焼土粒子中量、ローム粒下・炭化粒子・砂粒少量、ローム小ブロック微量
6 暗赤褐色	焼土粒子中量、炭化粒子少量、ローム粒子・焼土小ブロック・砂粒微量



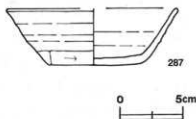
第95図 第43号住居跡実測図

覆土 4層からなる。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|--------|--|
| 1 時 褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック・炭化粒子微量 |
| 2 時 褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック・炭化粒子・砂粒微量 |
| 3 時 褐色 | ローム粒子中量、ローム大ブロック・ローム中ブロック微量 |
| 4 灰 褐色 | ローム粒子・粘土粒子・砂粒中量、ローム小ブロック少量、機土粒子・炭化粒子・粘土小ブロック微量 |

遺物 土師器片63点（坏・高台付坏12、甕・甔51）、須恵器片17点（坏・高台付坏13、甕・甔4）、鉄滓1点が出土している。これらの遺物は、北部の覆土下層を中心に出土している。そのほか、攪乱により混入した陶器片2点、瓦質土器片2点が出土している。第96図287の須



第96図 第43号住居跡出土遺物実測図

恵器坏は、東部の床面から出土した破片と第42号住居跡の竈前の覆土上層から出土した破片が接合したものである。

所見 本跡の時期は、出土土器から9世紀前葉と考えられる。第42号住居跡の竈前覆土上層から出土した土器片と本跡の床面から出土した土器片が接合したことから、本跡が使用された時期には、すでに第42号住居跡はある程度埋没していたと考えられる。

第43号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	測定値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第96図 287	坏 須恵器	A [13.3]	底部から口縁部にかけての破片。	口縁部、体部内・外側及び底部内面コクロナテ。体部下縁を持ちヘリ削り、底部凹面ヘリ削り痕を致す1方向の持ち手へリ削り。	黒母・砂粒・白色 粒状	70% P.L.63
		B 4.5	平底。体部は外傾して立ち上がり、			
		C 7.2	口縁部はわずかに外反する。			

第44号住居跡 (第97図)

位置 調査3区の北部、F3i2区。

規模と平面形 長軸3.56m、短軸3.54mの方形である。

主軸方向 N-0°

壁 ほは直立している。壁高は16~28cmである。

壁溝 全周している。上幅13~25cm、下幅3~9cm、深さ4~7cmほどで、断面形はJ字形である。

床 確認できた部分では、ほは平坦であり、竈前の中央部がよく踏み固められている。

竈 北壁の中央部にロームと粘土と砂粒で構築されている。天井部は崩落し、袖部の一部が残存している。規模は、突口部から煙道部までの最大長46cm、袖部の最大幅124cmである。煙道部は壁外へ36cm掘り込んでおり、煙道は外傾して立ち上がっている。火床部の範囲は確認できず、竈土層断面図中、第4層が火床部の覆土で、断面で確認されただけである。

竈土層解説

- 赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子多量、粘土粒子・砂粒中量
- 灰褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量、焼土中ブロック・焼土小ブロック微量
- 灰褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量、焼土中ブロック・焼土小ブロック・炭化物微量
- 暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子中量、焼土大ブロック少量
- 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、ローム中ブロック少量、焼土小ブロック・焼土粒子・ローム大ブロック・砂粒微量
- 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・粘土粒子微量

ピット 1か所。P1は長径34cm、短径27cmの楕円形で、深さ22cmである。南壁寄りの中央に位置していることと形状から、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

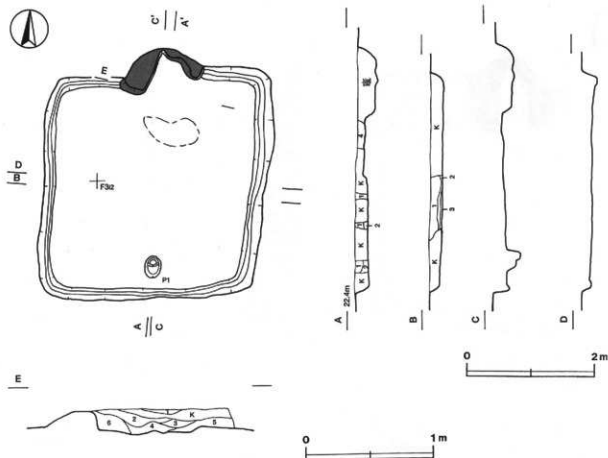
覆土 3層からなる。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化粒子微量
- 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック微量
- 暗褐色 ローム中ブロック中量、ローム大ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

遺物 土師器片19点(甕・瓶)、須恵器片19点(坏・高台付坏5、蓋1、甕・瓶13)、石器1(砥石)が出土している。これらの遺物は、覆土上層及び中層にかけて全体的に出土している。そのほか、掘削により混入した陶器片1点が出土している。いずれも細片のため、図示できるような遺物はない。

所見 本跡の出土土器はいずれも細片であるため、明確な時期判断は困難である。出土土器がいずれも8世紀から9世紀代と考えられることから、時期は8世紀から9世紀代と推定される。



第97図 第44号住居跡実測図

第45号住居跡 (第98・99図)

位置 調査2区の南部，E2f8区。西部は調査区域外である。

規模と平面形 南北軸は4.00mで，東西軸は西部が調査区域外であるため，2.90mが確認できただけである。平面形は方形または長方形である。

主軸方向 N-9°-E

壁 ほぼ直立している。壁高は55-63cmである。

壁溝 竈東側から南壁際中央部の調査区域際まで，壁下を巡っている。上幅14-28cm，下幅3-11cm，深さ4cm程度で，断面形はU字形である。

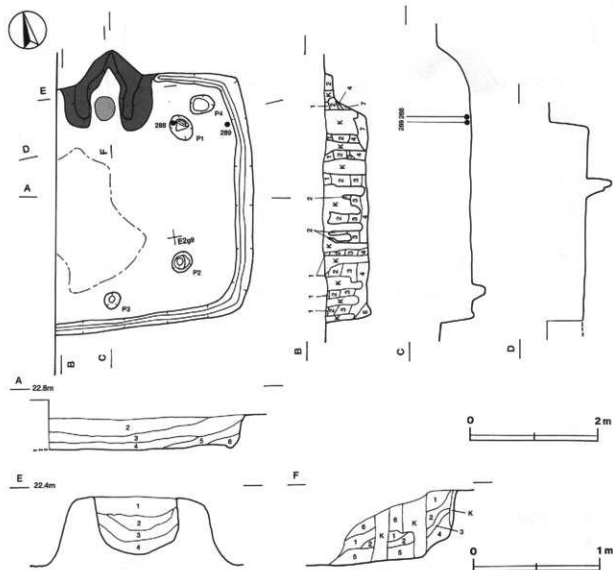
床 ほぼ平坦で，中央部がよく踏み固められている。

竈 北壁の中央部にロームと粘土で構築されている。天井部は崩落し，袖部が残存している。規模は，焚口部から煙道部までの最大長130cm，袖部の最大幅152cmである。煙道部は壁外へ46cm掘り込んでおり，煙道はほぼ直立している。火床部は径30cmで，床面からわずかに掘りくぼめられており，火熱を受け赤変硬化している。

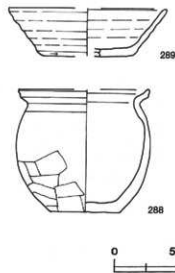
竈土層断面図中，第1-3層は崩落した天井部，第5層は火床部の覆土である。

竈土層解説

- | | |
|--------|--|
| 1 灰 褐色 | 粘土粒子・砂粒多量，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 2 暗赤褐色 | 焼土粒子・炭化粒子中量，ローム小ブロック・ローム粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック・炭化物・粘土粒子・砂粒少量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子中量，ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量 |
| 4 黒褐色 | ローム粒子中量，ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量 |
| 5 暗赤褐色 | 焼土粒子中量，ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・炭化粒子少量，焼土中ブロック微量 |
| 6 暗褐色 | ローム粒子中量，ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量 |



第98図 第45号住居跡実測図



第99図 第45号住居跡
出土遺物実測図

ピット 4か所 (P1~P4)。P1・P2はそれぞれ長径35cm・42cm、短径30cm程度の楕円形で、深さ36cm・42cmである。各コーナー寄りに配置されていることと形状から、支柱穴と考えられる。P3は径27cmの円形で、深さ26cmである。南壁中央部付近に位置していることと形状から、出入口施設に伴うピットと考えられる。P4は長軸39cm、短軸30cmの隅丸方形で、深さ19cmである。北東コーナー部に位置している。性格については不明である。

覆土 7層からなる。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。土層断面図中、第6層は壁溝の覆土である。

土層解説

- | | |
|-------|---|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量 |

5	緑色	ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量
6	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量
7	暗赤褐色	焼土粒子中量、ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子少量

遺物 土師器片148点(坏・高台付坏13, 甕・瓶135), 須恵器片45点(坏・高台付坏22, 蓋8, 甕・瓶15)が出土している。これらの遺物は, 竈を含む北壁付近を中心とした覆土中層から覆土下層にかけて出土している。そのほか, 攪乱により混入した陶器片2点が出上している。第99回288の土師器小形甕は北東部の覆土下層から正位で出土している。289の須恵器坏は, 北東部の覆土下層から逆位で出土している。

所見 本跡の時期は, 覆土下層の出土土器から8世紀後半と考えられる。

第45号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第99回 288	小形甕 土師器	A [10.3]	底部から口縁部にかけての破片。 平底。体部は内湾気味に立ち上がり、頸部はくの字状に原曲する。 口縁部は外反し、肩部は外上方向につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ。体部外周下半縁方向のヘラ削り。底部ヘラ削り。	砂粒・白色粒子 灰褐色 青濁	70% 二次焼成
		B 9.8				
		C 5.4				
289	須恵器 坏	A [12.6]	底部から口縁部にかけての破片。 平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部と体部内・外面及び底部内面 ロクロナデ。体部下縁子持ちヘラ削り。底部1方向の手持ちヘラ削り。	砂粒・白色粒子 にぶい棕色 普通	30% 体部内面採 付着
		B (3.8)				
		C [7.2]				

第46号住居跡(第100回)

位置 調査2区の南部東寄り, E3e4区。

規模と平面形 南北軸は3.54mで, 東西軸は東部が調査区域外であるため, 3.44mが確認できただけである。平面形は方形と推定される。

主軸方向 N-0°

壁 ほぼ直立している。壁高は24~28cmである。

壁溝 北壁の東部を除く壁下を巡っている。上幅13~28cm, 下幅3~7cm, 深さ4cm程度で, 断面形はU字形である。

床 床面まで達するトレンチャーによる攪乱があるが, 確認できた部分では, ほぼ平坦であり, 窓前から南壁際にかけて帯状によく踏み固められている。

竈 北壁の中央部に白色粘土とロームと砂粒で構築されている。天井部は崩落し, 袖部の一部が残存している。確認できた規模は, 突門部から煙道部までの最大長86cm, 袖部の最大幅115cmである。煙道部は壁外へ67cm掘り込んでおり, 煙道は緩やかな傾斜で立ち上がっている。竈土層断面図中, 第1・2層は袖部, 第3・6層は崩落した天井部, 第8層は火床部の覆土である。

竈土層解説

- 1 にぶい黒褐色 粘土粒子多量、ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・砂粒少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
- 3 灰褐色 ローム粒子・粘土粒子中量、ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 4 暗赤褐色 ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子中量、ローム小ブロック・粘土粒子少量
- 5 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、ローム中ブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
- 6 暗赤褐色 ローム粒子・焼土小ブロック中量、ローム小ブロック・焼土中ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 7 暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・炭化粒子少量
- 8 灰褐色 灰多量、焼土粒子中量、焼土小ブロック・炭化粒子少量

ピット 1か所。P1は, 長径30cm, 短径24cmの楕円形で, 深さ20cmである。南壁際の中央に位置していることと形状から, 出入り口施設に伴うピットと考えられる。

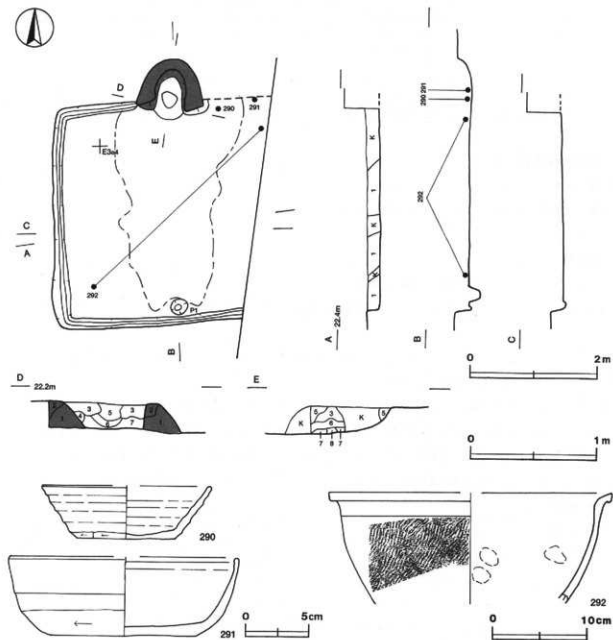
覆土 単一層である。攪乱が激しい。覆土が薄く1層であることなどから、堆積状況については不明である。

土層解説

I 階 褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量

遺物 土師器片17点(坏・高台付坏7, 甕・瓶10), 須恵器片33点(坏・高台付坏10, 蓋2, 鉢6, 甕・瓶15), 鉄製品3点(不明)が出土している。これらの遺物は, 南東部を中心に, 覆土上層から覆土下層にかけて出土している。そのほか, 攪乱により混入した陶器片3点が出土している。第100図290の須恵器坏は北部の覆土下層から正位で出土している。291の須恵器坏は, 北東部の覆土下層から出土した破片と覆土中層から出土した破片が接合したものである。292の須恵器鉢は, 南西コーナー部の床面から出土した破片と北東部の床面から出土した破片が接合したものである。出土状況から, 292は本跡に伴う土器と考えられる。

所見 本跡の時期は, 床面や覆土下層の出土土器から8世紀後葉と考えられる。



第100図 第46号住居跡・出土遺物実測図

第46号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第100回 290	坏 須恵器	A [13.4]	底部から口縁部にかけての破片。	口縁部、体部内・外面及び底部内面	雲母・砂粒・白色 粒子 灰色、普通	50%
		B 4.2	平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口ロナデ。体部下端手持ちへつ削り。		
		C 7.6				
291	坏 須恵器	A [18.1]	底部から口縁部にかけての破片。	口縁部、体部内・外面及び底部内面	砂粒・白色粒子 明赤褐色 普通	50% P L63 体部外面草 付着
		B 6.3	平底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口ロナデ。体部下端回転へつ削り。底部回転へつ削り。		
		C 11.5				
292	鉢 須恵器	A [29.4]	外部から口縁部にかけての破片。	口縁部内・外面口ロナデ。体部	砂粒・白色粒子 灰色 普通	20%
		B (11.6)	体部は外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。	外面腹方向の平行叩き目、内面に無文の帯具根残る。		

第47号住居跡 (第101回)

位置 調査2区の南部, E 3 b 4区。

重複関係 北東部で第48号住居跡を掘り込んでおり、本跡の方が新しい。

規模と平面形 長軸4.10m, 短軸3.82mの方形である。

主軸方向 N-3°-W

壁 ほぼ直立している。壁高は30~32cmである。

壁溝 竈西側から南東コーナー部にかけて、壁下を巡っている。上幅17~21cm, 下幅4~8cm, 深さ4~6cmで、断面形はU字形である。

床 ほぼ平坦であり、竈前から南壁下まで、中央部が帯状に踏み固められている。

竈 北壁の中央部に砂質粘土とロームで構築されている。天井部は崩落し、袖部の一部が残存している。規模は、焚口部から掃道部までの最大長105cm, 袖部の最大幅125cmである。煙道部は壁外へ64cm掘り込んでおり、煙道は緩やかな傾斜で立ち上がっている。火床部は床面から6cmほど掘りくぼめられており、火熱を受けて赤変色している。竈土層断面図中、第2層は崩落した天井部、第3層は火床部である。

覆土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・砂粒少量
- 2 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子中量、ローム小ブロック・焼土中ブロック・炭化物・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量
- 3 暗赤褐色 ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子中量、ローム小ブロック・ローム小ブロック・焼土中ブロック・炭化物・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量
- 4 赤褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・砂粒少量

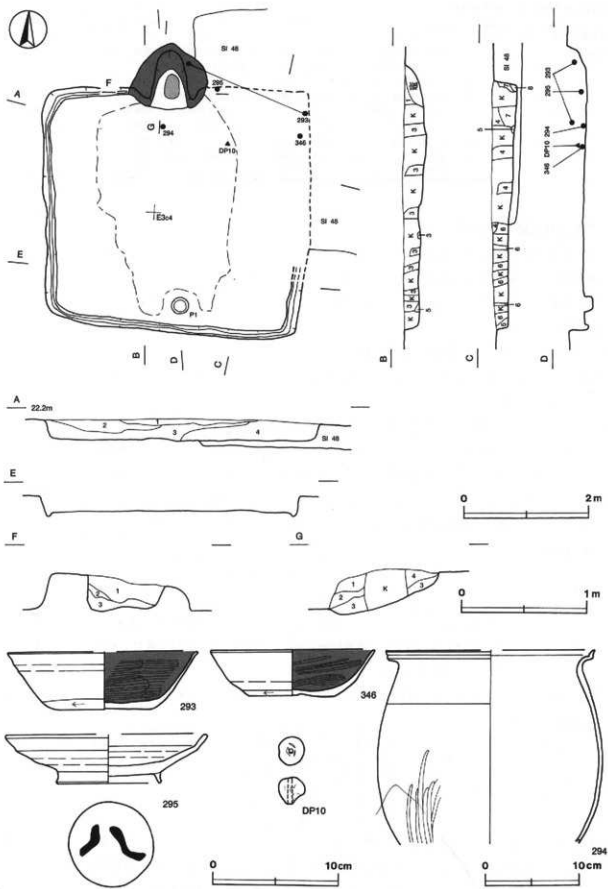
ピット 1か所。P1は径27cmの円形で、深さ12cmである。南壁寄りの中央に位置していることと形状から、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 8層からなる。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・砂粒少量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量
- 4 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・砂粒少量
- 5 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 6 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量
- 7 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量
- 8 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・砂粒少量

遺物 土師器片188点(坏・高台付坏16, 甕・瓶172), 須恵器片158点(坏・高台付坏76, 甕1, 蓋6, 長頸瓶1, 甕・瓶7), 土製品2点(支脚, 球状土鏃), 鉄器1点(鎌)が出土している。これらの遺物は、中央部及び東壁際中央部を中心に、覆土中層から覆土下層にかけて出土している。そのほか、攪乱により混入した陶器片1点が出土している。第101回293の土師器坏は、北東コーナー部の覆土中層から出土した破片と竈内の覆土中か



第101图 第47号住居跡・出土遺物実測図

ら出土した破片が接合したものである。346の土師器環は、東壁際の床面から正位で出土している。294の土師器甕は、北部の床面から逆位で出土している。295の須恵器甕は、北壁際の覆土下層から逆位で出土している。DP10の球状土鍾は、北部の覆土下層から出土している。出土状況から、291・346は本跡に伴う土器と考えられる。

所見 本跡の時期は、床面や覆土下層の出土土器から9世紀中葉と考えられる。

第47号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器 種	計測値 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第101回 293	土 師 器 環	A [15.1]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面及び体部外面ロクロナデ。体部・底部内面ロクロナデ後、ヘラ磨き。体部下端・底部回転ヘラ削り。内面黒色処理。	粒土・雲母・砂粒・白色粒子 にふい橙色 普通	40% 底部外面貼付者
		B 4.7				
		C 7.6				
294	土 師 器 甕	A [22.0]	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎気味に立ち上がり、頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は外反し、端部は外上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ、外面下平ヘラ磨き。	砂粒・白色粒子 にふい橙色 普通	40% 体部外面貼付者
		B (20.3)				
295	須 恵 器 甕	A [16.1]	高内部から口縁部にかけての破片。平底。短いハの字状の高台が付く。体部は大きく開き、口縁部との境に横を付す。口縁部は外反しながら立ち上がる。	口縁部、体部内・外面及び底部内面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け。	砂粒・白色粒子 灰黄色 普通	50% P L63 底部外側に「八」の墨台
		B 4.0				
		D 8.3				
		E 1.0				
346	土 師 器 環	A 13.2	定形。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部及び体部外面ロクロナデ。体部・底部内面ロクロナデ後、ヘラ磨き。体部と蓋面転へり開き。底部回転ヘラ削り残を残す、回転ヘラ削り。内面黒色処理。	砂粒・雲母・白色 粒子 明褐色 普通	100% P L63
		B 3.8				
		C 6.8				

遺物番号	器 種	計 測 値				特 徴	備 考
		径 (cm)	長さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)		
第101回 DP10	球 状 土 鍾	21	21	0.3	8.0	表面ナデ	P L70

第48号住居跡 (第102・103図)

位置 調査2区の南部東寄り、E 3 b 4区。

重複関係 南西部が第47号住居に掘り込まれており、本跡の方が古い。

規模と平面形 南北軸は3.78mで、東西軸は東部が調査区域外であるため、3.46mが確認できただけである。

平面形は方形または長方形と考えられる。

主軸方向 N-0°

壁 ほぼ直立している。壁高は30~32cmである。

床 ほぼ平坦であり、中央部がよく踏み固められている。

竈 北壁の中央部に砂質粘土とロームで構築されている。天井部は崩落し、袖部が残存している。規模は、焚口部から煙道部までの最大長105cm、袖部の最大幅149cmである。煙道部は壁外へ57cm掘り込んでおり、煙道は火床面から外傾して立ち上がっている。火床部は火床面からわずかに掘りくぼめられ、赤変硬化している。竈上層断面図中、第2・3層は火床部の覆土である。

甕土層解説

- 1 暗赤褐色 ローム粒子中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 暗赤褐色 ローム粒中量、ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量
- 3 暗赤褐色 ローム粒子中量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量
- 4 灰褐色 ローム粒子・焼土粒子・砂粒中量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 5 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 6 灰褐色 炭化粒子・焼土粒子・砂粒中量、焼土粒子・炭化物少量
- 7 にいふ褐色 焼土粒子中量、ローム小ブロック・焼土小ブロック・炭化粒子・焼土粒子・砂粒少量

ピット 1か所。P1は長径24cm、短径20cmの楕円形で、深さ12cmである。南壁際中央部の付近に位置していることと形状から、出入口施設に伴うピットと考えられる。

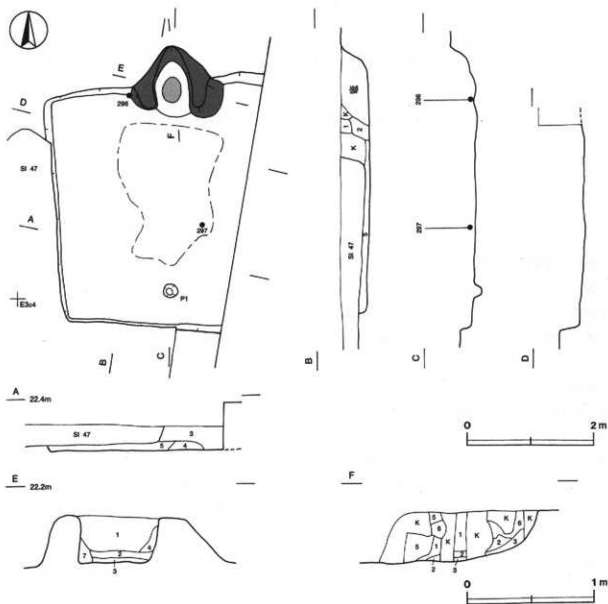
覆土 5層からなる。堆積状況がレンズ状であることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

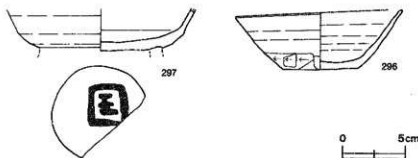
- | | | |
|---|-----|---|
| 1 | 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・砂粒少量 |
| 2 | 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量、ローム中ブロック・焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量 |
| 3 | 黒褐色 | ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 4 | 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量 |
| 5 | 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 |

遺物 土師器片58点(坏・高台付坏5, 甕・瓶53), 須恵器片33点(坏・高台付坏18, 蓋3, 高盤1, 甕・瓶11)が出土している。これらの遺物は、北部を中心に覆土中層から覆土下層にかけて出土している。そのほか、攪乱により混入した陶器片1点が出土している。第103図296の須恵器坏は北壁際の覆土下層から正位で、297の須恵器高台付坏は中央部の覆土下層から逆位で出土している。

所見 本跡の時期は、覆土下層の出土土器から、9世紀中葉と考えられる。重複関係から第47号住居跡より古い。



第102図 第48号住居跡実測図



第103図 第48号住居跡出土遺物実測図

第48号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第103図 296	坏 須恵器	A 13.1	底部から口縁部の一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面及び底部内面ロクロナデ。体部下端手持ちへう割り。底部1方向の手持ちへう割り。	小礫・雲母・砂粒・白色粒子 褐色色、普通	90% P L G3
		B 4.7				
		C 5.8				
297	高台付坏 須恵器	B (3.4)	底部から体部にかけての破片。体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面と底部内面ロクロナデ。底部回転へう割り後、高台貼り付け製。	小礫・雲母・砂粒・白色粒子 にぶい褐色、普通	20% P L G3 底部外面に「田」の墨書

第49号住居跡（第104・105図）

位置 調査2区の中央部，D 3 f 2区。

重複関係 北東コーナー部で第150号土坑を掘り込んでおり，本跡の方が新しい。

規模と平面形 長軸3.44m，短軸3.30mの方形である。

主軸方向 N-15°-E

壁 ほぼ直立している。壁高は52～60cmである。

壁溝 北東コーナー部を除いて，壁下を巡っている。上幅17～28cm，下幅4～10cm，深さ6～8cmで，断面形はJ字形である。

床 ほぼ平坦であり，中央部が踏み固められている。

竈 北壁の中央部に砂質粘土とロームで構築されている。天井部は崩落し，袖部が残存している。規模は，焚口部から煙道部までの最大長120cm，袖部の最大幅138cmである。煙道部は壁外へ40cm掘り込んでおり，煙道は外傾して立ち上がっている。火床部は中央部にトレンチャーによる攪乱を受け，焼上がわずかに確認できただけである。竈土層断面図中，第3・4層は火床部の覆土，第2・5層は崩落した天井部である。

竈土層解説

- 1 鮮赤褐色 ローム粒子・焼上小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量
- 2 灰褐色 粘土粒子・砂粒中量，ローム粒子・焼上小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子中量，ローム粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子・粘土粒子少量
- 4 深褐色 炭化物・炭化粒子中量，ローム粒子・焼上小ブロック・焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量
- 5 にぶい赤褐色 焼土粒子・粘土粒子中量，ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子少量
- 6 暗赤褐色 ローム粒子・焼上中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量
- 7 褐色 粘土粒子・砂粒中量，ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量

ピット 1か所。P1は長径28cm，短径21cmの楕円形で，深さ21cmである。南壁寄りの中央に位置することから，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

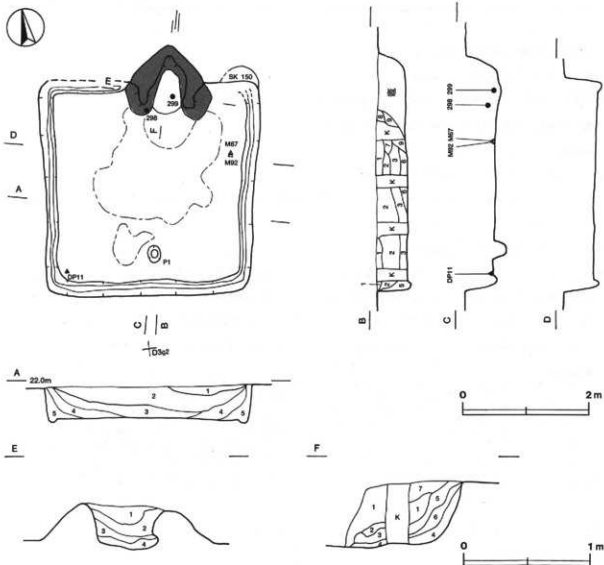
覆土 9層からなる。レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説

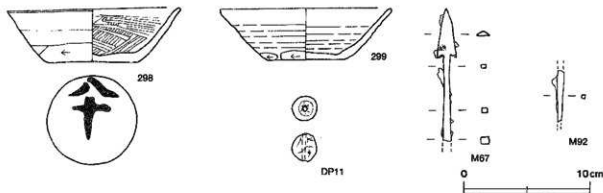
- | | | |
|---|-----|-----------------------------------|
| 1 | 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 2 | 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量, ローム中ブロック・焼土粒子少量 |
| 3 | 暗褐色 | ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量 |
| 4 | 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量 |
| 5 | 暗褐色 | ローム小ブロック少量, ローム粒子微量 |
| 6 | 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 7 | 暗褐色 | ローム粒子微量 |
| 8 | 黒褐色 | ローム粒子・粘土粒子少量 |
| 9 | 暗褐色 | ローム粒子・粘土粒子少量 |

遺物 土師器片98点(坏・高台付坏16, 甕・瓶82), 須恵器片152点(坏・高台付坏67, 蓋10, 甕・瓶75), 土製品1点(球状土鉢), 鉄器2点(鐵), 鉄滓1点が出土している。これらの遺物は, 中央部の覆土下層から出土している。そのほか, 混入した縄文土器片13点, 攪乱により混入した磁器片2点, 骨片1点が出土している。第105図298の土師器坏は, 西袖部先端部上の覆土下層から出土している。299の須恵器坏は, 竈内の覆土下層と覆土中から出土した破片が接合したものである。M67・92の鐵は, 東壁際の床面から出土している。M67とM92は接合面はないが, 同一地点から出土していることから同一個体の可能性が考えられる。DP11の球状土鉢は, 南西コーナー部の覆土下層から出土している。

所見 本跡の時期は, 竈内の覆土中や覆土下層の出土土器から, 9世紀中葉と考えられる。



第104図 第49号住居跡実測図



第105図 第49号住居跡出土遺物実測図

第49号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値 (cm)		器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第105図 298	坏 土師器	A	13.7	定形。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外側及び体部外面ロクロナデ。体部・底面内面ロクロナデ。ヘラ置き。体部下蓋子持ちヘラ削り。底部1方向の手持ちヘラ削り。内面黒色処理。	砂粒・白色粒子 明赤褐色	100% P.L.63 体部・底面内面黒 付着。底面内面に 「八」の書き
		B	4.4				
		C	7.1				
299	坏 土師器	A	13.6	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部及び体部内・外面と底面内面ロクロナデ。体部下蓋子持ちヘラ削り。底部1方向の手持ちヘラ削り。	砂粒・白色粒子 にぶい赤褐色 普通	20% 体部・底部 外面黒付着
		B	4.1				
		C	6.0				

遺物番号	器種	計測値				特徴	備考
		径 (cm)	長さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)		
第105図 DP11	球状土師	2.0	2.2	0.3	7.9	表面ナデ	P.L.70

遺物番号	器種	計測値							材質	特徴	備考	
		全長 (cm)	胴身長 (cm)	胴身幅 (cm)	胴体部長 (cm)	発見部幅 (cm)	長さ (cm)	厚さ (cm)				重量 (g)
第105図 M67	甗	(10.6)	3.9	(1.5)	(6.9)	0.6	-	0.4	(12.5)	鉄	瓦三列式、基形の大型	M67と同一群 M92
M92	甗	(4.1)	-	-	-	-	(4.1)	0.3	(1.5)	鉄	基部片	M67と同一群 M92

第51号住居跡 (第106・107図)

位置 調査2区の北東部、D3c5区。

規模と平面形 長軸3.36m、短軸2.62mの長方形である。

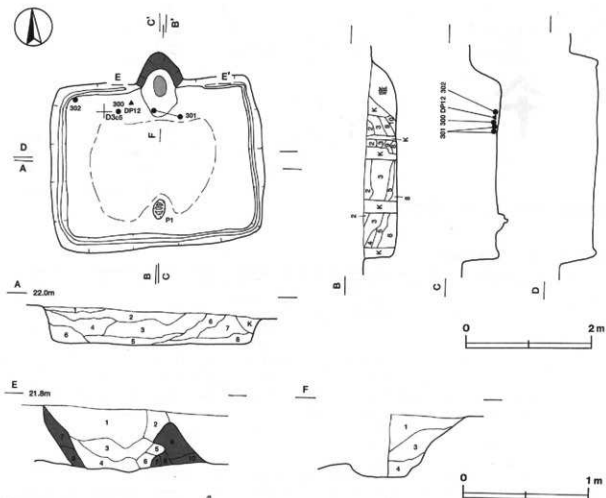
主軸方向 N-0°

壁 外傾して立ち上がっている。壁高は47~57cmである。

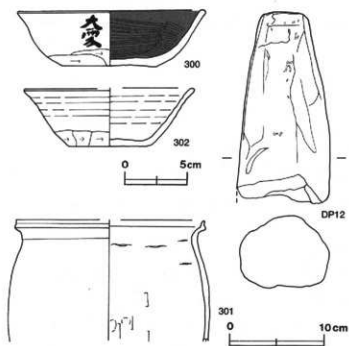
壁溝 竈部分を除いて、壁下を巡っている。上幅12~26cm、下幅3~6cm、深さ4~6cmで、断面形はU字形である。

床 ほほ平坦であり、中央部が踏み固められている。

竈 北壁の中央部にロームと粘土で構築されている。天井部は崩落し、袖部は壁際の一部が残存している。規模は、焚口部から煙道部までの最大長110cm、袖部の最大幅140cmと推定される。煙道部は壁外へ52cm掘り込んでおり、煙道は火床面から外傾して立ち上がっている。火床部は床面から4cmほど掘りくぼめられており、火熱を受けて赤変硬化している。竈土層断面図中、第3層は崩落した天井部、第4層は火床部の覆上、第7~10層は袖部である。



第106図 第51号住居跡実測図



第107図 第51号住居跡出土遺物実測図

竈土層解説

- | | |
|---------|---|
| 1 黒褐色 | ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量 |
| 3 極暗赤褐色 | 焼土粒子中量、ローム小ブロック・ローム粒子・炭化物・炭化粒子少量 |
| 4 暗赤褐色 | 焼土中ブロック・焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量 |
| 5 暗赤褐色 | 焼土粒子多量、焼土小ブロック中量、ローム小ブロック・ローム粒子・焼土中ブロック・炭化物・炭化粒子少量 |
| 6 暗赤褐色 | ローム粒子・焼土粒子中量、ローム小ブロック・焼土中ブロック・ローム小ブロック・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量 |
| 7 暗赤褐色 | ローム粒子・焼土粒子中量、ローム小ブロック・ローム中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 8 褐色 | ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量 |
| 9 暗褐色 | ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量 |
| 10 暗褐色 | ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、焼土粒子少量 |

ピット 1か所。P1は長径30cm、短径19cmの楕円形で、深さ16cmである。南壁寄りの中央に位置していることと形状から、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 10層からなる。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

1	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量
2	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量、ローム中ブロック微量
3	黒褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
4	黒褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量、ローム大ブロック微量
5	黒褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
6	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量
7	黒褐色	ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量
8	黒褐色	焼土粒子・炭化物中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック・炭化粒子少量
9	暗赤褐色	焼土粒子・砂質粘土粒子中量、ローム粒子・焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子少量
10	暗赤褐色	焼土小ブロック・焼土粒子中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック・炭化物・炭化粒子少量

遺物 土師器片132点(環・高台付環21、甕・瓶111)、須恵器片145点(環・高台付環56、蓋13、鉢1、甕・瓶75)、土製品1点(支脚)、鉄製品2点(不明)、鉄滓1点が出土している。これらの遺物は、西部と竈前を中心に覆土上層から覆土下層にかけて出土している。そのほか、混入した縄文土器片1点が出土している。第107図300の土師器環は北部の床面から逆位で出土している。301の土師器甕は、北部覆土下層から出土した破片と竈前の覆土下層から出土した破片が接合したものである。302の須恵器環は、北西コーナーの覆土下層から正位で出土している。DP12の支脚は、北部の覆土下層から出土している。出土状況から、300は本跡に伴う土器と考えられる。

所見 本跡の時期は、床面の出土土器から9世紀後葉と考えられる。

第51号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考	
第107図 300	土師器 環	A 14.8	完形。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面及び体部外面クロロナデ。体部・底部内面クロロナデ。ヘラ磨き。体部下端手持ちヘラ磨り。底部2方向の手持ちヘラ磨り。	小粒・砂粒・白色粒子 にふいぶ褐色 普通	100% P.L.64 体部外面に「犬」の磨き	
		B 4.6					
		C 7.4					
301	土師器 甕	A [19.6]	体部から口縁部にかけての破片。体部は内湾加底に立ち上がり、頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は外反し、端部は上方にのみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面輪轆み痕を残す。ヘラナデ。擦痕江痕残る。	砂粒・白色粒子 にふいぶ褐色 普通	10% 体部外面煤付着	
		B (12.6)					
302	須恵器 環	A [13.5]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部、体部内・外面及び底部内面クロロナデ。体部下端手持ちヘラ磨り。底部2方向の手持ちヘラ磨り。	砂粒・炭母・白色粒子 にふいぶ褐色。普通	60% P.L.63 口縁部内・外面煤付着	
		B 4.6					
		C 6.4					
計 測 値							
遺物番号	器 種	計 測 値				特 徴	備 考
		全長(cm)	最大径(cm)	最小径(cm)	重量(g)		
第107図DP12	支 脚	(20.2)	(9.7)	(7.7)	(1030.0)	円筒形。基部欠損	

第52号住居跡 (第108図)

位置 調査2区の中央部、D3b3区。

規模と平面形 長軸3.14m、短軸2.96mの方形である。

主軸方向 N-2°-W

壁 壁高は57~61cmで、ほぼ直立している。

壁溝 全周している。上幅22~30cm、下幅4~13cm、深さ4~8cmで、断面形はU字形である。

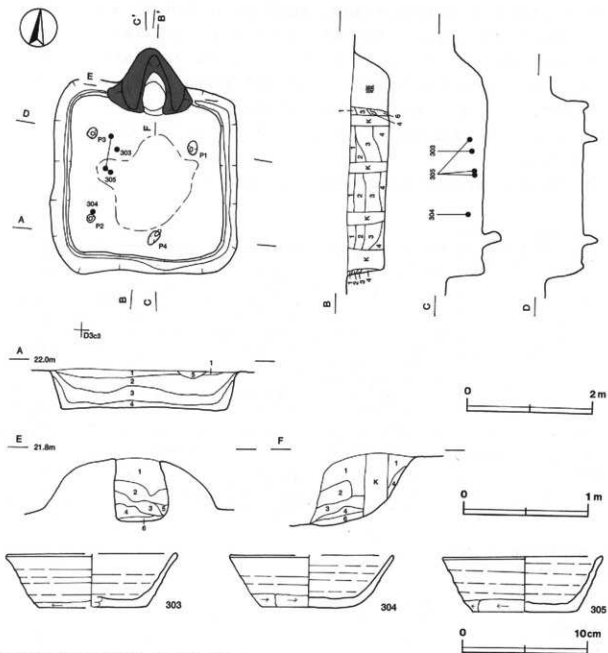
床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。

竈 北壁の中央部にロームと粘土で構築されている。天井部は崩落し、袖部が残存している。規模は、焚口部から煙道部までの最大長105cm、袖部の最大幅136cmである。煙道部は壁外へ62cm掘り込んでおり、煙道は火床面から外傾して立ち上がっている。竈土層断面図中、第2層は崩落した天井部、第6層は火床部の覆土である。

竈土層解説

- | | |
|---------|--|
| 1 黒 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量 |
| 2 濃い黄褐色 | 粘土粒子・砂粒多量、ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 3 暗赤褐色 | 焼土粒子中量、ローム小ブロック・ローム粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量 |
| 4 暗赤褐色 | 焼土粒子多量、焼土小ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量 |
| 5 灰 褐色 | 粘土粒子・砂粒中量、ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 6 暗赤褐色 | 焼土粒子多量、焼土小ブロック・炭化粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量 |

ピット 4か所（P1～P4）。P1～P3は長径13～22cm、短径13～15cmの楕円形で、深さ22～24cmである。北東・南西・北西の各コーナー寄りに配置されていることと形状から、支柱穴と考えられる。P4は長径25cm、



第108図 第52号住居跡・出土遺物実測図

短径17cmの楕円形で、深さ29cmである。南壁寄りの中央に位置していることと形状から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 6層からなる。レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量
- 3 極暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 5 暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子・焼土小ブロック・炭化粒子少量
- 6 暗褐色 砂粒中量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量

遺物 土師器片144点(坏・高台付坏8, 甕・瓶136), 須恵器片168点(坏・高台付坏116, 盤2, 蓋10, 甕・瓶40)が出土している。これらの遺物は、竈周辺と南西部を中心に覆土上層から覆土下層にかけて出土している。そのほか、攪乱により混入した骨片1点が出土している。第108図303の須恵器坏は、西部の覆土中層から逆位で、304の須恵器坏は、南西部の覆土中層から正位で出土している。305の須恵器坏は、西部の覆土中層及び覆土下層から出土した破片が接合したものである。

所見 本跡の時期は、覆土中層から下層の出土土器から8世紀後葉と推定される。

第52号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第108図 303	須恵器 坏	A [13.4]	底部から口縁部にかけての破片、平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面及び底部内面ロクロナデ。体部下層・底部回転ヘラ削り。	小礫・雲母・砂粒・白色粒子 黄灰色、普通	10% 体部外面火燂
		B 4.3				
		C [8.4]				
304	坏 須恵器	A [13.0]	体部から口縁部の一部欠損。平底。体部は外傾しながら立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面及び底部内面ロクロナデ。体部下層手持ヘラ削り、底部回転ヘラ削り痕を残す多方向の手持ちヘラ削り。	雲母・砂粒・白色粒子 灰黄色 普通	70% P L64 体部外面燂付着
		B 4.2				
		C 7.9				
305	坏 須恵器	A 12.8	体部から口縁部の一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面及び底部内面ロクロナデ。体部下層手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ削り。	雲母・砂粒・白色粒子 黄灰色、普通	80% P L64 口縁部から 底部内面火燂
		B 4.5				
		C 8.2				

第53号住居跡 (第109図)

位置 調査2区の北部, C 3h5区。

規模と平面形 長軸4.04m, 短軸3.74mの方形である。

主軸方向 N-10°-E

壁 はほぼ直立している。壁高は46~51cmである。

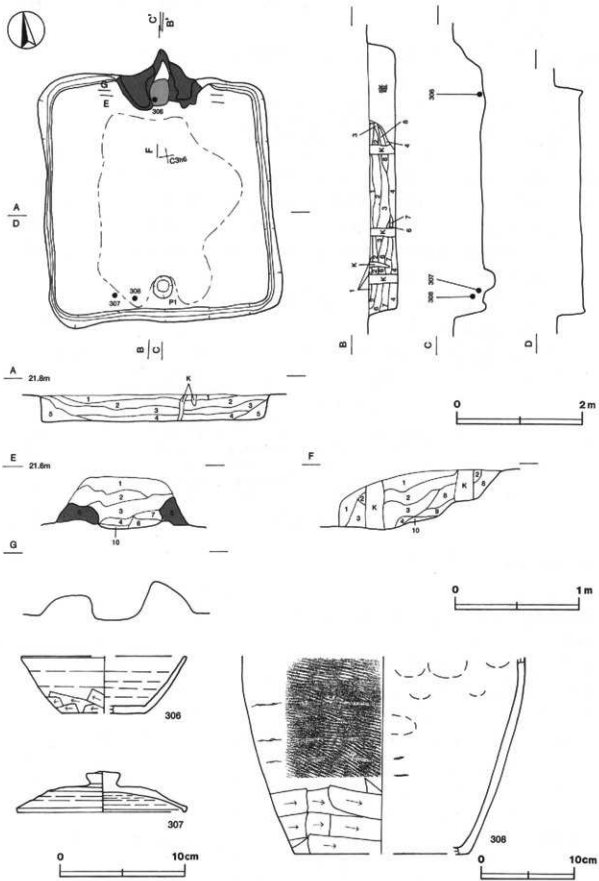
壁溝 全周している。上幅22~30cm, 下幅4~13cm, 深さ4~8cmで、断面形はし字形である。

床 はほぼ平坦である。中央部がよく踏み固められている。

竈 北壁の中央部に粘土とロームで構築されている。天井部は崩落し、袖部が残存している。規模は、焚口部から煙道部までの最大長95cm, 袖部の最大幅130cmである。壁外への掘り込みは40cmほどで、煙道は火床面から緩やかな傾斜で立ち上がっている。火床部は床面からわずかに掘りくぼめられており、火熱を受けて変色硬化している。竈土層断面図中、第5層は袖部、第10層は火床部の覆土である。

竈土層解説

- 1 黒褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量
- 2 砂質粘土粒子中量、ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量
- 3 黒暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量
- 4 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子中量、ローム粒子・焼土中ブロック・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量
- 5 暗褐色 粘土粒子・砂粒多量、ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 6 暗赤褐色 焼土粒子・粘土粒子・砂粒中量、ローム粒子・焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子少量
- 7 灰褐色 粘土粒子・砂粒中量、ローム粒子・焼土粒子少量



第109图 第53号住居跡・出土遺物実測図

- 8 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量、ローム小ブロック・ローム粒子微量
 9 暗赤褐色 ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子少量
 10 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子多量、ローム粒子・炭化粒子中量、ローム小ブロック少量

ピット 1か所。P1は長径36cm、短径29cmの楕円形で、深さ19cmである。南壁寄りの中央に位置していることと形状から、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 8層からなる。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
 2 暗褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量
 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
 4 暗褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量
 5 黒褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量
 6 暗褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子微量
 7 黒褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量
 8 暗褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量

遺物 土師器片172点(坏・高台付坏24, 鉢1, 甕・瓶147), 須恵器片129点(坏・高台付坏47, 蓋39, 鉢1, 長頸瓶1, 甕・瓶41), 鉄滓1点が出土している。これらの遺物は、南壁付近の覆土上層から覆土下層にかけて出土している。そのほか、混入した縄文土器片6点が出土している。第109図306の須恵器坏は、壺内の覆土下層から出土している。307の須恵器蓋は、南壁際中央部の覆土下層から逆位で、308の須恵器甕は南壁際中央部の覆土下層から斜位で出土している。出土状況から、306は本跡に伴う土器と考えられる。

所見 本跡の時期は、壺内の出土土器から9世紀前後と考えられる。

第53号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第109図 306	坏 須恵器	A [13.2]	底部から口縁部にかけての破片。	口縁部と体部内・外面及び底部内面 ロクロナデ。体部下手持ちへう削り。 底部1方向の手持ちへう削り。	小礫・砂粒・雲母・ 白色粒子 に白い褐色。青透	10%
		B 4.6	平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。			
		C [6.6]				
307	蓋 須恵器	A 13.4	口縁部から外周部の一部欠損。天井部は笠形で、擬宝珠状のつまみが付く。口縁部は短く折り返している。	口縁部及び外周部内・外面ロクロナデ。天井部短くへう削り後、つまみ貼り付け。	砂粒・雲母・白色 粒子 黄灰色 青透	80% P.L.64
		B 3.3				
		F 2.7				
		G 1.3				
308	甕 須恵器	B (20.8)	底部から体部にかけての破片。体部は外傾して立ち上がる。	体部外面横及び斜め方向の平行叩き、下半へう削り。体部内面無文の当て具痕。内・外面輪摩り出痕。	小礫・雲母・砂粒・ 白色粒子 灰黄色。青透	10%
		C [18.4]				

第54号住居跡(第110・111図)

位置 調査2区の北部, C3f4区。

規模と平面形 長軸3.44m, 短軸3.38mの方形である。

主軸方向 N-0°

壁 ほぼ直立している。壁高は48~60cmである。

壁溝 全周している。上幅14~32cm, 下幅3~12cm, 深さ4~6cmで、断面形はU字形である。

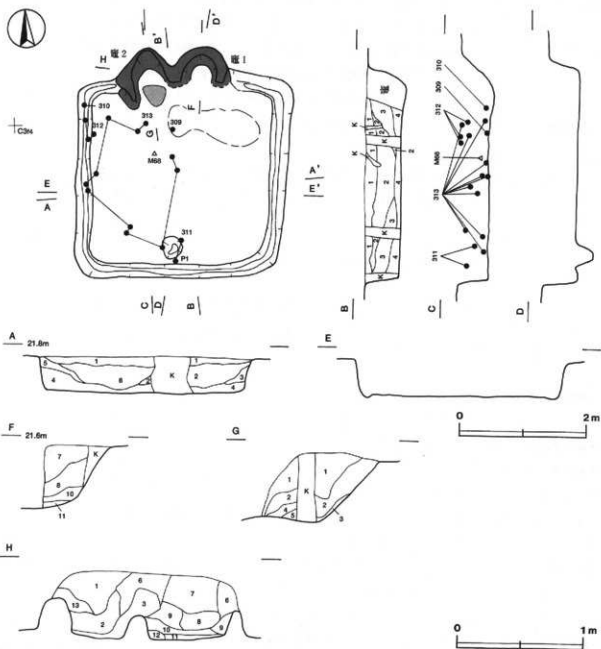
床 ほぼ平坦である。中央部がよく踏み固められている。

竈 北壁の中央部に竈1が、北壁の中央部西寄りに竈2が、それぞれ粘土とロームで構築されている。それぞれの天井部は崩落し、竈2の西袖部が残存し、他の袖部は一部が埋積に残存しているだけである。竈1の規模は、焚口部から煙道部までの最大長55cm, 袖部の最大幅89cmである。煙道部は壁外へ35cm掘り込んでおり、煙道は床面から外傾して立ち上がっている。火床部は擾乱を受け、状況が確認できなかった。竈2の規模は、焚口部から煙道部までの最大長96cm, 最大幅90cmである。煙道部は壁外へ40cm掘り込んでおり、煙道は火床面か

ら外傾して立ち上がっている。火床部は床面とはほぼ同じ高さで、赤変している。竈土層断面図中、第5層が竈2の火床部の覆土である。袖部では竈2の西袖部だけが残存していることと竈土層断面図から、竈1から竈2に作り替えが行われたと考えられる。

竈土層解説

- | | |
|---------|--|
| 1 暗赤褐色 | ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量 |
| 2 暗赤褐色 | 焼土粒子中量、ローム小ブロック・ローム粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量 |
| 3 近い赤褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量 |
| 4 暗赤褐色 | 焼土小ブロック・焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量 |
| 5 灰赤褐色 | 焼土粒子・灰多量、焼土小ブロック中量、ローム粒子・焼土中ブロック・炭化粒子少量 |
| 6 暗赤褐色 | ローム粒子中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量 |
| 7 暗赤褐色 | ローム粒子中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 8 暗赤褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 9 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量、ローム中ブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量 |
| 10 暗赤褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量 |
| 11 暗赤褐色 | 焼土粒子・炭化粒子中量、ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量 |
| 12 灰褐色 | 粘土粒子・砂粒中量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 13 暗赤褐色 | 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物中量、ローム小ブロック・ローム粒子・焼土中ブロック・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量 |



第110図 第54号住居跡実測図

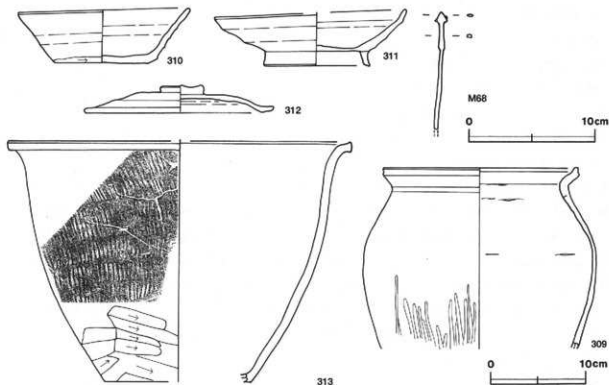
ピット 1か所。P1は長径36cm、短径32cmの楕円形で、深さ30cmである。南壁寄りの中央に位置していることと形状から、出入口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 6層からなる。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|-------|--|
| 1 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量 |
| 5 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量、ローム中ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 6 黒褐色 | ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 |

遺物 土師器片230点(坏・高台付坏7, 甕・甔223), 須恵器片190点(坏・高台付坏82, 蓋19, 長頸瓶1, 甕・甔88), 鉄器・鉄製品2点(鐵, 釘)が出土している。これらの遺物は、覆土上層においては西壁際から、覆土下層においては中央部から多数出土している。そのほか、混入した縄文土器片1点, 攪乱により混入した陶器片2点が出土している。第111図309の土師器甕は、北部の覆土下層から出土している。310の須恵器坏は、北西コーナー壁際の覆土下層から正位で出土している。311の須恵器盖は、南部の覆土上層及び覆土中層から出土した破片が接合したものである。312の須恵器蓋は、西部の覆土上層から出土した破片が接合したものである。313の須恵器甔は、南部の覆土中層と下層, 西壁際の覆土中層, 北西部の覆土中層と下層, 中央部の覆土下層と床面から出土した破片が接合したものである。M68の鐵は中央部の覆土下層から出土している。所見 本跡の時期は、覆土下層の出土土器から8世紀後葉と考えられる。



第111図 第54号住居跡出土遺物実測図

第54号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第111図 309	甕 土 師 器	A 20.2	体部から口縁部にかけての破片。体部は内側気味に立ち上がり、頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は外反し、肩部は上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面上手ナデ、下手ヘラ磨き。体部内外面輪転み痕を残す。ナデ。	砂粒・白色粒子にぶい・灰色普通	30% 体部外面煤付着
		B (18.9)				
310	坏 須 志 器	A 13.5	底部から口縁部の一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部と体部内・外面及び底部内面口クロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ削り痕を残す。多方向の手持ちヘラ削り。	雲母・砂粒・白色粒子 灰色普通	90% P.L.64
		B 4.5				
		C 7.4				
311	高台付坏 須 志 器	A [15.2]	高台部から口縁部にかけての破片。軽く垂下する高台が付く。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部と体部内・外面及び底部内面口クロナデ。底部回転ヘラ削り後、高台削り付け。	小塵・砂粒・白色粒子 灰色普通	60%
		B 4.5				
		D 8.2				
		E 1.2				
		E 1.2				
312	甕 須 志 器	A 15.0	口縁部からつまみにかけての破片。天井部は笠形で、ボタン状のつまみがつく。口縁部内側に短いかえりが付く。	口縁部及び外周部内・外面口クロナデ。天井部回転ヘラ削り後、つまみ削り付け。	小塵・雲母・砂粒・白色粒子・赤色粒子 灰色普通	50% P.L.64 口縁部外面煤付着
		B 2.2				
		F 3.5				
		G 0.7				
		G 0.7				
313	甕 須 志 器	A [35.6]	体部から口縁部にかけての破片。体部は内側気味に立ち上がり、頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は外反する。	口縁部及び体部内外面横ナデ。体部外面縦方向の平行叩き、下位ヘラ削り。	砂粒・白色粒子 灰色普通	30% 二次焼成
		B 23.2				
		C [15.0]				

遺物番号	器種	計 測 値							材質	特徴	備考
		全長(cm)	胴身長(cm)	胴身幅(cm)	底径(cm)	底幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第112図68	甕	(9.3)	0.8	0.8	2.1	0.3	(6.4)	0.3	(4.9)	鉄	三角式。蓋部一部欠損

第55号住居跡(第112~114図)

位置 調査2区の北部、C3e6区。

規模と平面形 長軸3.90m、短軸3.50mの長方形である。

主軸方向 N-10°-E

壁 ほぼ直立している。壁高は64~77cmである。

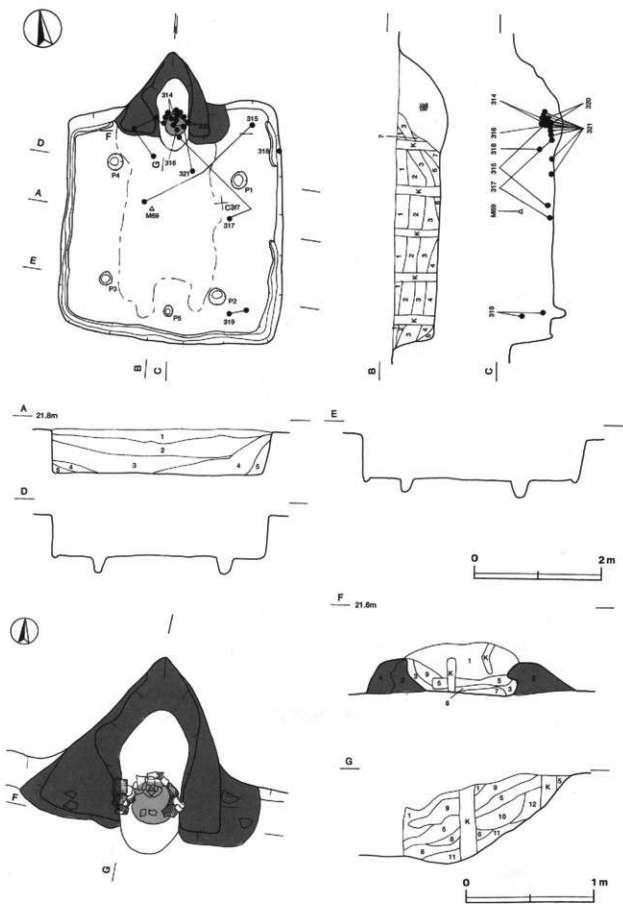
壁溝 東壁中央部付近を除いて、壁下を巡っている。上幅13~21cm、下幅4~12cm、深さ4~6cmで、断面形はU字形である。

床 ほぼ平坦で、竈前から南壁手前にかけて帯状に踏み固められている。

竈 北壁の中央部に砂質粘土とロームで構築されている。天井部は崩落し、袖部が残存している。規模は、焚き口部から煙道部までの最大長156cm、最大幅180cmである。煙道部は壁外へ85cm掘り込んでおり、煙道は火床面から緩やかな傾斜で立ち上がっている。火床部は床面からわずかに掘りくぼめられており、火熱を受けて赤変硬化している。火床部の中央から、土師器坏が逆位で、その上に須志器坏片が6点重ねられた状態で出上している。また、それらの周囲を須志器の甕・瓶片18点が環状に並べられて出土している。それらの多くが二次焼成を受けていることと出土状況から、支脚として利用していたと推定される。竈土層断面図中、第1・9層は崩落した天井部、第2・4層は袖部である。

竈土層解説

- 1 暗赤褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量
- 2 灰褐色 粘土粒子・砂粒多量、ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 近い赤褐色 粘土粒子中量、ローム乾土・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量
- 4 近い赤褐色 粘土粒子・砂粒中量、ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 5 近い赤褐色 粘土粒子・砂粒・焼土乾土中量、ローム乾土・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量
- 6 暗赤褐色 焼土粒子多量、焼土小ブロック中量、ローム乾土・焼土中ブロック・炭化物・炭化粒子少量
- 7 暗赤褐色 焼土粒子多量、焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量
- 8 暗赤褐色 ローム粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量



第112图 第55号住居跡実測図

- 9 ぶい赤褐色 粘土粒子・砂粒多量、焼土粒子中量、ローム粒子・焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子少量
 10 暗赤褐色 焼土粒子多量、焼土小ブロック・炭化粒子中量、ローム粒子・炭化物少量
 11 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子中量、ローム粒子・焼土中ブロック・炭化物・炭化粒子少量
 12 暗赤褐色 ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子中量、ローム小ブロック・焼土中ブロック少量

ピット 5か所(P1~P5)。P1~P4は長径22~29cm、短径21~26cmの円形または楕円形で、深さ21~29cmである。各コーナー寄りに配置されていることと形状から、主柱穴と考えられる。P5は径18~19cmの円形で、深さ24cmである。南壁寄りの中央に位置していることと形状から、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

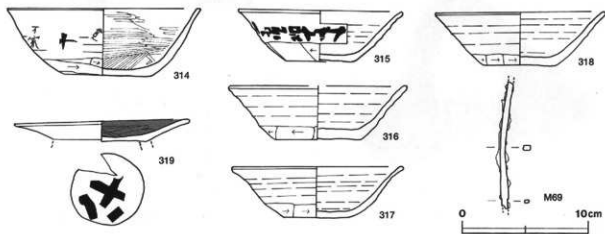
覆土 7層からなる。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

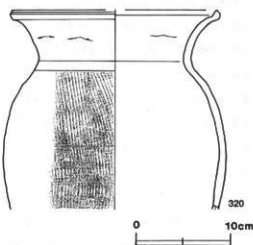
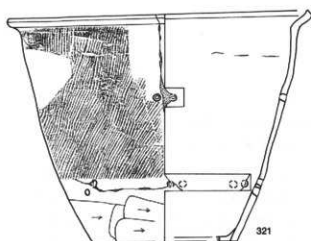
1 黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量	5 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
2 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量	6 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量、焼土小ブロック・砂粒微量
3 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量、ローム中ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	7 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量、粘土粒子・砂粒微量
4 暗褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量		

遺物 土師器片261点(環・高台付環56, 甕・瓶205), 須恵器片459点(環・高台付環214, 高台付皿5, 蓋23, 甕・瓶214, 不明3), 鉄製品1点(不明)が出土している。図示しなかった土器で個体数が確認できたのは、土師器では環・高台付環3点, 甕・瓶6点, 須恵器では環・高台付環9点, 甕・瓶15点である。また、土師器の環・高台付環で、体部及び底部外面に墨書が認められる破片が15点出土している。文字は一部しか残存していないため、判読は困難である。これらの遺物は覆土上層から覆土下層にかけて全体的に出土しているが、特に覆土下層については、中央部から多数出土している。また、竈内からも多数の土器が出土している。そのほか、混入した縄文土器片6点, 攪乱により混入した陶器片4点が出土している。第113図314の土師器環は、竈内の覆土下層から出土している。315の須恵器環は、北東コーナー部及び中央部の覆土下層から出土した破片が接合したものである。316の須恵器環は、竈内の覆土下層から出土した破片と竈内の覆土中から出土した破片が接合したものである。317の須恵器環は、竈内と東部の覆土下層から出土した破片が接合したものである。318の須恵器環は、北東コーナー部の覆土中層から逆位で出土している。319の土師器高台付皿は、南東コーナー部の覆土上層及び下層から出土した破片が接合したものである。第114図320の須恵器甕と321の須恵器瓶は、竈内及び竈前の覆土下層から出土した破片が接合したものである。第113図M69の不明鉄製品(鐵)は、中央部の覆土上層から出土している。出土状況から本跡に伴うと考えられる土器は314・316・320・321である。

所見 本跡は、竈内の出土状況から、土器を支脚として利用していたと推定される住居である。時期は、竈内の出土土器から9世紀中葉と考えられる。



第113図 第55号住居跡出土遺物実測図(1)



第114図 第55号住居跡出土遺物実測図(2)

第55号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考		
第113図 314	坏 土 器	A 15.4	底部から口縁部にかけて一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内面及び底部内面口ロナデ後、ヘラ磨き。体部下端手持ちヘラ削り。底部外面摩滅のため調整不明。	砂粒・白色粒子・赤色粒子 にぶい褐色 普通	95% P L64 体部外面に「十」の磨きと「冫」の刻痕		
		B 5.5						
		C 7.8						
315	坏 須 恵 器	A 13.0	底部から口縁部にかけて一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面及び底部内面口ロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ削り。	小礫・砂粒・雲母・白色粒子 にぶい黄褐色。普通	90% P L64 体部外面に「匚」 □□□の磨き		
		B 4.0						
		C 5.4						
316	坏 須 恵 器	A [14.0]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面及び底部内面口ロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部多方向の手持ちヘラ削り。	砂粒・雲母・白色粒子 灰黄色。普通	50% 二次焼成		
		B 4.3						
		C 6.8						
317	坏 須 恵 器	A 13.4	完形。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部、体部内・外面及び底部内面口ロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ削り直を残す回転ヘラ削り。	小礫・砂粒・雲母・白色粒子 にぶい赤褐色。普通	100% P L64		
		B 4.1						
		C 5.2						
318	坏 須 恵 器	A 13.3	完形。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部、体部内・外面及び底部内面口ロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部1方向の手持ちヘラ削り。	砂粒・雲母・白色粒子 黄灰色。普通	100% P L64		
		B 4.3						
		C 5.6						
319	高台付 土 器	A 14.0	底部から口縁部にかけての破片。体部は大きく開き、口縁部に至る。	口縁部内・外面及び体部外面口ロナデ。体部・底部内面口ロナデ後、ヘラ磨き。底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け。内面黒色処理。	小礫・砂粒・白色粒子 にぶい赤褐色 普通	60% P L64 底部外面に「八 十」の磨き 体部外面露付着		
		B (1.9)						
第114図 320	罌 須 恵 器	A [21.2]	体部から口縁部にかけての破片。体部は内傾気味に立ち上がり、頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は外反し、端部は上方つまみ上げられている。	口縁部内・外面口ロナデ。体部外面縦方向の平行叩き。頸部内・外面に輪積み痕残る。	砂粒・雲母・白色粒子 暗灰黄色 普通	10% 体部外面露付着		
		B (30.8)						
321	罌 須 恵 器	A 31.1	底部から口縁部にかけての破片。体部は外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。底部は多孔式。	口縁部内・外面口ロナデ。体部外面縦及び斜め方向の平行叩き。下層横方向のヘラ削り。体部中下位に4か所の補修孔あり。	砂粒・雲母・白色粒子 にぶい赤褐色 普通	70% P L64 二次焼成		
		B 24.1						
		C [15.0]						
遺物番号	器種	計 測 値				材 質	特 徴	備 考
		全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第113図M9	鐵鉢	(30.1)	0.6	0.4	(10.8)	鉄	両側あり。蓋被部と基部	

第56号住居跡 (第115・116図)

位置 調査2区の中央部, D3e4区。

規模と平面形 長軸3.32m, 短軸3.26mの方形である。

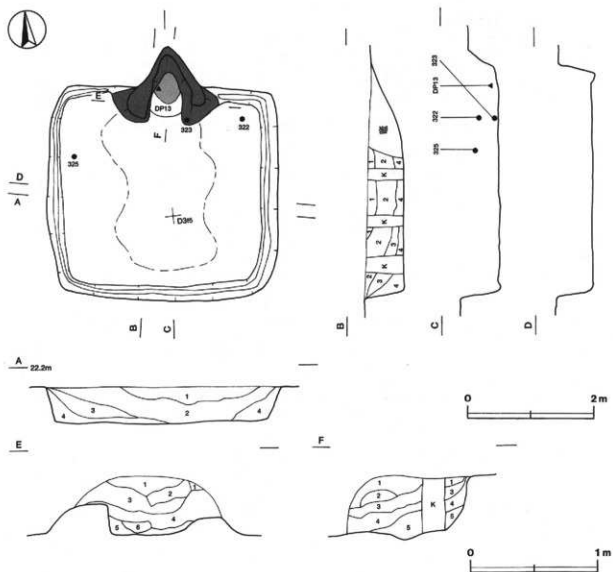
主軸方向 N-7°-E

壁 ほぼ直立している。壁高は57~64cmである。

壁溝 全周している。上幅13~28cm, 下幅4~10cm, 深さ2~6cmで, 断面形はU字形である。

床 ほぼ平坦である。竈前から南壁の手前にかけて帯状に踏み固められている。

竈 北壁の中央部に砂質粘土とロームで構築されている。天井部は崩落し, 袖部が残存している。規模は, 焚口部から煙道部までの最大長112cm, 袖部の最大幅160cmである。煙道部は壁外へ70cm掘り込んでおり, 煙道は火床面から外傾して立ち上がっている。火床部は床面から6cm掘りくぼめられており, 火熱を受けて赤変硬化している。竈土層断面図中, 第2層は崩落した天井部, 第5層は火床部の覆土である。竈内の覆土下層から支脚が横位で出土している。



第115図 第56号住居跡実測図

覆土層解説

- | | |
|--------|--|
| 1 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量 |
| 2 灰黄褐色 | 砂質粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量 |
| 4 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 5 暗赤褐色 | 焼土粒子少量、ローム粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子・砂質粘土粒子少量 |
| 6 黒褐色 | 焼土粒子・炭化粒子中量、ローム粒子・焼土小ブロック・炭化粒子少量 |

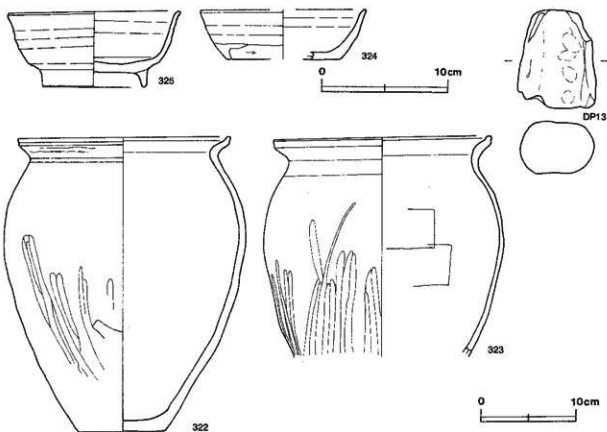
覆土 4層からなる。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|-------|---------------------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・炭化物少量、焼土粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子少量、ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 |

遺物 土師器片107点(坏・高台付坏4, 甕・甕103), 須恵器片88点(坏・高台付坏47, 甕8, 甕・甕33), 土製品1点(支脚)が出土している。これらの遺物は、竈周辺と西壁付近を中心に覆土上層から覆土下層にかけて出土している。また竈内からも多数出土している。そのほか、混入した縄文土器片6点が出土している。第116図322の土師器甕は、北東部の覆土中層から斜位で、323の土師器甕は、東袖部先端上の覆土下層から逆位で出土している。324の須恵器坏は、覆土中から出土している。325の須恵器高台付坏は、西壁際の覆土中層から正位で出土している。DP13の支脚は、竈内の覆土下層から出土している。

所見 本跡の時期は、覆土中層から下層の出土土器から8世紀中葉と推定される。



第116図 第56号住居跡出土遺物実測図

第56号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第116図 322	甕 土師器	A 21.8	底部から口縁部にかけて 部欠損。平底。体部は内彎気味に立ち上がり、頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は外反し、頸部は外上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面下半へラ磨き。	砂粒・白色粒子 褐色 普通	90% P L 65
		B 30.7				
		C 8.8				
323	甕 土師器	A 22.6	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎気味に立ち上がり、頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は外反し、頸部はわずかに外上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面へラナデ、外面へラ磨き。	砂粒・白色粒子 にぶい褐色 普通	60% P L 65
		B (22.9)				
324	坏 須恵器	A [13.0]	底部から口縁部にかけての破片。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面及び底部内面高クロナデ。体部下端手持ちへラ磨り。底部回転へラ磨り。	小礫・砂粒・雲母・白色粒子 灰色、普通	10%
		B 3.9				
		C [9.0]				
325	高台付坏 須恵器	A 13.6	高台部から口縁部にかけて一部欠損。短く垂下する高台が付く。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部、体部内・外面及び底部内面高クロナデ。底部回転へラ磨り後、高台磨り付け。	雲母・砂粒・白色 粒子 黄灰色 普通	95% P L 65
		B 3.9				
		D 8.0				
		E 1.4				

遺物番号	器種	計 測 値				特 徴	備 考
		全長 (cm)	最大径 (cm)	最小径 (cm)	重量 (g)		
初編D P10	支 脚	(10.4)	7.7	5.6	(430.0)	円筒状。基部の欠損。指環状残	

第58号住居跡 (第117～119図)

位置 調査1区の北部、B 3b7区。

規模と平面形 長軸3.80m、短軸3.70mの方形である。

主軸方向 N-12°-W

壁 はほぼ直立している。壁高は51～63cmである。

壁溝 全周している。上幅16～26cm、下幅4～14cm、深さ6～12cmで、断面形はU字形である。

床 はほぼ平坦である。中央部が帯状によく踏み固められている。中央部に主軸方向に平行するように2条の溝が付設されている。P 2とP 9との間の長さ122cm、上幅8～12cm、下幅5～8cm、深さ6cmで、断面形がU字形の溝、P 3とP 10との間の長さ124cm、上幅10～15cm、下幅4～8cm、深さ6cmで、断面形がU字形の溝が各1条である。柱穴及び溝の内側の帯状の部分がよく踏み固められているのに対し、その外側は、わずかに軟らかい。

竈 北壁の中央部に粘土とロームで構築されている。天井部と袖部の一部が残存している。規模は、焚口部から煙道部までの最大長90cmで、袖部の最大幅190cmである。煙道部は壁外へ40cm掘り込んでおり、煙道はほぼ直立している。火床部は床面からわずかに掘りくぼめられており、火熱を受けて赤変硬化している。竈土層断面図中、第1層は一部が崩落した天井部、第2層は火床部の覆土、第6～11・13～15層は袖部で、ロームを掘り残して基部をつくり、その上に粘土とロームを混ぜた土で構築されている。

竈土層解説

- 1 灰褐色 粘土粒子・砂粒中量、ローム粒子・焼土小ブロック・焼上粒子・炭化粒子少量
- 2 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼上粒子中量、ローム粒子・焼土中ブロック・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム小ブロック・ローム粒子・焼土中ブロック・焼上小ブロック・炭化物・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム小ブロック・ローム粒子・炭化物・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量
- 5 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量
- 6 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、粘土粒子・砂粒少量
- 7 灰褐色 粘土粒子中量、ローム小ブロック・ローム粒子・砂粒少量、焼土小ブロック少量
- 8 暗褐色 焼土大ブロック・粘土小ブロック・粘土粒子多量、焼土小ブロック・砂粒少量
- 9 暗褐色 ローム粒子・焼土小ブロック中量、ローム小ブロック・焼土大ブロック・焼上粒子・粘土小ブロック・粘土粒子・砂粒少量
- 10 褐色 ローム粒子多量、ローム中ブロック・ローム小ブロック中量、ローム大ブロック少量

11	明褐色	ローム大ブロック・ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、焼土粒子微量
12	赤褐色	焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子多量
13	濃い赤褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土中ブロック・焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量
14	灰褐色	粘土小ブロック・粘土粒子中量、砂粒少量、焼土粒子・炭化物微量
15	褐色	ローム粒子多量、ローム中ブロック・ローム小ブロック少量

ピット 40か所（P1～P40）。P1～P4は長径26～32cm、短径24～28cmの円形及び楕円形で、深さ30～42cmである。各コーナー寄りに配置されていることと形状から、支柱穴と考えられる。P5は長径34cm、短径30cmの楕円形で、深さ34cmである。南壁寄りの中央に位置していることと形状から、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6・P7は長径28cm・27cm、短径それぞれ23cmの楕円形で、深さ28cm・31cmである。竈の両補筒脇に位置していることから竈関連施設に伴うピットと考えられる。P8は長径26cm、短径24cmの円形で、深さ39cmである。南西コーナー部に位置しているが、その性格については不明である。P9・P10はそれぞれ径14cmの円形で、深さ13cmである。P9はP1とP2の間に、P10はP3とP4の間にそれぞれ並ぶように配置されていることと形状から、補助柱穴と考えられる。P11～P40は長径12～22cm、短径10～20cmの円形及び楕円形で、壁際に位置していることと形状から、壁柱穴の可能性が考えられる。

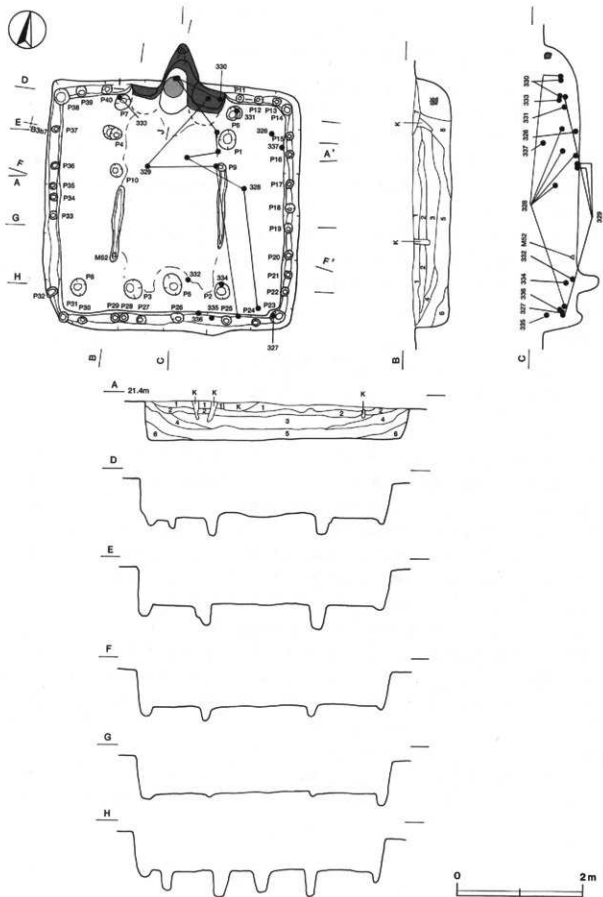
覆土 8層からなり、レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。

土層解説

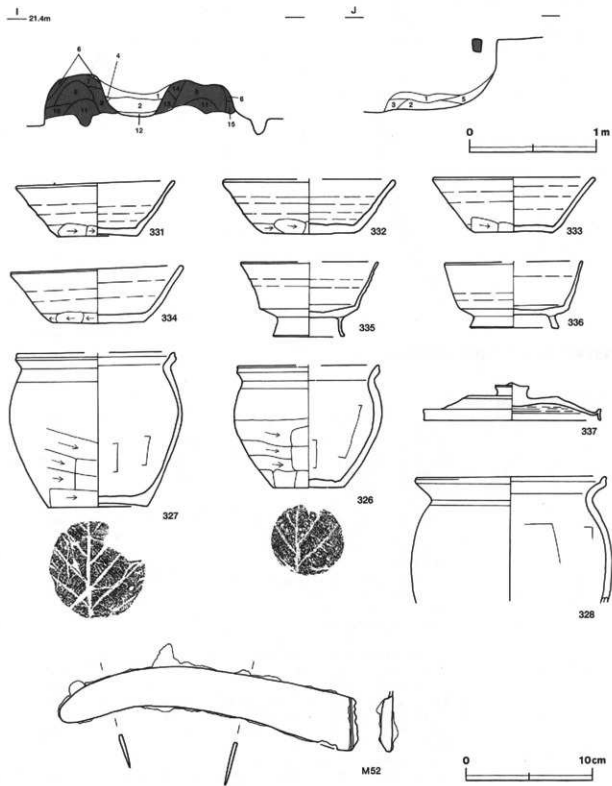
1	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
2	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化物少量
3	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
4	暗褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック・炭化物・炭化粒子少量
5	暗褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
6	暗褐色	ローム粒子中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
7	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子少量
8	暗赤褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量

遺物 土師器片174点（坏・高台付坏4、斐・飯166、不明4）、須恵器片115点（坏・高台付坏49、蓋14、斐・飯52）、土製品1点（支脚）、鉄器1点（鎌）が出土している。これらの遺物は、北東部を中心に、覆土中層から覆土下層にかけて出土している。第118図326の土師器小形甕は、北東コーナー部の覆土下層から逆位で、327の土師器小形甕は、南東コーナー部の覆土下層から斜位で出土している。328の土師器小形甕は南東コーナー部の覆土下層、中央部北壁寄りの覆土中層及び下層と竈内の覆土中層から、それぞれ出土した破片が接合したものである。第119図329の土師器甕は、南東部の覆土中層、中央部の床面及び、北壁際の覆土中層から出土した破片が接合したものである。330の土師器甕は、北壁際と竈内の覆土中層から出土している。第118図331の須恵器坏は、北東コーナー部の覆土下層から出土した破片と竈内の覆土中層から出土した破片が接合したものである。332の須恵器坏は南壁際中央部の覆土下層から斜位で、333の須恵器坏は北壁際の覆土中層から逆位で、334の須恵器坏は南部の覆土下層から正位で、335の須恵器高台付坏は南壁際中央部の覆土上層から斜位で、336の須恵器高台付坏は南壁際中央部の覆土中層から斜位で、337の須恵器蓋は東壁際の覆土上層から正位で出土している。M52の鎌は、南西部の覆土下層から出土している。

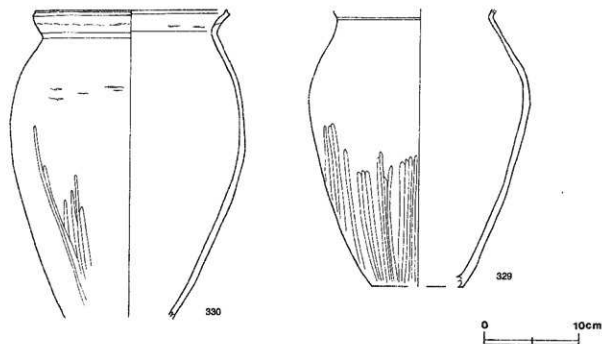
所見 本跡は出土土器に大きな時期差がなく、短い期間に埋没したと考えられる。時期は、覆土下層や竈内の出土土器から9世紀前半と考えられる。中央部に主軸方向と平行に2条の「岡仕切り溝」と考えられる溝が付設され、この溝の内側と外側の床面の状況が異なることから、住居内の中央部とその外側の利用状況が異なっていたのではないかと考えられる。



第117图 第58号住居跡実測图



第118图 第58号住居跡・出土遺物実測図



第119図 第58号住居跡出土遺物実測図

第58号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	干法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第118図 326	小形差土師器	A [11.2]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がり、頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は外反し、端部は上方にわずかにつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面上半ナデ、下半横方向のヘリ削り。体部内面ヘラナデ。底部木敷痕。	砂粒・白色粒子にふい・褐色 普通	60% 二次焼成
		B 9.2				
		C 5.8				
327	小形差土師器	A [12.5]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がり、頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面中・下位横方向のヘリ削り、内面ヘラナデ。底部木敷痕。	砂粒・白色粒子 明赤褐色 普通	40%
		B 12.3				
		C 8.0				
328	小形差土師器	A 15.0 (10.0)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎気味に立ち上がり、頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は外反し、端部はわずかに内上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ヘラナデ。	砂粒・白色粒子 いふい・赤褐色 普通	10% 二次焼成
		B				
		C				
第119図 329	差土師器	B (28.8) C [9.6]	体部の破片。体部は内彎気味に立ち上がり、頸部はくの字状に屈曲する。体部最大径は体部上位。	体部内面ナデ、外面縦方向のヘリ磨き。	砂粒・白色粒子 いふい・赤褐色 普通	70% P L 65 体部外面露付着
		A 19.8 B (32.0)				
		C 6.2				
330	差土師器	A 19.8 B (32.0)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎気味に立ち上がり、頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は外反し、端部は上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面輪ねみ面を残す横ナデ。体部外面上半ナデ、下半縦方向または斜め方向のヘリ磨き。	砂粒・白色粒子 褐色 普通	70% P L 65 体部外面露付着
		C				
第118図 331	環須志器	A 12.4	底部から口縁部にかけて一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面及び底部内面ロクロナデ。体部下端手持ちヘリ削り。体部外面上半ナデ、下半縦方向の手持ちヘリ削り。	小粒・砂粒・白色粒子・黄灰色 普通	70% P L 64 口縁部から底部内外面火傷
		B 4.3				
		C 6.2				
332	環須志器	A [13.4]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面及び底部内面ロクロナデ。体部下端手持ちヘリ削り。底部1方向の手持ちヘリ削り。	小粒・砂粒・白色粒子・黒色粒子 黄灰色。普通	50% 口縁部露付着
		B 4.4				
		C 7.2				
333	環須志器	A 12.8	底部から口縁部にかけて一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面及び底部内面ロクロナデ。体部下端手持ちヘリ削り。底部1方向の手持ちヘリ削り。	小粒・砂粒・白色粒子 灰色。普通	95% P L 64
		B 4.1				
		C 6.2				

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第118回 334	坏 須器 器	A 13.5	底部から口縁部にかけての破片。 平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面及び底部内面ロクロナデ。体部下端手持ちへう折り。底部1方向の手持ちへう折り。	小礫・砂粒・白色 粒子 灰色、普通	50%
		B 4.6				
		C 7.1				
335	高台付坏 須器 器	A [11.0]	体部から口縁部にかけての破片。 平底。長いハの字状の高台が付く。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面及び底部内面ロクロナデ。底部回転へう折り後、高台貼り付け。	砂粒・白色粒子 灰色 普通	60%
		B 6.0				
		D 5.7				
		E 1.5				
336	高台付坏 須器 器	A [10.8]	高台部から口縁部にかけての破片。 5.4片。短いハの字状の高台が付く。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面及び底部内面ロクロナデ。底部回転へう折り後、高台貼り付け。	小礫・砂粒・白色 粒子 灰色 普通	60%
		B 5.4				
		D 7.0				
		E 0.9				
337	差 須器 器	A 14.1	口縁部からつまみ部にかけての破片。 天井部は等形で、縦空珠状のつまみが付く。口縁部は強く折り返している。	口縁部及び外周部内・外面ロクロナデ。天井部回転へう折り後、つまみ貼り付け。	小礫・砂粒・白色 粒子 灰色 普通	50%
		B 3.0				
		F 2.6				
		G 1.0				

遺物番号	器種	計測値				材質	特徴	備考
		全長(cm)	背幅(cm)	刃幅(cm)	重量(g)			
第118回M32	鎌	23.2	0.3	4.1	116.7	鉄	墓誌周辺の一部欠損	P 1.74

第59号住居跡（第120・121回）

位置 調査1区の北部、A 3i8区。

重複関係 南部を第144・146号土坑に掘り込まれており、両者よりも古い。

規模と平面形 長軸3.16m、短軸2.84mの方形である。

主軸方向 N-7°-W

壁 ほほ直立している。壁高は24~34cmである。

床 ほほ平坦で、中央部がよく踏み固められている。

竈 北壁の中央部に砂質粘土とロームで構築されている。天井部は崩落し、西袖部の一部と東袖部が残存している。規模は、焚口部から煙道部までの最大長95cm、袖部の最大幅80cmである。煙道部は壁外へ57cm掘り込んでおり、煙道は火床面から緩やかな傾斜で立ち上がっている。火床部は床面からわずかに掘りくぼめられている。

竈土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土小ブロック少量
- 2 暗赤褐色 焼土小ブロック・砂粒少量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 3 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子・砂粒少量
- 4 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子・砂粒微量
- 5 黒褐色 砂質粘土粒子中量、ローム粒子・焼土粒子少量

ピット 4か所（P1~P4）。P1・P2はそれぞれ径20cm・25cmの円形で、深さ13cm・29cmである。各コーナー寄りに配置されていることと形状から、支柱穴と考えられる。P3は長径26cm、短径22cmの楕円形で、深さ21cmである。南壁寄りの中央に位置していることと形状から、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P4は長径17cm、短径15cmの楕円形で、深さ21cmである。性格は不明である。

覆土 2層からなり、レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

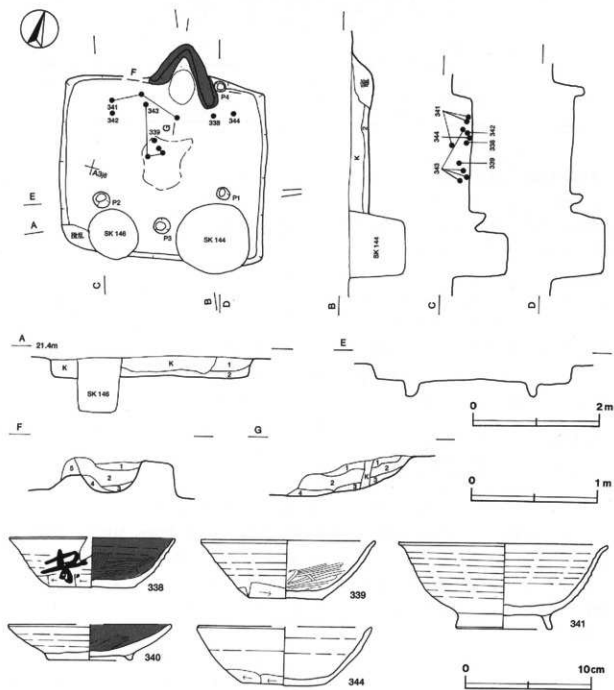
土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量

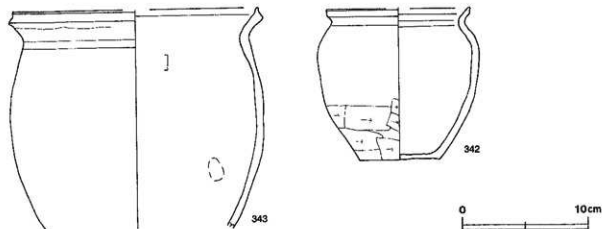
遺物 土器器片151点（坏・高台付坏13、高台付坏2、碗4、差・瓶132）、須器器片34点（坏・高台付坏18、蓋4、差・瓶12）、石製品1点（不明）、鉄製品1点（不明）が出土している。これらの遺物は、竈前及び北壁

を中心に覆土上層から覆土中層にかけて出土している。そのほか、混入した縄文土器片4点が出土している。第120図338の土師器杯は、竈前の覆土下層からと竈内の覆土中から出土した破片が接合したものである。339の土師器杯は、中央部の覆土中層から正位で出土している。340の土師器高台付皿は、覆土中から出土している。341の土師器碗は、北西コーナー部の覆土下層から出土した破片と竈前面の覆土上層及び覆土下層から出土した破片が接合したものである。第121図342の土師器小形甕は、北西部の覆土下層から逆位で出土している。343の土師器甕は、北部の覆土中層と中央部の覆土中層及び下層から出土した破片が接合したものである。第120図344の須恵器杯は、北東コーナー部の覆土下層から正位で出土している。

所見 本跡の時期は、竈内や覆土下層の出土土器から9世紀後葉と考えられる。



第120図 第59号住居跡・出土遺物実測図



第121図 第59号住居跡出土遺物実測図

第59号住居跡出土遺物観察表

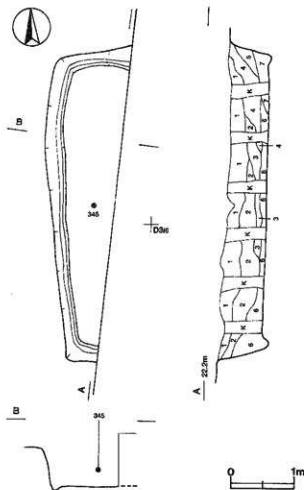
遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第120図 338	土師器 環	A 13.1	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面及び体部外面ロクロナデ。体部・底部内面ロクロナデ後、ヘラ磨き。体部下端手持ちヘラ削り。底部1方向の手持ちヘラ削り。内面黒色処理。	砂粒・白色粒子 棕色 普通	50% P L 65 体部外面に「家」の墨書
		B 4.0				
		C 6.6				
339	土師器 環	A 13.8	完形。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面及び体部外面ロクロナデ。体部・底部内面ロクロナデ後、ヘラ磨き。体部下端手持ちヘラ削り。底部2方向の手持ちヘラ削り。	砂粒・白色粒子 にぶい褐色 普通	100% P L 64 体部外面磨付者
		B 4.8				
		C 5.8				
340	高台付土師器 高台付皿	A [12.8]	高台部から口縁部にかけての破片。短く垂下する高台が付く。体部は大きく開き、口縁部に至る。	口縁部内・外面及び体部外面ロクロナデ。体部・底部内面ロクロナデ後、ヘラ磨き。底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け。内面黒色処理。	砂粒・白色粒子 褐色 普通	60% P L 65 体部外面磨付者
		B 2.8				
		C 6.6				
		D 6.6				
		E 0.6				
341	土師器 輪	A 16.5	高台部から口縁部にかけての一部欠損。短いハの字状の高台が付く。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部、体部内・外面及び底部内面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け。	小粒・雲母・砂粒・白色粒子 にぶい褐色 普通	90% P L 65 体部外面と底部内面磨付者
		B 6.8				
		D 7.6				
		E 1.3				
第121図 342	土師器 小形甕	A [11.4]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がり、腹部で屈曲して、口縁部は外反する。口縁部は外上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面上半ナデ。外面下半横方向のヘラ削り。底部無調整。	小粒・砂粒・白色粒子 にぶい褐色 普通	70% 二次焼成
		B 12.0				
		C 6.4				
343	土師器 甕	A [19.4]	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎気味に立ち上がり、腹部でくの字状に屈曲する。口縁部は外反し、肩部は上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面輪積み痕と指頭圧痕を残すナデ、外面ヘラナデ。	小粒・砂粒・白色粒子 明赤褐色 普通	10%
		B (17.5)				
第120図 344	土師器 須臾器	A [13.6]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面及び底部内面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部1方向の手持ちヘラ削り。	砂粒・白色粒子 にぶい赤褐色 普通	30%
		B 4.7				
		C 6.8				

第60号住居跡 (第122・123図)

位置 調査2区の中央部東寄り、D3e5区。

規模と平面形 南北軸は48.2m、東西軸は東部が調査区域外であるため、1.18mが確認できただけである。平面形は方形または長方形と推定される。

主軸方向 N-5°-W



第122図 第60号住居跡実測図

遺物 土師器片121点(甕・甌), 須恵器片172点(坏・高台付坏84, 蓋16, 長頸瓶1, 甕・甌71)が出土している。これらの遺物は, 西部の覆土中層を中心に出土している。そのほか, 掘削により混入した陶器片1点が出土している。第123図345の須恵器坏は, 西部の覆土中層から正位で出土している。

所見 本跡の時期は, 覆土中層の出土土器から, 9世紀中葉から後葉と推定される。

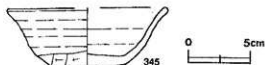
第60号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・施文	備考
第123図 345	須恵器 坏	A [12.6]	底部から口縁部にかけての破片。	山縁部, 体部内・外面及び底部内 面ロクロナデ。体部下縁手持ちヘラ 削り。底部1方向の手持ちヘラ削り。	赤土・砂粒・白色	40%
		B 4.6	平底。体部は外椀して立ち上がり, 口縁部はわずかに外反する。		灰白色, 普通	
		C 5.8				

第61号住居跡(第124~126図)

位置 調査4区の中央部, L1a0区。

重複関係 南壁と中央部の床面を第16・27号掘立柱建物に, 南西コーナー部を第122・123号土坑に, 西壁中央部を第121号土坑に掘り込まれており, それらよりも古い。



第123図 第60号住居跡出土遺物実測図

壁 ほぼ直立している。壁高は69cmほどである。

壁溝 北壁中央部から南西コーナー部の壁下を巡っている。上幅19~32cm, 下幅4~9cm, 深さ8cmで, 断面形はU字形である。

床 ほぼ平坦で, よく踏み固められている。

覆土 7層からなる。レンズ状の堆積状況であることから, 自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 暗褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子中量・炭化粒子少量
- 4 暗小褐色 焼土粒子中量, ローム小ブロック・ローム粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子少量
- 5 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 6 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 7 暗小褐色 ローム小ブロック・焼土粒子・ローム中ブロック・ローム粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子・砂質焼土粒子少量

規模と平面形 北東部が調査区域外であるため、確認できたのは南北軸6.00m、東西軸5.40mである。平面形は方形または長方形と推定される。

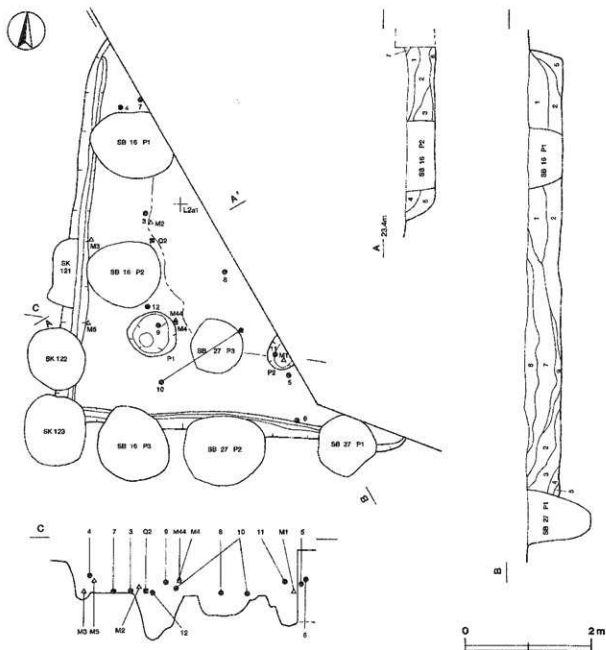
主軸方向 N-S-E

壁 やや外傾気味に立ち上がっている。壁高は50~60cmである。

壁溝 南・西壁下を巡っている。上幅22~37cm、下幅4~11cm、深さ11cmで、断面形はU字形である。

床 ほほ平坦で、中央部がよく踏み固められている。

ピット 2か所 (P1・P2)。P1は長径78cm、短径71cmの円形で、深さ35cmである。南西コーナー寄りに配置されていることと形状から、支柱穴と考えられる。P2は北東部の半分が調査区域外にあり、確認された規模は、径54cmの半円形で、深さ33cmである。南壁寄り中央部に位置していることと形状から、出入り口施設に伴うピットと考えられる。



第124図 第61号住居跡実測図

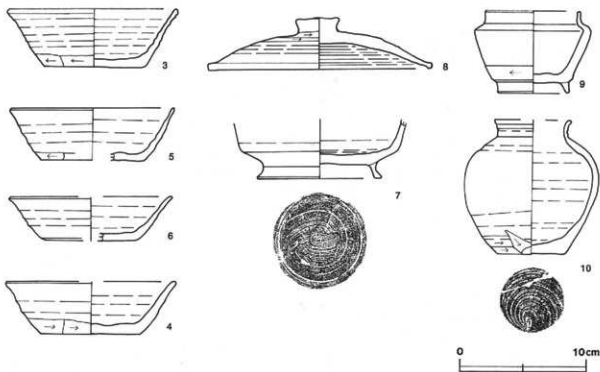
覆土 9層からなり、レンズ状堆積であることから、自然堆積と思われる。

土層解説

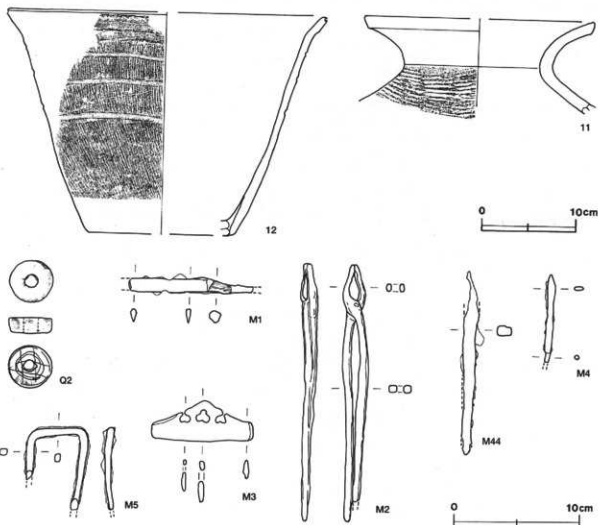
1	雑褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量、ローム中ブロック微量
2	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量
3	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量、ローム中ブロック微量
4	暗褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子少量
5	暗褐色	ローム小ブロック・焼土粒子少量
6	暗褐色	砂質粘土粒子中量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
7	暗褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量
8	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・砂質粘土粒子少量
9	黒褐色	炭化粒子多量、炭化物中量、ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子少量

遺物 土師器片331点（坏・高台付坏17, 甕・瓶314）、須恵器片552点（坏・高台付坏257, 蓋63, 高盤1, 短頸壺1, 瓶2, 甕・瓶197）、土製品2点（支脚, 不明）、石製品1点（紡錘車）、鉄器・鉄製品9点（刀子2, 鎌1, 釘1, 火打金1, 金鉗1, 門金具1, 不明2）が出土している。これらの遺物は、中央部及び西部を中心に覆土中層から覆土下層にかけて出土している。そのほか、混入した縄文土器片1点、攪乱により混入した陶器片7点が出土している。第125図3の須恵器坏は西部の床面から逆位で、4の須恵器坏は西壁際北寄りの覆土中層から正位で、5の須恵器坏は南部の覆土中層から正位で、6の須恵器坏は南壁際の覆土中層から斜位で出土している。7の須恵器高台付坏は西壁際北寄りの床面直上から正位で、8の須恵器蓋は中央部の床面直上から正位で、9の須恵器短頸壺は南西部の覆土中層から正位で、10の須恵器瓶は南部の覆土中層から逆位で、第126図11の須恵器甕は南部の覆土中層から正位で出土している。12の須恵器瓶は、南西部の床面からと覆土中から出土した破片が接合したものである。Q2の紡錘車は、西部の床面から出土している。M1の刀子は南部の覆土下層から、M2の金鉗は西部の覆土下層から、M3の火打金は西壁際の床面から、M4の鎌とM44の釘は南西部の覆土中層から、M5の門金具は南西コーナー部壁際の覆土中層から出土している。出土状況から本跡に伴うと考えられる遺物は3・7・12・Q2・M3である。

所見 本跡の時期は、床面の出土土器から8世紀後葉と考えられる。



第125図 第61号住居跡出土遺物実測図(1)



第126図 第61号住居跡出土遺物実測図(2)

第61号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第125図 3	須恵器 坏	A 12.9	定形。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面及び底部内面ロクロナデ。体部下端手持ちへう割り、底部多方向の手持ちへう割り。	砂粒・白色粒子 灰色 普通	100% P L65
		B 4.7				
		C 7.8				
4	須恵器 坏	A [13.4]	体部から口縁部にかけて一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面及び底部内面ロクロナデ。体部下端手持ちへう割り、底部1方向の手持ちへう割り。	砂粒・雲母・白色 粒子・黒色粒子 にふい黄色。普通	70% P L65
		B 4.2				
		C 7.6				
5	須恵器 坏	A 12.8	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面及び底部内面ロクロナデ。体部下端手持ちへう割り、底部1方向の手持ちへう割り。	砂粒・雲母・白色 粒子・黒色粒子 にふい黄色。普通	60%
		B 4.2				
		C [8.0]				
6	須恵器 坏	A [12.6]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちへう割り、底部1方向の手持ちへう割り。	小礫・長石・砂粒 灰色 普通	30% 体部外面下位 火障 ⁴
		B 3.4				
		C [7.0]				
7	高台付須恵器 坏	B (4.7)	高台部から体部かけての破片。平底。ハの字状の高台が付く。体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面及び底部内面ロクロナデ。底部回転へう割り後、高台貼り付け。	砂粒・石英・白色 粒子 灰色。普通	50%
		D 9.6				
		E 1.4				
8	須恵器 蓋	A 17.4	口縁部からつまみにかけて一部欠損。天井部は笠形で、擬宝珠状のつまみがつく。口縁部は短く折り返している。	口縁部、外周部内・外面ロクロナデ。天井部外面回転へう割り後、つまみ貼り付け。	雲母・砂粒・白色 粒子 褐色 普通	80%
		B 4.1				
		F 3.4				
		G 1.1				

遺物番号	器種	計測値 (cm)		器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第125図 9	初須恵器 須恵器	A	7.4	底部から口縁部にかけて一部欠損。ハの字状の态台が付く。体部は外縁して立ち上がり、肩部がある。口縁部は短く直立する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。体部下部回転ヘラ削り。底部外面回転ヘラ切り後、高台盛り付け。	小塵・灰母・砂粒 灰色 普通	30% P L 65 体部外面灰付着
		B	6.5				
		D	5.4				
		E	1.0				
10	須恵器	A	[6.0]	口縁部、体部内・外面及び底部内面ロクロナデ。体部下部手持ちヘラ削り。底部回転糸切り。	砂粒・白色粒子 にぶい褐色 普通	40%	
		B	10.7				
		C	5.4				
第126図 11	美濃須恵器	A	[23.8]	口縁部内・外面ロクロナデ。体部外面上横方向の平行印き。	灰母・砂粒・白色粒子 灰色、普通	10%	
		B	(9.6)				
12	須恵器	A	[32.6]	口縁部から体部にかけての破片。体部1.4内埋し。頸部はくの字状に陥曲する。口縁部は外反する。	体部外面上横から中位に縦方向の平行印き後、ヘラ状工具で横方向に3本の比線を書き加す。体部下部横位のヘラ削り。	灰母・砂粒・白色粒子 にぶい褐色、普通	30% 体部外面灰付着
		B	23.2				
		C	[15.0]				

遺物番号	器種	計測値						材質	特徴	備考
		上面径(cm)	下面径(cm)	口縁径(cm)	口径(cm)	高さ(cm)	重量(g)			
第126図Q2	紡錘車	3.4	3.1	1.0	1.2	1.3	24.3	滑石	下面に舟形状の線刻	P L 71

遺物番号	器種	計測値						材質	特徴	備考
		全長(cm)	刃身長(cm)	身幅(cm)	重ね(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第126図M1	刀子	(10.0)	(6.1)	1.3	0.4	(3.9)	(10.6)	鉄	刃先、刃身、身幅、重ねに線刻	P L 72

遺物番号	器種	計測値				材質	特徴	備考
		全長(cm)	幅(cm)	断面幅(cm)	重量(g)			
第126図M2	金釘	20.4	2.1	0.4~0.6	(53.7)	鉄	把手部一部欠損	P L 76

遺物番号	器種	計測値				材質	特徴	備考
		全長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第126図M3	火打金	8.1	3.3	0.3~0.5	26.4	鉄	断面3孔	P L 76
M44	釘	(14.6)	1.1	0.8	(35.5)	鉄	上部の一部欠損	

遺物番号	器種	計測値						材質	特徴	備考		
		全長(cm)	断面径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	口径(cm)	高さ(cm)					
第126図M4	盥	(7.0)	2.0	0.6	4.1	0.6	(0.9)	0.5	(6.7)	鉄	断面開口式。基部一部欠損	P L 73

遺物番号	器種	計測値				材質	特徴	備考
		全長(cm)	幅(cm)	断面幅(cm)	重量(g)			
第126図M5	門金具	(6.5)	4.9	0.5~0.6	(19.3)	鉄	断面形は長方形	P L 75

第62号住居跡 (第127~132図)

位置 調査4区の南部、L 2 c 1区。

規模と平面形 長軸7.84m, 短軸6.78mの長方形である。

主軸方向 N-4°-E

壁 ほは直立している。壁高は60~68cmである。

壁溝 竈の部分を除いて、壁下を巡っている。上幅16~36cm, 下幅7~14cm, 深さ6~16cmで、断面形はU字形である。

床 ほは平坦で、中央部がよく踏み固められている。

炉 中央部床面で径54cmの円形に、焼上の広がりを確認できた。炉床面は火熱を受けて硬化している。

竈 北壁の中央部にロームと砂質粘土で構築されている。天井部は崩落し、両袖部が残存している。規模は、焚口部から煙道部までの最大長175cm、袖部の最大幅220cmである。煙道部は壁外へ70cm張り込んでおり、煙道は緩やかな傾斜で立ち上がっている。火床部は床面から10cmほど掘りくぼめられており、火熱を受けて小変硬化している。竈上層断面図中、第1～3層は崩落した天井部、第13層は火床部の覆土、第16・18～24層は袖部である。袖部はロームを掘り残して基部として、その上にロームと砂質粘土を混ぜた土で構築されている。

竈上層解説

1 灰褐色	砂質粘土粒子多量、ローム粒子中量、ローム小ブロック、焼土小ブロック、焼上粒子・炭化粒子少量
2 暗赤褐色	焼土粒子中量、ローム小ブロック・ローム粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック・炭化物・砂質粘土粒子少量
3 暗赤褐色	焼土粒子多量、焼土小ブロック中量、ローム粒子・焼土中ブロック・炭化物・砂質粘土粒子少量
4 暗赤褐色	ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・砂質粘土粒子少量
5 黒褐色	砂質粘土粒子中量、ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
6 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・砂質粘土粒子少量
7 暗赤褐色	焼土粒子多量、焼土小ブロック中量、ローム粒子・焼土中ブロック・砂質粘土粒子少量
8 暗赤褐色	焼土小ブロック・砂質粘土粒子中量、ローム粒子・焼土中ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量
9 暗赤褐色	焼土小ブロック・炭化粒子中量、ローム小ブロック・ローム粒子・焼土中ブロック・焼土粒子・炭化物・砂質粘土粒子少量
10 暗赤褐色	焼土粒子多量、焼土小ブロック中量、ローム粒子・炭化物少量
11 灰褐色	灰多量、焼土粒子少量
12 暗赤褐色	焼土粒子多量、焼土小ブロック中量、焼土中ブロック・炭化物・炭化粒子・灰少量
13 暗赤褐色	焼土粒子・炭化粒子中量、ローム粒子少量、ローム小ブロック・炭化物・砂粒微量
14 暗赤褐色	焼土小ブロック・焼土粒子中量、ローム粒子・焼土中ブロック・炭化物・炭化粒子少量、砂粒微量
15 暗赤褐色	焼土粒子中量、ローム小ブロック・ローム粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック・炭化粒子少量、炭化物・砂粒微量
16 暗赤褐色	焼土粒子・砂粒多量、砂質粘土粒子中量、焼土小ブロック・炭化粒子少量、ローム粒子微量
17 におい褐色	ローム粒子中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・砂粒少量、焼土中ブロック・焼土小ブロック・粘土粒子微量
18 におい褐色	砂粒多量、焼土粒子・砂質粘土粒子中量、ローム粒子・焼土小ブロック・炭化粒子微量
19 暗赤褐色	砂粒中量、ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・砂質粘土粒子少量、炭化粒子微量
20 におい褐色	砂粒多量、砂質粘土粒子中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量
21 灰褐色	砂粒多量、砂質粘土粒子中量、ローム粒子少量
22 灰褐色	砂粒多量、砂質粘土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子微量
23 灰褐色	砂粒多量、砂質粘土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量、焼土小ブロック微量
24 灰褐色	砂粒多量、砂質粘土粒子中量、ローム粒子少量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
25 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・砂粒少量、ローム中ブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量

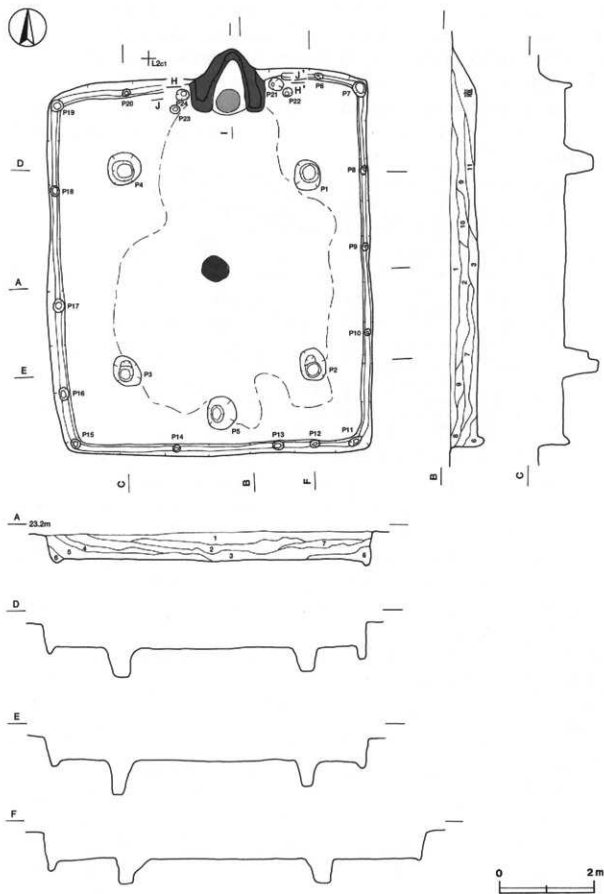
ピット 24か所（P1～P24）。P1～P4は長径60～70cm、短径53～69cmの円形または楕円形で、深さ48～74cmである。各コーナー寄りに配置されていることと形状から、主柱穴と考えられる。P5は長径69cm、短径60cmの楕円形で、深さ45cmである。南壁寄りの中央に位置していることと形状から、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6～P20は長径16～31cm、短径14～27cmの円形または楕円形で、深さ19～52cmである。壁溝の底面で確認されていることと形状から、壁柱穴と考えられる。P21～P24は長径21～30cm、短径18～28cmの円形または楕円形で、深さ12～35cmである。竈の両袖部で確認されることと形状から、竈間差施設に伴うピットと考えられる。

覆土 11層からなり、土層断面図中、第1・2・10層は焼土を含み、ブロック状の堆積をしていることから人為堆積、他の層はレンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。第4層は第5層よりやや暗い色調である。

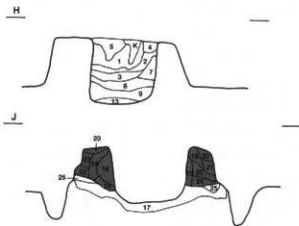
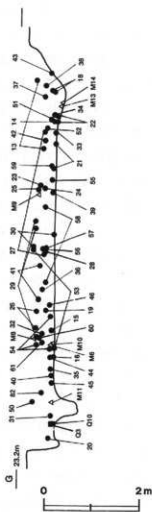
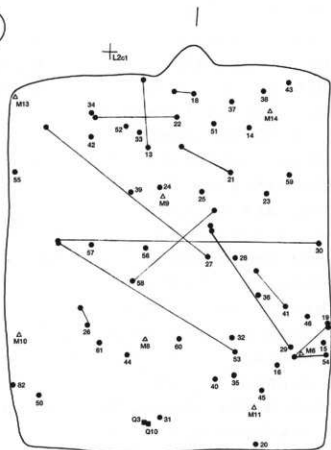
土層解説

1 黒褐色	ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量	7 暗褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子少量
2 暗赤褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子少量	8 暗褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
3 黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	9 暗赤褐色	焼土粒子・砂質粘土粒子中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・砂質粘土粒子少量
4 暗褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量	10 黒褐色	ローム粒子・炭化物・炭化粒子・砂質粘土粒子少量
5 暗褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量	11 黒褐色	ローム粒子・炭化物・炭化粒子・砂質粘土粒子少量、砂質粘土粒子中量、ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量
6 褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量、ローム中		

遺物 土師器片1999点（坏・高台付坏71、鉢5、甕・瓶1923）、須恵器片1868点（坏・高台付坏1352、高盤22、盤2、高台付皿4、蓋390、短頸壺1、四耳瓶4、握ね鉢2、甕・瓶91）、灰陶陶器片6点（瓶4、長頸瓶2）、土製品3点（紡錘車1、不明2）、石製品2点（紡錘車）、鉄器・鉄製品8点（刀子4、鎌2、鎌1、門金具1）、



第127图 第62号住居跡実測图(1)

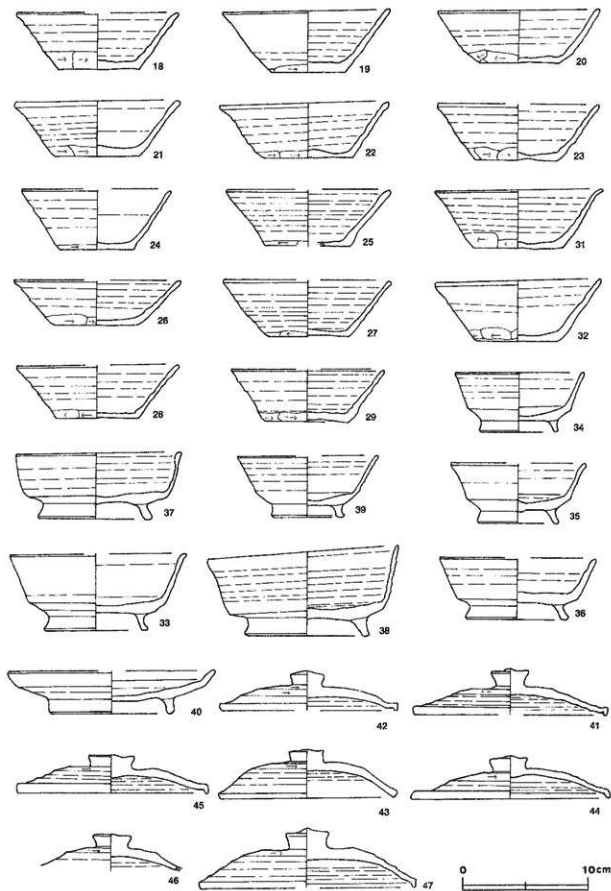


第128図 第62号住居跡実測図(2)

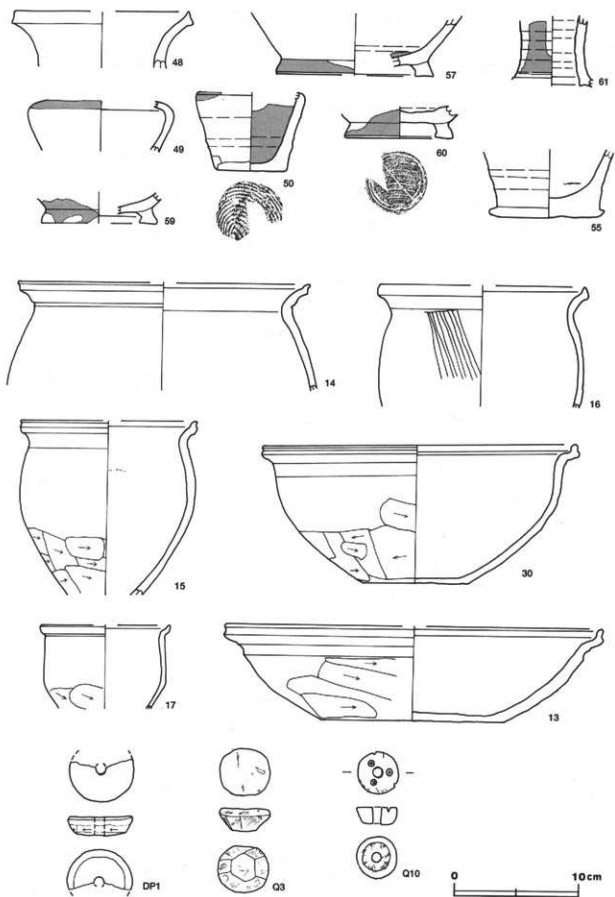
銅製品1点(柄頭)が出土している。これらの遺物は、覆土中層から覆土下層にかけて、全体的に出土している。特に中央部の覆土中層からは多数出土している。そのほか、混入した縄文土器片75点、攪乱により混入した陶器片73点が出土している。第130図13の土師器鉢は、竈前中央部の覆土上層及び中層から出土した破片が接合したものである。30の土師器鉢は、西部の覆土上層から出土した破片と東壁際中央部の覆土下層から出土した破片が接合したものである。14の土師器甕は北東部の覆土下層から正位で、15の土師器小形甕は東壁際中央部の覆土下層から逆位で、16の土師器甕は南東部の覆土下層から逆位で出土している。17の土師器小形甕はP1の覆土中から出土している。第129図18の須恵器坏は、竈内覆土中と竈前覆土下層から出土した破片が接

合したものである。19の須恵器環は東壁際中央部の覆土下層から正位で、20の須恵器環は南壁際の覆土下層から正位で出土している。21の須恵器環は、竈前と中央部の覆土下層から出土した破片が接合したものである。22の須恵器環は、北西部と竈前中央部の床面から出土した破片が接合したものである。23の須恵器環は東部の覆土中層から正位で、24の須恵器環は中央部の覆土中層から正位で、25の須恵器環は中央部の覆土中層から正位で、26の須恵器環は南西部の覆土中層から正位で出土している。27の須恵器環は北西コーナ部及び中央部の覆土中層から出土した破片が接合したものである。28の須恵器環は中央部覆土中層から正位で出土している。29の須恵器環は中央部及び南東部の覆土中層から出土した破片が接合したものである。31の須恵器環は中央部南壁寄りの覆土下層から正位で、32の須恵器環は中央部の覆土中層から逆位でそれぞれ出土している。33の須恵器高台付環は、竈前面の床面から出土した破片と竈内覆土中から出土した破片が接合したものである。34の須恵器高台付環は北西部の覆土下層から正位で、35の須恵器高台付環は南部の床面から逆位で出土している。36の須恵器高台付環は、東部の覆土中層から出土した破片と覆土中層及び下層から出土した破片が接合したものである。37の須恵器高台付環は竈前の覆土中層から逆位で、38の須恵器高台付環は竈前の覆土中層から正位で、39の須恵器高台付環は中央部の覆土下層から正位で、40の須恵器蓋は南部の覆土下層から逆位で、41の須恵器蓋は東部の覆土中層から逆位で、42の須恵器蓋は北西部の覆土中層から逆位で、43の須恵器蓋は北東部の覆土下層から斜位でそれぞれ出土している。44の須恵器蓋は、南部の覆土下層から出土した破片と覆土中層から出土した破片が接合したものである。45の須恵器蓋は南東部の覆土下層から逆位で、46の須恵器蓋は東部の覆土下層から正位で、47の須恵器蓋は覆土中から、第130図48の須恵器長頸瓶は覆土中層からそれぞれ出土している。49の須恵器短頸壺は覆土上層から、50の須恵器短頸壺は南西部の覆土上層から出土している。57の須恵器長頸瓶は西部の覆土中層から逆位で、第131図51の須恵器甕は竈前の覆土下層から正位で、52の須恵器甕は竈前の覆土中層から正位で出土している。53の須恵器甕は、西部の覆土上層から出土した破片と南部の覆土下層から出土した破片が接合したものである。82の須恵器甕は、西壁際の覆土中層から正位で出土している。54の須恵器甕は、東壁際中央部の覆土中層及び下層から出土した破片が接合したものである。第130図55の須恵器埴輪鉢は、西壁際の覆土下層から正位で出土している。第131図56の須恵器四耳壺は中央部の覆土中層から正位で、58の灰釉陶器短頸壺は中央部の覆土中層から正位で、第130図59の灰釉陶器甕は東部の覆土下層から逆位で、60の灰釉陶器甕は南部の覆土中層から正位で、61の灰釉陶器長頸瓶は南西部の覆土中層からそれぞれ出土している。DP1の紡錘車は、覆土中から出土している。Q3の紡錘車は南壁際の床面から、Q10の紡錘車は南壁際の床面から出土している。第131図M6の刀子は南東部の覆土下層から、M7の刀子は覆土上層から、M8の刀子は南部の覆土上層から、M9の刀子は中央部の覆土中層から、第132図M10の鎌は西壁際の床面から、M11の鎌は南東部の覆土下層から、第131図12の柄頭は覆土上層から、第132図M13の鎌は北西部の覆土下層から、M14の門金具は北東部の覆土下層から出土している。出土状況から、17・22・33・35・Q3・Q10・M10は本跡に伴う遺物と考えられる。

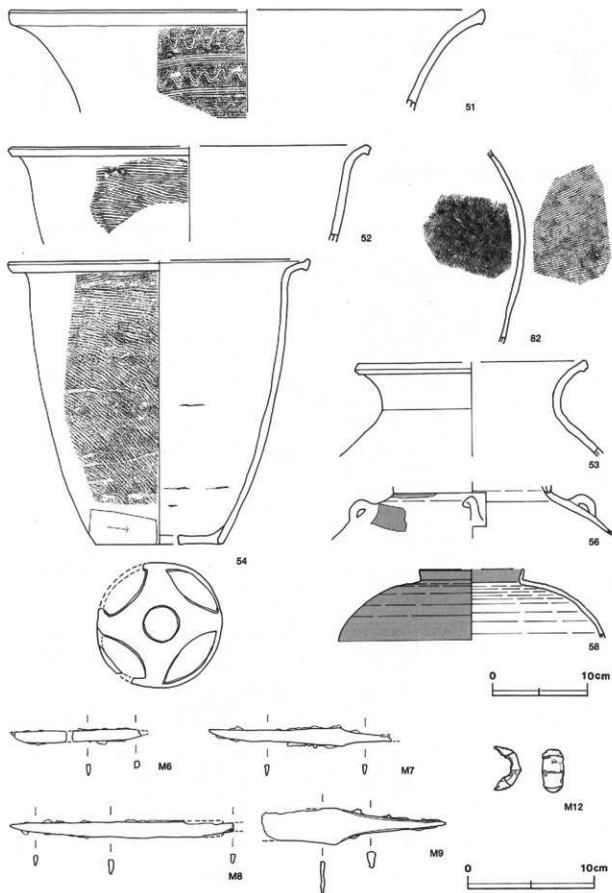
所見 本跡は面積が53㎡を超え、当遺跡では最大規模の住居跡である。また出土遺物数も最も多い。確認面から床面にかけて多数の土器片が出土しており、床面から覆土下層にかけての土器群と、覆土中層から上層にかけての土器群の大きく分けることができる。床面から覆土下層にかけての土器群は、9世紀前葉の土器が多く、堆積状況は自然堆積であることから住居が使用されていた時期のものまたは廃絶後間もない時期に投棄されたと考えられる。それに対して、覆土中層から上層にかけての土器群の時期は、9世紀中葉から後葉にかけての土器が多く、堆積状況は人為堆積であることから、住居が廃絶され、ある程度埋没した後に、投棄されたものと考えられる。時期は、本跡に伴う土器から9世紀前葉と考えられる。



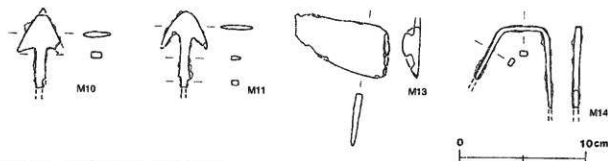
第129图 第62号住居跡出土遺物実測図(1)



第130图 第62号住居跡出土遺物実測図(2)



第131图 第62号住居跡出土遺物実測図(3)



第132図 第62号住居跡出土遺物実測図(4)

第62号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第130図 13	鉢 土師器	A [29.8]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は内湾気味に立ち上がる。口縁部は外反し、肩部は上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。底部多方向のへラ削り。	砂粒・白色粒子にふい・褐色 普通	10%
		B 7.5				
		C [14.4]				
14	変形 土師器	A [22.8]	体部上半から口縁部にかけての破片。頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は外反し、肩部は外方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面へラナデ。	砂粒・白色粒子に褐色 普通	5%
		B (8.5)				
15	小形変 土師器	A [13.8]	体部から口縁部にかけての破片。体部は内湾気味に立ち上がり、頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は外反し、肩部は上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部下横方向のへラ削り。内面へラナデ。	砂粒・白色粒子に明赤褐色 普通	30% 体部内面残存者
		B [13.9]				
16	変形 土師器	A [16.2]	体部上半から口縁部にかけての破片。頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は外反し、肩部は上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面上平斜位のへラナデ。内面へラナデ。	砂粒・白色粒子にふい・褐色 普通	30%
		B (9.6)				
17	小形変 土師器	A [10.2]	体部から口縁部にかけての破片。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反し、肩部は外上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面下斜斜位のへラ削り。	砂粒・雲母にふい・褐色 普通	20% 二次焼成
		B (6.6)				
第129図 18	坏 須恵器	A [12.8]	底部から口縁部にかけての破片。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部。体部内・外面及び底部内面口ロナデ。体部下端手持ちへラ削り。底部1方向の手持ちへラ削り。	石英・砂粒・白色粒子に灰色 普通	50%
		B 4.5				
		C 6.4				
19	坏 須恵器	A 13.1	体部から口縁部にかけて一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部。体部内・外面及び底部内面口ロナデ。体部下端手持ちへラ削り。底部1方向の手持ちへラ削り。	石英・砂粒・雲母に灰色 普通	80% P L.65
		B 5.1				
		C 5.8				
20	坏 須恵器	A 12.9	定形。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部。体部内・外面及び底部内面口ロナデ。体部下端手持ちへラ削り。底部1方向の手持ちへラ削り。	砂粒・白色粒子に暗灰黄色 普通	100% P L.65
		B 4.4				
		C 6.2				
21	坏 須恵器	A 12.8	底部から口縁部にかけて一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部。体部内・外面及び底部内面口ロナデ。体部下端手持ちへラ削り。底部1方向の手持ちへラ削り。	長石・石英・砂粒に灰色 普通	70% P L.65
		B 4.4				
		C 6.6				
22	坏 須恵器	A 13.4	体部から口縁部にかけて一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部。体部内・外面及び底部内面口ロナデ。体部下端手持ちへラ削り。底部凹へラ切り痕を残す。1方向の手持ちへラ削り。	石英・砂粒・白色粒子に褐色 普通	80% P L.65 体部内面残存者
		B 4.5				
		C 7.0				
23	坏 須恵器	A [12.8]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部。体部内・外面口ロナデ。体部下端手持ちへラ削り。底部凹へラ切り痕を残す。1方向の手持ちへラ削り。	石英・砂粒・白色粒子に褐色 普通	40%
		B 4.5				
		C 6.2				

遺物番号	器種	計面積 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第129図 24	坏 須恵器	A [116]	底部から口縁部にかけての破片。 平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面及び底部内 面ロクロナデ。体部下端手持ちへ ラ削り。底部回転へラ切り痕を残 す。1方向の手持ちへラ削り。	石英・砂粒・白色 粒子 黄灰色 普通	60%
		B 4.8				
		C 5.8				
25	坏 須恵器	A [128]	底部から口縁部にかけての破片。 平底。体部は外傾して立ち上り、 口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面及び底部内 面ロクロナデ。体部下端へラ削り。 底部多方向の手持ちへラ削り。	長石・砂粒・白色 粒子 黄灰色。普通	30%
		B 4.5				
		C [6.6]				
26	坏 須恵器	A [132]	底部から口縁部にかけての破片。 平底。体部は外傾して立ち上がり、 口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面及び底部内 面ロクロナデ。体部下端手持ちへ ラ削り。底部へラ切り痕を残す。 1方向の手持ちへラ削り。	小礫・長石・砂粒 灰色 普通	30%
		B 3.6				
		C 6.4				
27	坏 須恵器	A [130]	底部から口縁部にかけての破片。 平底。体部は外傾して立ち上がり、 口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面及び底部内 面ロクロナデ。体部下端手持ちへ ラ削り。底部1方向の手持ちへラ 削り。	砂粒・白色粒子 灰色 普通	40%
		B 4.5				
		C 6.4				
28	坏 須恵器	A [128]	底部から口縁部にかけての破片。 平底。体部は外反して立ち上がり、 口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面及び底部内 面ロクロナデ。体部下端手持ちへ ラ削り。底部回転へラ切り。	砂粒・白色粒子 黄灰色 普通	40%
		B 4.2				
		C 6.4				
29	坏 須恵器	A [120]	底部から口縁部にかけての破片。 平底。体部は外反して立ち上り、 口縁部に至る。	口縁部、体部内・外面及び底部内 面ロクロナデ。体部下端手持ちへ ラ削り。底部回転へラ切り痕を残 す。2方向の手持ちへラ削り。	砂粒・雲母・白色 粒子 灰色 普通	50%
		B 4.2				
		C 6.4				
第130図 30	鉢 土師器	A 27.8	底部から口縁部にかけて一部欠 損。平底。体部は内彎気味に立ち 上がる。口縁部は外反し、端部は 上方にまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・ 外面ナデ。体部下端手持ちへラ 削り。底部多方向のへラ削り。	砂粒・白色粒子 に白い靨色 普通	80%
		B 11.2				
		C 8.4				
第129図 31	坏 須恵器	A 131	底部から口縁部にかけての破片。 平底。体部は外傾して立ち上がり、 口縁部は外反する。	口縁部、体部内・外面及び底部内 面ロクロナデ。体部下端手持ちへ ラ削り。底部多方向のへラ削り。	砂粒・礫・白色粒 子 黄灰色。普通	60% P L 65 器部内・外縁部付
		B 4.7				
		C 7.0				
32	坏 須恵器	A 132	底部から口縁部にかけて一部欠 損。平底。体部は外傾して立ち上り、 口縁部は外反する。	口縁部、体部内・外面及び底部内 面ロクロナデ。体部下端手持ちへ ラ削り。底部1方向の手持ちへラ 削り。	砂粒・雲母・白色 粒子 灰色 普通	70% P L 66 器部内・外縁部付
		B 5.0				
		C 6.2				
33	高台付坏 須恵器	A [140]	高台部から口縁部にかけての破片。 短いハの字状の高台が付く。体部 は外傾して立ち上がり、口縁部 はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面及び底部内 面ロクロナデ。底部回転へラ削り後、 高台貼り付け。	小礫・砂粒・白色 粒子 灰色 普通	50% P L 66
		B 6.1				
		D 8.1				
		E 1.0				
34	高台付坏 須恵器	A 101	高台部から口縁部にかけて一部欠 損。短いハの字状の高台が付く。 体部は外傾して立ち上がり、口縁 部に至る。	口縁部、体部内・外面及び底部内 面ロクロナデ。底部回転へラ削り 後、高台貼り付け。	石英・砂粒・白色 粒子 灰色 普通	95%
		B 4.7				
		D 6.2				
		E 0.9				
35	高台付坏 須恵器	A [106]	底部から口縁部にかけての破片。 短いハの字状の高台が付く。体部 は外傾して立ち上がり、口縁部は わずかに外反する。	口縁部、体部内・外面及び底部内 面ロクロナデ。底部回転へラ削り 後、高台貼り付け。	小礫・砂粒・白色 粒子 灰色 普通	40%
		B 4.8				
		D 6.3				
		E 1.2				
36	高台付坏 須恵器	A [124]	底部から口縁部にかけての破片。 ハの字状の高台が付く。体部は外 傾して立ち上がり、口縁部はわず かに外反する。	口縁部、体部内・外面及び底部内 面ロクロナデ。底部へラ切り後、 高台貼り付け。	小礫・砂粒・白色 粒子 灰色 普通	60% P L 66
		B 4.9				
		D 8.0				
		E 1.2				
		E 1.2				
37	高台付坏 須恵器	A 130	高台部から口縁部にかけて一部欠 損。短いハの字状の高台が付く。 体部は外傾して立ち上がり、口縁 部に至る。	口縁部、体部内・外面及び底部内 面ロクロナデ。底部回転へラ削り 後、高台貼り付け。	小礫・砂粒・白色 粒子 灰色 普通	80% P L 66
		B 5.4				
		D 9.0				
		E 1.1				
		E 1.1				
38	高台付坏 須恵器	A 147	高台部から口縁部にかけて一部欠 損。短いハの字状の高台が付く。 体部は外傾して立ち上がり、口縁 部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面及び底部内 面ロクロナデ。底部回転へラ削り 後、高台貼り付け。	小礫・砂粒・白色 粒子 灰色 普通	80% P L 66
		B 6.1~7.2				
		D 9.4				
		E 1.5				
		E 1.5				

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第129回 39	高台付 須恵器	A [112]	高台部から口縁部にかけての破片。垂下する短い高台が付く。体部は外傾しながら立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け。	砂粒・雲母・白色 粒子 に白い褐色 普通	30%
		B 49				
		D 5.6				
		E 1.1				
40	髷 須恵器	A [160]	高台部から口縁部にかけての破片。ほぼ垂下する短い高台が付く。体部は大きく開き、屈曲して口縁部に至る。口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面及び底部外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け。	砂粒・雲母・白色 粒子 灰色 普通	50% 二次焼成
		B 3.4				
		D 9.2				
		E 1.2				
41	蓋 須恵器	A [15.4]	口縁部からつまみ部にかけての破片。天井部は笠形で、擬宝珠状のつまみがつく。口縁部は短く折り返している。	口縁部、外周部内・外面ロクロナデ。天井部回転ヘラ削り後、つまみ貼り付け。	砂粒・雲母・石 英・白色粒子 に白い褐色 普通	40%
		B 3.7				
		F 2.8				
		G 1.4				
42	蓋 須恵器	A [138]	口縁部からつまみ部にかけての破片。天井部は笠形で、擬宝珠状のつまみがつく。口縁部は短く折り返している。	口縁部、外周部内・外面ロクロナデ。天井部回転ヘラ削り後、つまみ貼り付け。	砂粒・石英・白色 粒子 灰色 普通	30%
		B 3.2				
		F 2.7				
		G 1.4				
43	蓋 須恵器	A 13.8	口縁部からつまみ部にかけて一部欠損。天井部は笠形で、擬宝珠状のつまみがつく。口縁部は短く折り返している。	口縁部、外周部内・外面ロクロナデ。天井部頂部回転ヘラ削り後、つまみ貼り付け。	小粒・砂粒・白色 粒子 灰色 普通	95% P L 66
		B 3.9				
		F 2.8				
		G 1.0				
44	蓋 須恵器	A 15.7	口縁部からつまみ部にかけての破片。天井部は笠形で、擬宝珠状のつまみがつく。口縁部は短く折り返している。	口縁部、外周部内・外面ロクロナデ。天井部回転ヘラ削り後、つまみ貼り付け。	小粒・砂粒・白色 粒子 灰色 普通	60%
		B 3.5				
		F 3.0				
		G 1.0				
45	蓋 須恵器	A 14.8	口縁部からつまみ部にかけて一部欠損。天井部は笠形で、擬宝珠状のつまみがつく。口縁部は短く折り返している。	口縁部、外周部内・外面ロクロナデ。天井部回転ヘラ削り後、つまみ貼り付け。	小粒・砂粒・雲 母・白色粒子 黄灰色 普通	80% P L 66
		B 3.1				
		F 3.6				
		G 1.1				
46	蓋 須恵器	B (2.9)	口縁部からつまみ部にかけての破片。天井部は笠形で、擬宝珠状のつまみがつく。	天井部内・外面ロクロナデ。天井部回転ヘラ削り後、つまみ貼り付け。	小粒・砂粒・雲 母・白色粒子 灰オリーブ色、普通	50% 扉部内・外面焼
		F 3.0				
		G 1.1				
		B (2.9)				
47	蓋 須恵器	A [168]	口縁部からつまみ部にかけての破片。天井部は笠形で、擬宝珠状のつまみがつく。口縁部は短く折り返している。	天井部内・外面ロクロナデ。天井部回転ヘラ削り後、つまみ貼り付け。	小粒・砂粒・白色 粒子 灰色 普通	40%
		B 4.7				
		F 3.3				
		G 1.6				
第130回 48	長頸 須恵器	A [13.8]	口縁部の破片。口縁部は外反し、肩部は上下に突出させている。	口縁部内・外面ロクロナデ。	砂粒・白色粒子 灰色、普通	5%
		B (4.5)				
49	短頸 須恵器	B (4.0)	体部の破片。体部上位に最大径を持つ。	体部内・外面ロクロナデ。肩部外面に自然釉。	砂粒・白色粒子、灰色、 輪色は黄褐色、普通	5%
50	短頸 須恵器	B (6.3)	底部から頸部にかけての破片。平底。底部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。体部外面ト溝横位ヘラ削り。底部回転糸切り。体部内・外面に自然釉。	小粒・砂粒・白色 粒子、灰色 輪色は黄褐色、普通	30% P L 66
		C 5.4				
第131回 51	蓋 須恵器	A [49.2]	口縁部の破片。口縁部は外反し、肩部は凹取りし、角張らせている。	口縁部外面には1本1單位の櫛歯状の1又はよる波状文と3本の櫛歯の連続文が施す。	小粒・砂粒・雲 母・白色粒子 灰色、普通	5%
		B (10.5)				
52	蓋 須恵器	A [36.8]	体部から口縁部にかけての破片。口縁部は外反し、肩部はわずかに垂下する。	口縁部内・外面ロクロナデ。体部外面横位の平行印き。	砂粒・雲母・白色 粒子 黄灰色、普通	5%
		B (10.0)				
53	蓋 須恵器	A [23.6]	体部から口縁部にかけての破片。口縁部は外反し、肩部は上下に突出している。	口縁部内・外面ロクロナデ。体部外面横位の平行印き。	砂粒・雲母・白色 粒子 灰色、普通	5%
		B (9.8)				
54	瓶 須恵器	A [30.8]	底部から口縁部にかけての破片。底部は5孔式。体部は直線的に立ち上がる。口縁部は外反し、肩部は上下に突出している。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位の平行印き、下手横位のヘラ削り。	砂粒・雲母・白色 粒子 灰色 普通	50%
		B 29.7				
		C 13.2				
第130回 55	程ね鉢 須恵器	B (5.5)	底部から体部にかけての破片。平底。底部は体部より径が大きく、中央部に小孔がある。体部はわずかに外傾して立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。底部多方向のヘラナデ。底部の小孔は焼成前穿孔。	小粒・砂粒・雲母 黄灰色 普通	50% P L 66
		C 9.1				

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第131図 56	四耳 須恵器	B (5.4)	体部及び把手の破片。肩部に把手が付く。	体部内・外面ロクロナデ。体部外面に施釉。	長石・砂粒・白色粒子、褐色、釉色は暗灰黄色普通	5% P.L.66
第130図 57	長頸瓶 須恵器	B (49) D [12.4] E 1.2	高台部から体部にかけての破片。ハの字状の高台が付く。高台の接地面は斜位である。体部は内彎気味に外傾して立ち上がる。	体部内・外面と底部内面ロクロナデ。体部外面下端へう削り。高台部と底部内面に自然釉。	長石・砂粒・白色粒子、灰色、釉色は淡緑色普通	5% P.L.66
第131図 58	短頸壺 灰釉陶器	A [10.8] B (7.2)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部及び体部内・外面ロクロナデ。口縁部内面及び体部外面に自然釉。	長石・砂粒・白色粒子、黄灰色、釉色は淡緑色良好	10% P.L.66
第130図 59	瓶 灰釉陶器	B (2.5) D .92 R 1.1	高台部から底部にかけての破片。短いハの字状の高台が付く。高台の接地面は斜位である。	底部内面ロクロナデ、外面へう削り後、高台貼り付け。高台部と底部内面に施釉。	砂粒・白色粒子 灰褐色、釉色は青緑色、良好	5%
60	瓶 灰釉陶器	B (2.1) D 8.4 E 1.3	高台部から底部にかけての破片。長いハの字状の高台が付く。高台の接地面は斜位である。	底部内面ロクロナデ、外面へう削り後、高台貼り付け。高台部と底部内面に施釉。	砂粒・白色粒子 黄灰色、釉色は濃緑色、普通	3%
61	長頸瓶 灰釉陶器	B (5.6)	頸部の破片。わずかに外彎気味に立ち上がる。	頸部内・外面ロクロナデ。頸部外面に自然釉。	砂粒・白色粒子 灰黄褐色 釉色は淡緑色、良好	5%
第131図 82	壺 須恵器	B (20.1)	体部の破片。	体部外面縦位の平行叩き、内面同心円状の当て具痕。	砂粒・雲母・白色粒子 黄灰色、普通	5%

遺物番号	器種	計測値				材質	特徴	備考	
		上面径(cm)	下面径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)				重量(g)
新32図DP1	紡錘車	5.1	4.0	1.4	0.8	(24.4)	須恵質	下商外周部子持ちへう削り	P.L.70

遺物番号	器種	計測値				材質	特徴	備考	
		上面径(cm)	下面径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)				重量(g)
第130図Q3	紡錘車	4.1	2.2	1.8	-	32.8	凝灰質	側面に纏網。未成品	P.L.71
Q10	紡錘車	3.2	2.3	1.3	0.7	23.6	滑石	上面に未貫通の穿孔3か所	P.L.71

遺物番号	器種	計測値						材質	特徴	備考
		全長(cm)	刃身長(cm)	身幅(cm)	歯幅(cm)	茎長(cm)	底径(g)			
第131図M6	刀子	[100]	[8.5]	0.9	0.2	(1.5)	(9.2)	鉄	両側あり。基部の一部欠損	P.L.72
M7	刀子	(14.4)	10.4	0.9	0.3	(4.0)	(22.6)	鉄	両側あり。基部の一部欠損	P.L.72
M8	刀子	(17.6)	16.9	1.2	0.3	(0.7)	(23.3)	鉄	両側あり。基部の一部欠損	P.L.72
M9	刀子	(14.5)	(5.9)	3.0	0.2	8.6	(33.5)	鉄	両側あり。切先の一部欠損	P.L.72

遺物番号	器種	計測値						材質	特徴	備考		
		全長(cm)	葉身長(cm)	葉幅(cm)	葉厚(cm)	葉根幅(cm)	葉長(cm)				厚さ(cm)	重量(g)
第132図M10	鎌	(5.9)	(3.0)	(3.3)	2.4	0.5	(0.7)	0.5	(16.3)	鉄	三角形。葉身基部の一部欠損	P.L.73
M11	鎌	(6.1)	(2.8)	3.3	3.3	0.7	(0.7)	0.3~0.4	(10.0)	鉄	三角形。基部一部欠損	P.L.73

遺物番号	器種	計測値			材質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	重量(g)			
第131図M12	柄頭	3.4	1.6	9.5	銅	表面に鍍金の一部残存	P.L.76

遺物番号	器種	計測値				材質	特徴	備考
		全長(cm)	背幅(cm)	刃幅(cm)	重量(g)			
新32図M13	鎌	(7.5)	0.5	4.1	(40.9)	鉄	刃の中央部から基部の破片	P.L.74

遺物番号	器 種	計 測 値				材 質	特 徴	備 考
		全長(cm)	幅(cm)	断面幅(cm)	重量(g)			
第132[M]4	門 金 具	(6.5)	(6.2)	0.6×0.4	(16.9)	鉄	断面形は長方形	P L 75

第65号住居跡 (第133・134図)

位置 調査4区の南部，L 1 d 8区。

重複関係 第88・158号土坑に掘り込まれており，兩者よりも古い。

規模と平面形 北壁西部を掘り残す形で，長さ0.9～1.2m，幅0.3～0.4mの台形状の櫛状施設が付設されている。それを含めて長軸4.24m，短軸3.76mの長方形になるものと考えられる。

主軸方向 N-10°-W

壁 外傾して立ち上がっている。壁高は52～60cmである。

壁溝 北東コーナー部を除き，壁下を巡っている。上幅20～35cm，下幅5～15cm，深さ5cmで，断面形はU字形である。

床 ほぼ平坦で，あまり踏み固められていない。

竈 北壁の中央部にロームと粘土，砂粒で構築されている。天井部は崩落し，袖部が残存している。規模は，焚口部から煙道部まで115cm，袖部最大幅90cmである。煙道部は壁外へ10cm掘り込んでおり，煙道は外傾して立ち上がっている。火床部は床面から7cmほど掘りくぼめられており，火熱を受け赤変硬化している。火床部の中央から土師器窯の底部から体部にかけての破片が逆位で出土しており，支脚として使用されたと推定される。竈土層断面図中，第2層は天井部の崩落土，第11層は袖の基部，第10・12・16層は袖部，第14・15層は火床部の掘り方の埋土である。

竈土層解説

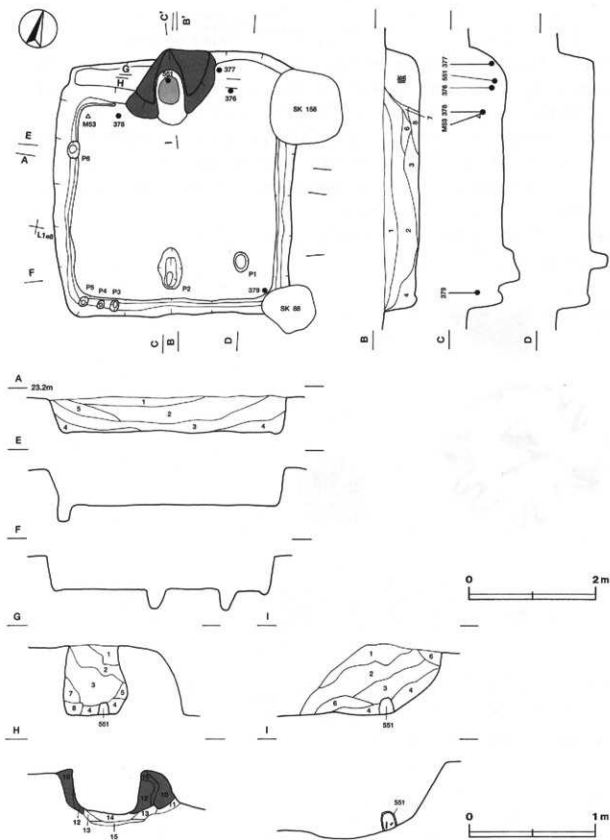
- 1 黒褐色 rome小ブロック・rome粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 黄褐色 粘土粒子中量，rome小ブロック・rome粒子・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量
- 3 灰褐色 rome小ブロック・rome粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・粘土粒子少量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子中量，rome粒子・焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子少量
- 5 灰褐色 rome粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
- 6 黒褐色 rome粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量，粘土粒子微量
- 7 灰褐色 粘土粒子中量，rome粒子・焼土粒子少量
- 8 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子中量，rome粒子・粘土粒子少量
- 9 灰褐色 粘土粒子中量，rome小ブロック・rome粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 10 灰褐色 砂粒多量，rome粒子・粘土粒子少量
- 11 褐色 rome粒子中量，rome小ブロック・砂粒少量，粘土粒子微量
- 12 暗赤褐色 焼土粒子・粘土粒子・砂粒中量，焼土小ブロック・炭化粒子少量
- 13 暗赤褐色 rome粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量
- 14 輝暗赤褐色 焼土粒子中量，焼土小ブロック・炭化粒子・砂粒少量
- 15 極暗褐色 rome粒子中量，rome中ブロック・rome小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 16 赤褐色 砂粒多量，rome粒子・焼土粒子・粘土粒子少量

ピット 6か所 (P 1～P 6)。P 1は長径30cm，短径20cmの楕円形で，深さは33cmである。南東コーナー寄りに位置していることと形状から，支柱穴の可能性が考えられる。床面を精査したが，支柱穴は他には確認されなかった。P 2は長径65cm，短径35cmの不整楕円形で，深さは35cmである。南壁際の中央に位置していることと形状から，出入り施設に伴うピットと考えられる。P 3～P 6は長径15～28cm，短径10～20cmの楕円形で，深さは40～48cmである。それぞれ壁際に配置されていることと形状から，壁柱穴と考えられる。

覆土 8層からなる。レンズ状に堆積しており，自然堆積と考えられる。土層断面図中，第5層は第4層よりも色が暗い。

土層解説

- 1 黒褐色 rome小ブロック・rome粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 rome小ブロック・rome粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量，rome中ブロック微量

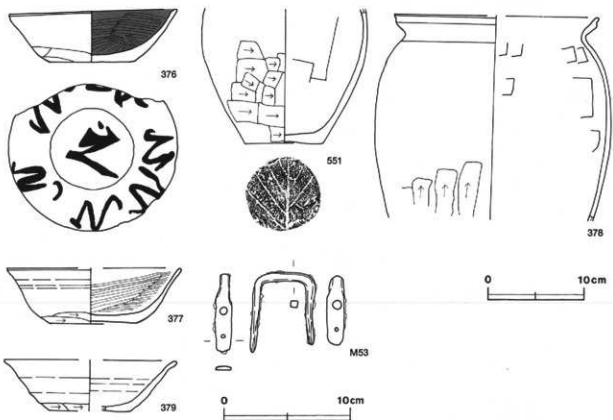


第133图 第65号住居跡実測图

- 3 赭褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
 4 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
 5 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
 6 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
 7 暗褐色 粘土粒子中量, ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
 8 暗赤褐色 粘土粒子中量, ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量

遺物 土師器片164点(環・高台付坏26, 甕・瓶138), 須恵器片304点(環・高台付坏23, 蓋9, 甕・瓶272), 灰釉陶器片1点(長頸瓶), 鉄製品1点(鍔金具)が出土している。これらの遺物は, 竈内の覆土や北東部と南東部の覆土下層から床面にかけて数多く出土している。それらのほかに, 混入した縄文土器片13点が出土している。第134図376・377は土師器坏である。376は北東部の覆土下層から正位で, 377は北東部壁際の覆土下層から逆位でそれぞれ出土している。378の土師器甕は, 北西部の覆土中層から出土している。379の須恵器坏は, 南東部の覆土中層から出土している。551の土師器小形甕は, 竈の火床面から逆位で出土している。M53の鍔金具は, 北西部の覆土中層から出土している。

所見 本跡からは鍔金具が出土しており, 馬の飼養が推定される。時期は, 覆土下層の出土土器から, 9世紀中葉から後葉と考えられる。



第134図 第65号住居跡出土遺物実測図

第65号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第134図 376	坏 土師器	A 13.4	口縁部の一部欠損。平底, 体部は	口縁部, 体部内・外面及び底部内	雲母・砂粒・白色 粒子 明赤褐色 普通	80% P I. 66 体部・底部外面: 「定」の磨き
		B 4.2	内彎気味に立ち上がり, 口縁部は	面ロクロナデ, 体部内面ヘラ磨き。		
		C 6.6	わずかに外反する。	体部下端持ちヘラ削り。底部多 方向のヘラ削り。内面黒色処理。		

遺物番号	器 種	計測値 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第134図 377	杯 土 師 器	A [13.0]	体部から口縁部にかけて一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面及び底部内面 ロクロナデ、体部内面ヘラ起き、体部 下端手持ちヘラ削り。底部ヘラ切り 痕を残す1方向のヘラ削り。	石灰・砂粒・白色 粒子 明赤褐色 普通	80% P.L66
		B 4.4				
		C 5.7				
378	盃 土 師 器	A [21.4]	体部から口縁部にかけての破片。 体部内彎して立ち上がり、上位に 敷入を付す。胴部はくの字状に屈 曲する。口縁部は外反し、肩部は 上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面俱ナデ。体部内面 ヘラナデ。体部外面縦方向のヘラ 削り。	小礫・砂粒・白色 粒子 にふい褐色 普通	20%
		B (21.2)				
379	杯 須 忍 器	A [13.7]	底部から口縁部にかけての破片。 平底。体部は外傾して立ち上がり、 口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面及び底部内 面ロクロナデ。体部下端手持ちヘ ラ削り。底部手持ちヘラ削り。	小礫・砂粒・白色 粒子 灰褐色、普通	20%
		B 4.1				
		C [6.4]				
551	小 形 盃 土 師 器	B (10.7)	底部から体部にかけての破片。平 底。体部は内彎して立ち上がる。	体部内面ヘラナデ。体部外面縦方 向のヘラ削り。	小礫・砂粒・白色 粒子 褐色、普通	60%
		C 6.2				

遺物番号	器 種	計 測 値				材 質	特 徴	備 考
		全長(cm)	幅(cm)	断面幅(cm)	重量(g)			
第134B(3)	鍔 金 具	6.1	3.0	1.2×0.3	(29.3)	鉄	鍔貝部	P.L75

第66号住居跡 (第135・136図)

位置 調査4区の南部，L1e9区。

重複関係 第84・85号土坑に掘り込まれており，両者よりも古い。

規模と平面形 長軸4.58m，短軸4.10mの長方形である。

主軸方向 N-6°-W

壁 ほほ直立している。壁高は40cmである。

壁溝 全周している。上幅10～20cm，下幅3～10cm，深さ2～10cmで，断面形はU字形である。

床 ほほ平坦で，P1からP2にかけてと，P3周辺を中心に踏み固められている。

竈 北壁の中央部に粘土で構築されている。天井部は崩落し，袖部が残存している。規模は，焚1部から煙道部まで110cm，袖部最大幅110cmである。煙道部は壁外へ30cm掘り込んでおり，煙道は緩やかに外傾して立ち上がっている。火床部は床面から3cmほど掘りくぼめられており，火熱を受け赤変硬化している。竈土層断面図中，第8・9層は袖部，第11層は火床部の掘り方の埋土，第2層は大井部の崩落土である。

竈土層解説

- 1 明褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒少量
- 2 暗褐色 粘土粒少量，ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子・粘土粒子中量，ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子少量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子少量，ローム粒子・焼土小ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量
- 5 暗赤褐色 焼土小ブロック多量，焼土粒子中量，ローム粒子・焼土中ブロック・炭化粒子・灰少量
- 6 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒中量，ローム粒子・焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子・粘土粒子少量
- 7 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子中量，ローム小ブロック・焼土小ブロック・炭化粒子少量
- 8 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化物中量，ローム小ブロック・焼土中ブロック・焼土小ブロック・炭化物少量
- 9 明褐色 粘土粒少量，ローム小ブロック・焼土小ブロック・砂粒少量
- 10 暗褐色 焼土小ブロック・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子・灰少量
- 11 暗赤褐色 焼土小ブロック中量，焼土中ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量，ローム粒子少量

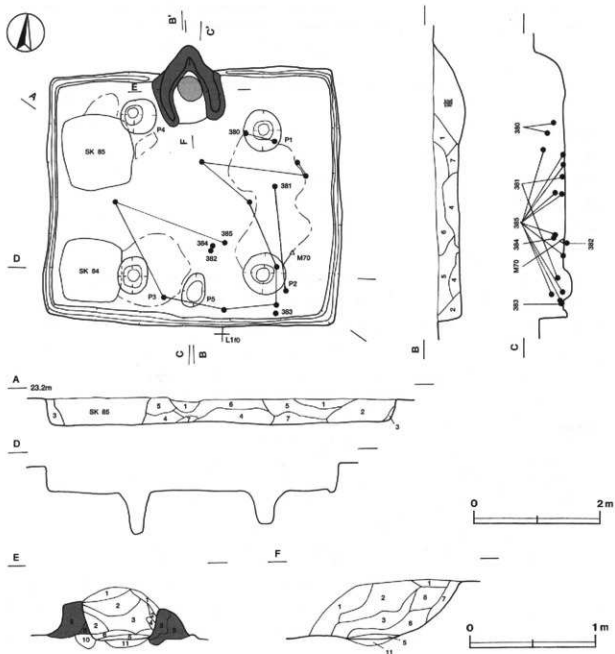
ピット 5か所 (P1～P5)。P1・P2・P4は径58～65cmの円形で，深さは55～68cmである。P3は長径58cm，短径50cmの楕円形で，深さは68cmである。各コーナー寄りに配置されていることと形状から，いずれも主柱穴と考えられる。P5は長径58cm，短径38cmの楕円形で，深さは15cmである。南壁寄りの中央に位置していることと形状から，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 7層からなる。ブロック状に堆積し、各層にロームブロックが含まれており、人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | |
|---|-----|--------------------------------|
| 1 | 黒褐色 | ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量 |
| 2 | 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量 |
| 3 | 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 4 | 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量 |
| 5 | 暗褐色 | ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量 |
| 6 | 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量 |
| 7 | 暗褐色 | ローム粒子少量 |

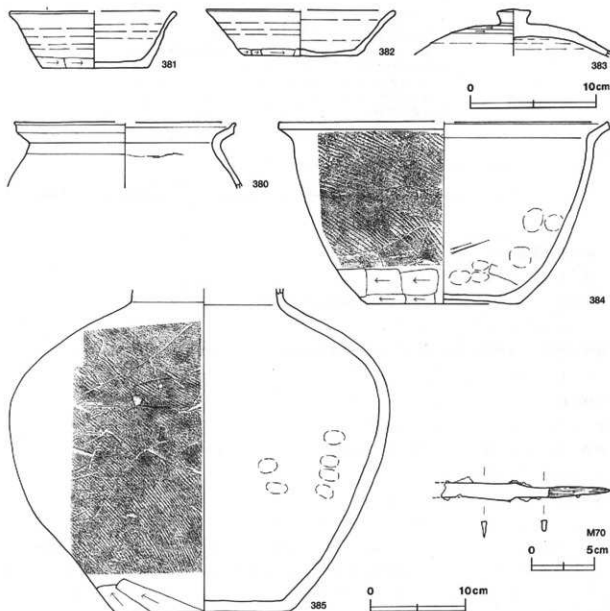
遺物 土師器片177点(坏・高台付坏12, 手捏土器1, 甕・瓶164), 須恵器片100点(坏・高台付坏62, 蓋2, 甕・瓶36), 鉄器1点(刀子)が出土している。これらの遺物は、東部と南東部の覆土下層から床面にかけて出土している。それらのほかに、混入した縄文土器片8点が出土している。第136図380の土師器甕は、北東部の覆土上層と覆土中層から出土した破片が接合したものである。381~385は須恵器である。381の坏は、南東



第135図 第66号住居跡実測図

部の覆土下層と東部の床面から出土した破片が接合したものである。382の坏は、覆土下層と南部の床面から出土した破片が接合したものである。383の蓋は、覆土下層と南東部の覆土下層から出土した破片が接合したものである。384の鉢は、南部の覆土中層から出土している。385の甕は、南部の覆土下層と床面、南東部の覆土中層と床面、東部の覆土上層と床面、中央部の床面から出土した破片が接合したものである。M70の刀子は、南東部の床面から出土している。

所見 本跡の時期は、床面や覆土下層の出土土器から8世紀後葉と考えられる。



第136図 第66号住居跡出土遺物実測図

第66号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第136図 380	甕 土師器	A [23.0] B (6.7)	体部上位から口縁部にかけての破片。体部は内嚢して立ち上がり、上位に最大径を持つ。頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は外反し、肩部は上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面に輪積み痕残る。体部外面ナデ。	小羅・雲母・砂 粒・白色粒子 橙色 普通	20% 二次焼成

遺物番号	器種	計測値(cm)		器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
		A	B				
第130四 381	坏 須恵器	A	[12.9]	口縁部の一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面及び底部内面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部多方向の手持ちヘラ削り。	雲母・砂粒・白色粒子	60% P.L.66
		B	4.5				
		C	8.2				
382	坏 須恵器	A	[14.8]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面及び底部内面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部2方向の手持ちヘラ削り。	雲母・砂粒・白色粒子	30% 不良
		B	3.6				
		C	8.8				
383	蓋 須恵器	B	(3.8)	口縁部欠損。笠形の天井部に鑿宍球状のつまみが付く。	外周部内・外面ロクロナデ。天井部回転ヘラ削り後、つまみ廻り付け。	小礫・白色粒子	70% 普通
		C	2.2				
		G	1.2				
384	鉢 須恵器	A	[34.4]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がり、肩部に至る。口縁部は外反し、端部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面ロクロナデ。体部外面削め方向の平行叩き、下位横方向のヘラ削り。体部内面に無文の当て具痕残る。	小礫・雲母・砂粒・白色粒子	40% P.L.66
		B	18.9				
		C	15.8				
385	甕 須恵器	B	(33.9)	底部から体部上位にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、上位に最大径を持つ。	体部外面中位斜め方向の平行叩き、下位横方向のヘラ削り。体部内面に無文の当て具痕残る。	小礫・砂粒・白色粒子	60% P.L.66
		C	18.0				

遺物番号	器種	計測値					材質	特徴	備考	
		全長(cm)	刃長(cm)	身幅(cm)	重ね(cm)	莖長(cm)				重量(g)
第130四M70	刀子	(113.4)	(5.9)	1.4	0.3	7.5	(183)	鉄	両あり。基部に木質残存	P.L.72

第71号住居跡(第137四)

位置 調査4区の南東部、L2d7区。

重複関係 第154・155号土坑に掘り込まれ、第14号独立柱建物跡を掘り込んでおり、第154・155号土坑よりも古く、第14号独立柱建物跡よりも新しい。

規模と平面形 東西軸は5.10mである。北部が調査区域外のため、南北軸は3.10mだけが確認された。平面形は方形または長方形と推定される。

主軸方向 N-5°-W

壁 はほぼ直立している。壁高は50~56cmである。

壁溝 南東コーナー部下から南壁下を経て、西壁下まで巡っている。上幅15~35cm、下幅5~15cm、深さ5cmで、断面形はJ字形である。

床 はほぼ平坦で、南部が踏み固められている。

ピット 3か所(P1~P3)。P1・P2はそれぞれ長径25cm・35cm、短径18cm・25cmの楕円形で、深さは40cm・50cmである。P1は南東コーナー寄りに、P2は南西コーナー寄りに配置されていることと形状から、いずれも主柱穴と考えられる。P3は径34cmの円形で、深さは28cmである。南壁寄りの中央に位置していることと形状から、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 5層からなる。レンズ状に堆積しており、自然堆積と考えられる。

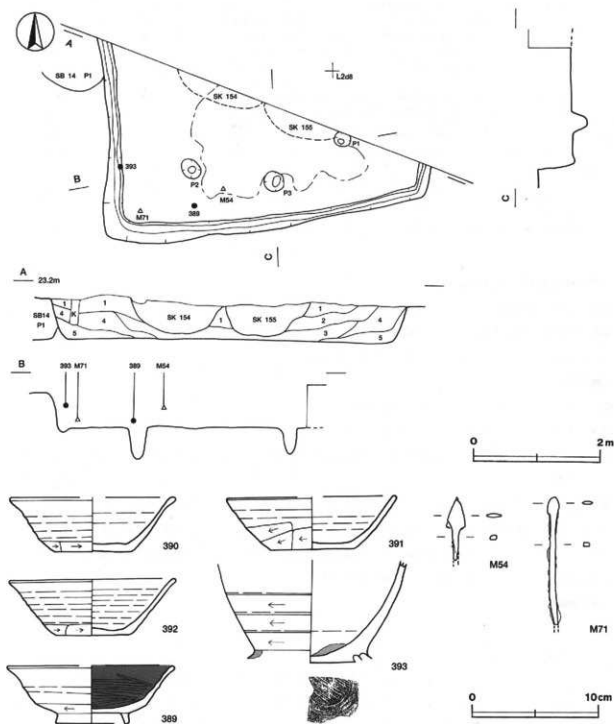
土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 棕褐色褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック・炭化粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子少量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック少量

遺物 土師器片212点(坏・高台付坏22, 甕・甔190), 須恵器片499点(坏・高台付坏242, 蓋46, 長頸瓶1, 甕・甔204, 不明6), 鉄器・鉄製品4点(釵2, 刀子1, 不明1)が出土している。これらの遺物は、覆土上層から下層にかけて全体的に出土している。出土土器に大きな時期差がないことから、本跡は、廃棄後短い期

間で埋没したと推定される。それらのほかに、混入した縄文土器片11点が出土している。第137図389の土師器高台付坏は、南部の覆土下層から出土している。390～392は須恵器坏である。390は覆土下層から、391は覆土上層から出土している。392は、覆土上層と覆土下層から出土した破片が接合したものである。393の須恵器長頸瓶は西壁際の覆土中層から出土している。M54の鉄は南部の覆土中層から、M71の鉄は南西部の覆土下層から出土している。

所見 本跡の時期は、覆土下層の出土土器から9世紀中葉から後葉と考えられる。



第137図 第71号住居跡・出土遺物実測図

第71号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器 種	計測値 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第137図 380	高台付 土 師 器	A [13.2]	口縁部一部欠損。平底にハの字状の高台が付く。体部は内障気味に立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部、体部内・外面及び底部内面口ロナデ。体部・底部内面へラ磨き。底部回転へラ削り後、高台削り付け。内面黒色処理。	砂粒・白色粒子・赤色粒子・雲母 灰色 褐色 普通	60%
		B 4.6				
		D 5.7				
		E 0.9				
390	坏 須 恵 器	A [12.8]	体部から口縁部にかけて 部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	体部内・外面及び底部内面口ロナデ。体部下端手持ちへラ削り。底部1方向の手持ちへラ削り。	小礫・白色粒子 灰色 普通	50%
		B 4.4				
		C 6.0				
391	坏 須 恵 器	A [13.4]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	体部内・外面及び底部内面口ロナデ。体部下端手持ちへラ削り。底部多方向の手持ちへラ削り。	雲母・砂粒・白色 粒子 褐色色、普通	40%
		B 4.2				
		C 6.6				
392	坏 須 恵 器	A 13.0	口縁部の一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面及び底部内面口ロナデ。体部下端手持ちへラ削り。底部回転へラ削り後を残す多方向の手持ちへラ削り。	小礫・雲母・砂粒 白色粒子 褐色色 普通	85% P L.66
		B 4.5				
		C 5.8				
393	長 頸 瓶 須 恵 器	B (8.1)	底部から体部下位にかけての破片。高台部欠損。平底。体部は内障気味に立ち上がる。	体部内・外面及び底部内面口ロナデ。体部下端下位削削へラ削り。底部静止糸切り。底部内面に自然釉。	小礫・気泡 灰白色 釉色は黄緑色、良好	5% 底部外面へラ 記号+

遺物番号	器 種	計 測 値						材 質	特 徴	備 考	
		全長 (cm)	胴身長 (cm)	胴身幅 (cm)	口縁部径 (cm)	底径 (cm)	厚さ (cm)				重量 (g)
第137図M54	瓶	(4.8)	2.2	(1.4)	(2.6)	0.5	0.4	(4.2)	鉄	長三角形式	P L.73
M71	瓶	(10.1)	L2	1.0	(8.9)	0.5	0.3	(11.5)	鉄	主頭蓋形式	P L.73

第74号住居跡 (第138図)

位置 調査5区の西部南寄り、L211区。

規模と平面形 西部が擾乱を受けて残存しておらず、南部は調査区域外のため、東西軸4.05m、南北軸2.17mだけが確認された。平面形は長方形または方形と推定される。

主軸方向 N-3°-E

壁 外傾して立ち上がっている。壁高は55~60cmである。

壁溝 東壁下と北壁下を巡っている。上幅25~30cm、下幅10~20cm、深さ10cmで、断面形はU字形である。

床 大半が擾乱を受け、南部が調査区域外のため、硬化面を確認することができなかった。残存する部分はほぼ平坦である。

竈 北壁の中央部に粘土と砂、ロームで構築されている。天井部は崩落し、袖部の一部が残存している。規模は、焚口部から煙道部まで120cm、袖部最大幅150cmである。煙道部は壁外へ25cm掘り込んでおり、煙道は外傾して立ち上がっている。火床部は床面から5cmほど掘りくぼめられており、火熱を受け赤変硬化している。火床部の中央からやや西寄りの位置に、支脚が正位で出土している。

遺土層解説

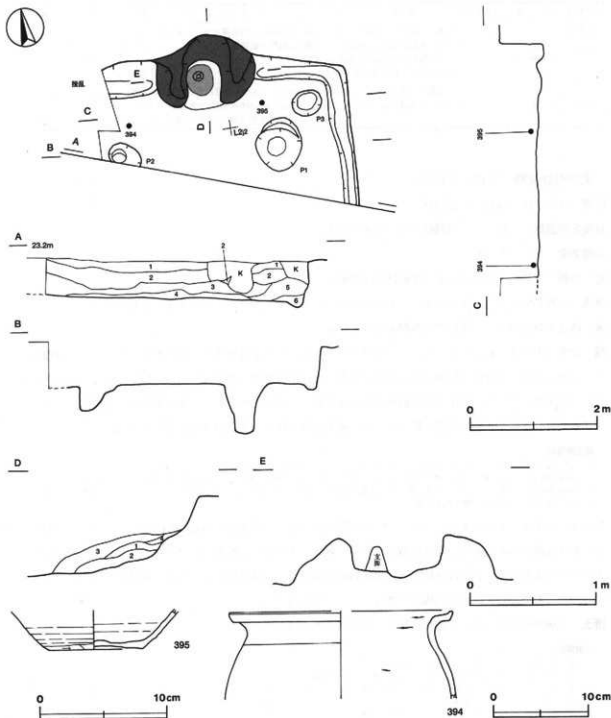
- 1 暗赤褐色 焼土粒子多量、ローム粒子少量
- 2 暗褐色 焼土粒子中量、ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量
- 4 暗赤褐色 粘土粒子少量、ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量

ピット 3か所 (P1~P3)。P1・P2はそれぞれ長径83cm・55cm、短径74cm・30cmの楕円形で、深さは78cm・50cmである。P1は北東コーナー寄りに、P2は北西コーナー寄りに配置されていることと形状から、いずれも主柱穴と考えられる。P3は長径48cm、短径40cmの楕円形で、深さは6cmである。性格は不明である。

覆土 6層からなる。レンズ状に堆積しており、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | |
|---|-----|-----------------------|
| 1 | 黒褐色 | 焼土粒子少量，ローム粒子微量 |
| 2 | 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 | 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量 |
| 4 | 暗褐色 | ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 5 | 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量 |
| 6 | 暗褐色 | ローム粒子中量，ローム小ブロック少量 |



第138図 第74号住居跡・出土遺物実測図

遺物 土師器片161点(坏2, 甕・甌159), 須恵器片100点(坏・高台付坏63, 甕5, 甌・甌32), 土製品1点(支脚), 鉄製品3点(不明)のほかに, 混入した縄文土器片22点が出土している。第138図394の土師器甕は西部の覆土下層から, 395の須恵器坏は北部の覆土下層から出土している。

所見 本跡の時期は, 覆土下層の出土土器から8世紀後半と考えられる。

第74号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第138図 394	甕 土師器	A (23.2)	体部上位から口縁部にかけての破片。体部は内厚し, 頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は外反し, 端部は上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内部に輪痕み痕残る。	小礫・雲母・砂粒 白色粒子・赤色粒子, にぶい赤褐色 普通	5%
		B (9.1)				
395	坏 須恵器	B (3.0) C 7.4	底部から体部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面及び底部内面口ロナデ。体部下端すすみヘリ削り, 底部面縁ヘリ削り痕を残す2方向のすすみヘリ部。	小礫・白色粒子 灰色 普通	10%

第75号住居跡(第139・140図)

位置 調査5区の西部, L2j3区。

規模と平面形 長軸3.93m, 短軸3.83mの方形である。

主軸方向 N-7°-W

壁 外傾して立ち上がっている。壁高は75cmである。

壁溝 全周している。上幅10~30cm, 下幅5~10cm, 深さ5~10cmで, 断面形はU字形である。

床 はほぼ平坦である。中央部が踏み固められている。

竈 北壁の中央部に粘土と砂, ロームで構築されている。天井部は崩落し, 袖部が残存している。規模は焚口部から煙道部まで124cm, 袖部最大幅135cmである。煙道部は壁外へ40cm掘り込んでおり, 煙道は緩やかに外傾して立ち上がっている。火床部は床面から5cmほど掘りくぼめられており, 火熱を受け赤変硬化している。火床部の中央に支脚が正位の状態に残っている。竈土層断面図中, 第4層は火床部の覆土である。

竈土層解説

- 1 黒褐色 焼土小ブロック中量, ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・粘土粒子少量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子・粘土粒子中量, ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子少量
- 3 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物中量, ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・炭化粒子少量
- 4 灰褐色 灰多量, 焼土粒子少量

ピット 5か所(P1~P5)。P1~P3は長径25~33cm, 短径20~28cmの楕円形で, 深さは44~54cmである。P4は径30cmの円形で, 深さは57cmである。各コーナー寄りに配置されていることと形状から, いずれも支柱穴と考えられる。P5は長径73cm, 短径45cmの楕円形で, 深さは46cmである。南壁寄りの中央に位置していることと形状から, 出入り口施設に伴うピットと考えられる。

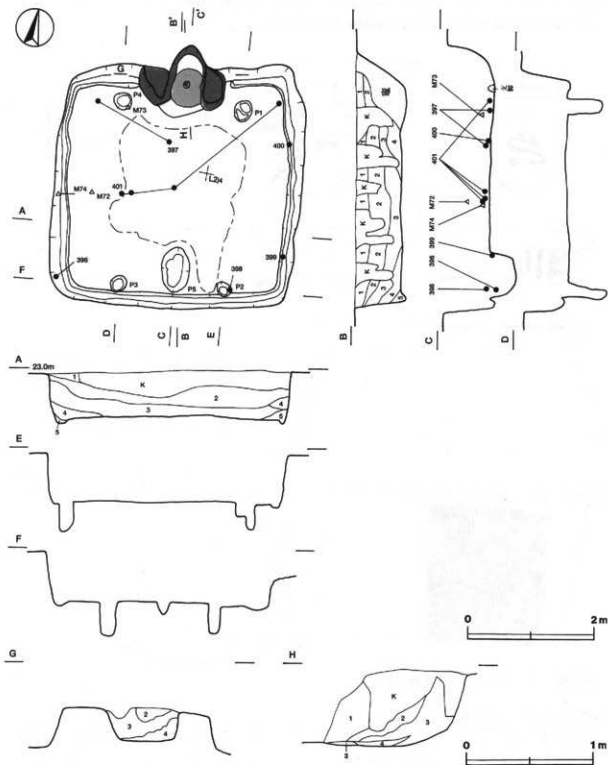
覆土 5層からなる。レンズ状に堆積しており, 自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量, 焼土小ブロック・焼土粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量
- 5 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量

遺物 土師器片740点(坏・高台付坏21, 甕・甌719), 須恵器片409点(坏・高台付坏146, 高甕2, 甕32, 鉢1, 甕・甌228), 土製品3点(支脚1, 不明2), 鉄器・鉄製品4点(刀子2, 鎌1, 不明1)が出上している。

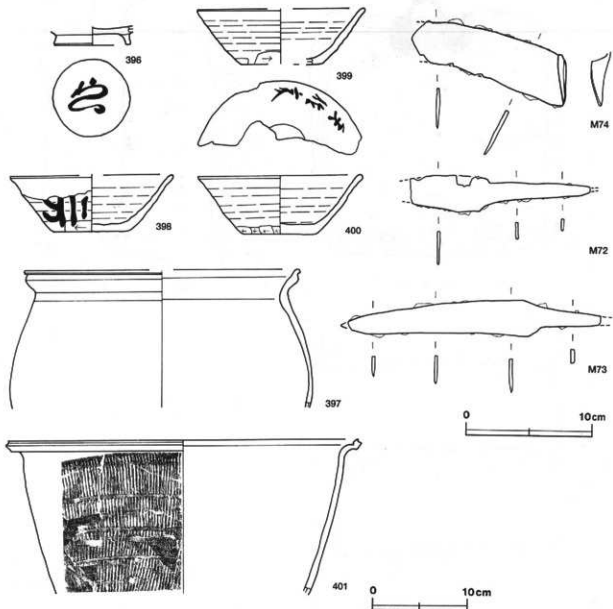
る。これらの遺物は、覆土上層と覆土下層から床面を中心に全体的に出土している。覆土上層からの出土土器はほとんどが細片である。それらのほかに、混入した縄文土器片57点、攪乱により混入した陶器片8点、磁器片2点が出土している。第140図396の土師器高台付坏は、南西部壁際の床面から出土している。397の土師器甕は、北西部の床面と北部の床面から出土した破片が接合したものである。398～400は須恵器坏である。398は南東部の覆土下層から横位で、400は東壁際の覆土下層から横位でそれぞれ出土している。399は、南東部の



第139図 第75号住居跡実測図

床面と甕の覆土中から出土した破片が接合したものである。401の須恵器鉢は、北東部の床面と中央部の覆土下層から出土した破片が接合したものである。M72の刀子は西部の覆土中層、M73の刀子は北西部の覆土下層、M74の鎌は西部の覆土下層からそれぞれ出土している。396の底部外面に「定」の、398の体部外面に「二万」の、399の体部外面に「矢作家」の墨書が施されている。出土状況から、396・397・399・401は本跡に伴う土器と考えられる。

所見 本跡からは、「矢作家」の墨書土器が出土しているが、工房的な遺構かどうかは不明である。時期は、甕内の覆土中や床面の出土土器から、9世紀中葉と考えられる。



第140図 第75号住居跡出土遺物実測図

第75号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第140図 396	高台付環	B (1.5)	高台部から底部にかけての破片。 平底にハの字状の高台が付く。	底部内面口クロナゲ後、ヘラ磨き。 底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け。内面黒色処理。	雲母・砂粒・白色 粒子	30% PL67 底部外面に「定」の墨書
	土 脚 器	D 6.2				
		E 0.9				

遺物番号	器 種	計測値 (cm)	器 形 の 特 徴	子 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第140図 397	甕 土 師 器	A [21.8]	口縁部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は外反し、肩部は外上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。摩耗が微しく、体部の調整は不明。	小糠・雲母・砂粒 白色粒子 靑灰色 不良	5% 二次焼成
		B (10.9)				
398	環 須 恵 器	A [12.8]	口縁部の一部欠損。平底。体部は外彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面及び底部内面口クロナデ。体部下端手持ちへラ削り。底部回転へラ切り痕を残す多方向の手持ちへラ削り。	小糠・雲母・砂粒 白色粒子 靑灰色 普通	80% P.L.67 底部外面に「二万」の墨書
		B 4.4				
		C 6.1				
399	須 恵 器	A [13.2]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は外彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部及び体部内・外面口クロナデ。体部下端手持ちへラ削り。底部残存少なく調整は不明。	小糠・雲母・砂粒 白色粒子 靑灰色、普通	30% P.L.67 体部外面に矢作家の墨書
		B 4.4				
		C [6.4]				
400	環 須 恵 器	A 12.9	口縁部の一部欠損。平底。体部は外彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面及び底部内面口クロナデ。体部下端手持ちへラ削り。底部回転へラ切り痕を残す多方向の手持ちへラ削り。	小糠・雲母・砂粒 白色粒子 黒褐色 普通	93% P.L.67
		B 4.7				
		C 5.6				
401	鉢 須 恵 器	A 36.4	体部から口縁部にかけての破片。体部は外彎して立ち上がり、腹部に凸る。口縁部は外反し、肩部は内側に折り返されて外向に1条の沈帯が通る。	口縁部内・外面口クロナデ。体部外面縦方向の平行叩き。	雲母・砂粒・白色粒子 オリーブ黒 普通	40%
		B (16.2)				

遺物番号	器 種	計 測 値					材 質	特 徴	備 考
		全長 (cm)	刀身長 (cm)	身幅 (cm)	重ね (cm)	刃長 (cm)			
新140図M72	刀 子	(11.4)	(6.3)	2.9	0.3	(8.1)	(28.5)	両側あり。切先・茎一部欠損	
M73	刀 子	(20.2)	(14.3)	2.9	0.3	(5.9)	(42.1)	鉄 両側あり。切先・茎一部欠損	P.L.72

遺物番号	器 種	計 測 値				材 質	特 徴	備 考
		全長 (cm)	背幅 (cm)	刃幅 (cm)	重量 (g)			
新140図M74	鎌	(12.2)	0.3	4.0	(64.4)	鉄	刃部先端欠損	

第76号住居跡 (第141図)

位置 調査5区の西部北寄り、L 2 g 5区。

規模と平面形 東西軸は5.72mである。北側が調査区域外のため、南北軸は2.08mだけが確認された。平面形は方形または長方形と推定される。

主軸方向 N - 7° - W

壁 ほぼ直立している。壁高は90cmである。

壁溝 東壁下から南壁下を経て西壁下まで巡っている。上幅20~40cm、下幅5~10cm、深さ5~10cmで、断面形はじ字形である。

床 ほぼ平坦である。P1~P3の間が踏み固められている。

ピット 3か所 (P1~P3)。P1・P2はそれぞれ径35cm・43cmの円形で、深さは40cm・35cmである。P1が南東コーナー寄り、P2が南西コーナー寄りに配置されていることと形状から、いずれも主柱穴と考えられる。P3は長さ45cm、短径35cmの楕円形で、深さは32cmである。南壁寄りの中央に位置していることと形状から、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

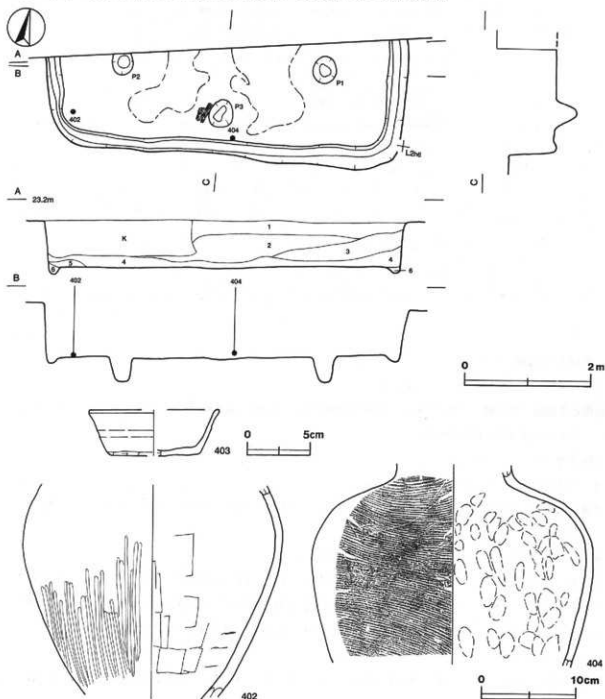
覆土 6層からなる。レンズ状に堆積しており、自然堆積と考えられる。土層断面図中、第3層は第5層よりも色調が暗い。

土層解説

- | | | |
|---|-----|--------------------------------|
| 1 | 暗褐色 | ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 2 | 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量 |
| 3 | 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 4 | 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量 |
| 5 | 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 6 | 褐色 | ローム粒子中量 |

遺物 土師器片179点(甕・甕), 須恵器片73点(坏・高台付坏44, 甕9, 甕・甕20), 鉄製品2点(釘)のほか、混入した縄文土器片8点, 攪乱により混入した陶器片2点が出土している。第141図402の土師器甕は南西部壁際の床面から, 403の須恵器坏は覆土中層から, 404の須恵器甕は南部壁際の覆土下層から出土している。出土状況から, 402・404は本跡に伴う土器と考えられる。

所見 本跡の時期は, 床面や覆土下層の出土土器から8世紀中葉と考えられる。



第141図 第76号住居跡・出土遺物実測図

第76号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第141回 402	甕 上器	B (22.6)	体部の破片。体部は内湾して立ち上がり、上位に最大径を持つ。	体部外面縦方向のヘラ磨き。体部内面輪痕み痕を残す横方向のヘラナデ。	小礫・雲母・砂粒 白色粒了、にぶい 褐色、普通	30% 二次焼成
403	須恵器	A [10.5]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面及び底部内面口ロナテ。体部下邊手持ちヘラ磨り。底部多方向の手持ちヘラ磨り。	小礫・雲母・砂粒 白色粒了、にぶい 褐色、普通	30% 火障あり
		B 3.6				
		C [7.0]				
404	甕 須恵器	B (21.2)	体部の破片。体部は内湾して立ち上がり、上位に最大径を持つ。	体部外面縦方向の平行叩き。体部内面に無文の当て具残る。	雲母・砂粒・白色粒了 褐色、普通	30%

第78号住居跡 (第142回)

位置 調査5区の西部北寄り、L2g7区。

規模と平面形 東西軸は2.80mである。北部が調査区域外のため、南北軸は0.52mだけが確認された。平面形は方形または長方形と推定される。

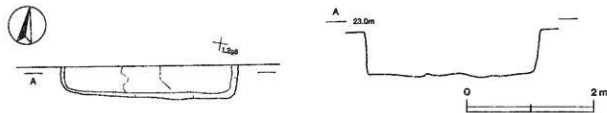
主軸方向 N-15°-W

壁 はほぼ直立している。壁高は68~70cmである。

床 西部はほぼ平坦で、東部はやや凹凸がある。中央部が踏み固められている。

遺物 土師器片6点(甕・甌)、須恵器片11点(坏・高台付坏4、甕1、甕・甌6)のほか、混入した縄文土器片1点が出土している。いずれも細片で、図示できるものはなかった。

所見 本跡の時期は、出土土器が細片のため明確な判断が困難であるが、出土土器がおおよそ8世紀から9世紀代と考えられるため、その時期と推定される。



第142図 第78号住居跡実測図

第79号住居跡 (第143回)

位置 調査5区の西部、L2f0区。

規模と平面形 東西軸は4.92mである。北部が調査区域外のため、南北軸は2.43mだけが確認された。平面形は、方形または長方形と推定される。

主軸方向 N-20°-W

壁 東壁と南壁はほぼ直立して、西壁は外傾して立ち上がっている。壁高は53~75cmである。

壁溝 東壁下から南壁下を経て西壁下まで通っている。上幅18~35cm、下幅8~14cm、深さ5~10cmで、断面形はU字形である。

床 はほぼ平坦である。P1~P3の間が踏み固められている。

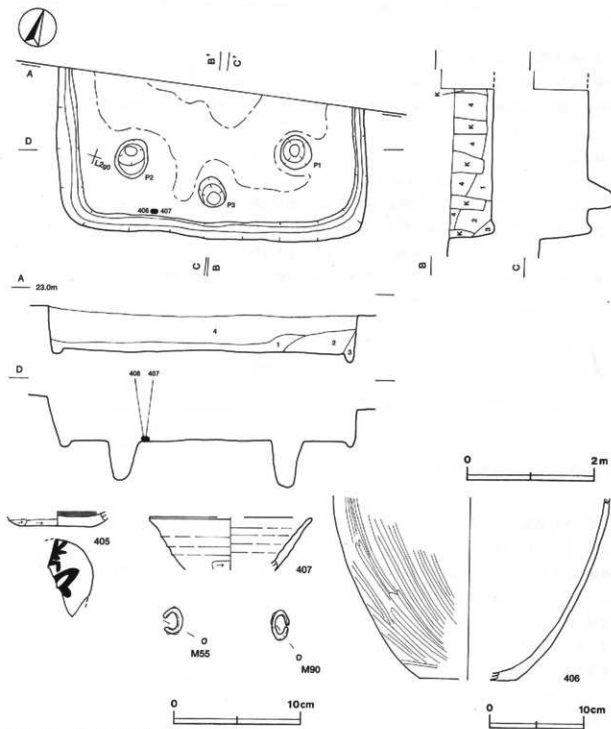
ピット 3か所 (P1~P3)。P1・P2はそれぞれ径50cm・57cmの円形で、深さは72cm・62cmである。P

1が南東コーナー寄り、P2が南西コーナー寄りに配置されていることと形状から、いずれも支柱穴と考えられる。P3は長径48cm、短径42cmの楕円形で、深さは40cmである。南壁際の中央に位置していることと形状から、出入口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 4層からなる。レンズ状に堆積しており、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | |
|---|-----|-------------------------------------|
| 1 | 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 2 | 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 3 | 暗褐色 | ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 4 | 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 |



第143図 第79号住居跡・出土遺物実測図

遺物 土師器片94点(坏3、甕・瓶91)、須恵器片99点(坏・高台付坏7、長頸瓶1、甕・瓶91)、石器1点(砥石)、鉄製品2点(鎖)のほかに、攪乱により混入した陶器片1点が出土している。第143図405の土師器坏は、覆土上層から出土している。406の土師器甕は、覆土上層と南壁際の床面から出土した破片が接合したものである。407の須恵器坏は、南壁際の床面から出土している。M55・90の鎖は、覆土中層から出土している。両者は同一個体の可能性が考えられる。405の底部外面には墨書が施されている。出土状況から、407は本跡に伴う土器と考えられる。

所見 本跡の時期は、床面の出土土器から9世紀前半と考えられる。

第79号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第143図 405	外 土師器	B (12) C (6.0)	底部の破片。平底。	底部外向口ロナデを残すヘラ磨き。体部下縁・底部外面手持ヘラ削り。内面黒色処理。	露骨・砂粒・白色 粒子	5% 底部外面に軟泥不能の墨書
406	甕 土師器	B (19.0) C (10.0)	底部から体部にかけての破片。平底。体部は内傾して立ち上がる。	体部外面縦方向のヘラ磨き。体部内面ヘラナデ。	小粒・雲母・砂粒 にふい橙色	30% 二次焼成
407	坏 須恵器	A (12.8) B (4.2)	体部から口縁部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部及び体部内・外面ロナナデ。体部下端手持ヘラ削り。	砂粒・白色粒子 灰色 普通	10%

遺物番号	器種	計測値			材質	特徴	備考
		鎖径(cm)	断面径(cm)	重量(g)			
第139図M55	鎖	2.1×1.5	0.4	1.7	鉄	M90と同連#	
M90	鎖	2.4×1.3	0.4	2.6	鉄	M55と同連#	

第80号住居跡(第144・145図)

位置 調査5区の中央部北寄り、L3f2区。

重複関係 第4号方形竪穴状遺構に掘り込まれており、本跡の方が古い。

規模と平面形 北東部が調査区域外である。長軸3.50m、短軸3.40mの方形と考えられる。

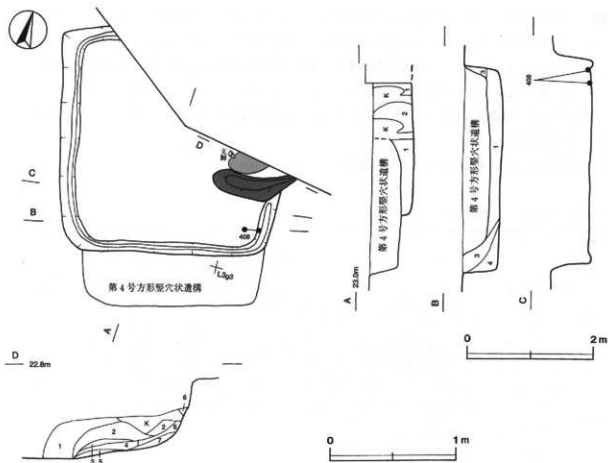
主軸方向 N-74°-E

壁 外傾して立ち上がっている。壁高は60cmである。

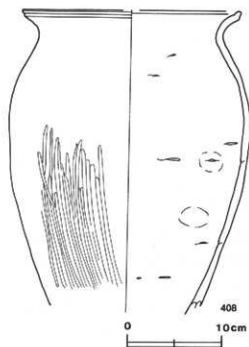
壁溝 東壁下から南壁下を経て北西コーナー部下まで通っている。上幅18~30cm、下幅5~7cm、深さ5cmで、断面形はじ字形である。

床 はほぼ平坦である。全体的にあまり踏み締められていない。

竈 東壁のやや南寄りに粘土と砂、ロームで構築されている。火床部の北部と北袖部は調査区域外である。天井部は崩落し、南袖部が残存している。規模は、火床部から煙道部まで110cm、袖部最大幅70cmである。煙道部は壁外へ15cm掘り込んでおり、煙道は外傾して立ち上がっている。火床部はほぼ平坦で、火熱を受け赤変硬化している。火床部の中央から支脚が北側に倒れた状態で出土している。竈土層断面図中、第5層は火床部の覆土である。



第144図 第80号住居跡実測図



第145図 第80号住居跡出土遺物実測図

覆土層解説

- | | |
|--------|--|
| 1 暗褐色 | ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子・砂粒微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量, 粘土粒子・砂粒少量, ローム小ブロック・焼土小ブロック・炭化粒子・焼土粒子微量 |
| 3 赤褐色 | 焼土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量 |
| 4 赤褐色 | 焼土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子少量, 粘土粒子・砂粒微量 |
| 5 赤褐色 | 焼土粒子中量, 焼土小ブロック・炭化粒子・灰少量 |
| 6 暗赤褐色 | ローム粒子・炭化粒子・砂粒少量 |
| 7 暗赤褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 |

覆土 4層からなる。レンズ状に堆積しており、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|-------|-----------------------|
| 1 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・粘土粒子少量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子少量 |

遺物 土師器片65点(坏・高台付坏5, 甕・瓶60), 須恵器片39点(坏・高台付坏18, 壺2, 甕・瓶19), 土製品2点(管状土鍾, 支脚), 鉄製品1点(不明)のほか、混入した縄文土器片10点が出土している。第145図408の土師器甕は、覆土下層と南東部の床面から出土した破片が接合したものである。D P 15の管状土鍾は覆土上層から出土したものである。

所見 本跡の時期は、床面の出土土器から、9世紀中葉から後葉と考えられる。

第80号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器 種	計測値 (cm)		器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
		A	B				
第145図 408	甕	A	22.8	唇部から口縁部にかけての破片。唇部は内彎して立ち上がり、上位に最大径を持つ。頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は外反し、唇部は外上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦方向のヘラ跡。体部内面輪郭痕。指痕圧痕を残すナデ。	小粒・雲母・砂粒・白色粒子 暗赤褐色 普通	40% P L 67 二次焼成
		B	31.7				
第145図 P15	管状土鍾	2.1	3.1	0.5	(18.1)	上層の一部欠損。外面ナデ	P L 70

第81号住居跡 (第146・147図)

位置 調査5区の西部, L 2 j 7区。

重複関係 第82・97号住居と第181号土坑に掘り込まれており、それらよりも古い。

規模と平面形 長軸5.58m, 短軸5.23mの方形である。

主軸方向 N-3°-E

壁 外傾して立ち上がっている。壁高は67~70cmである。

壁溝 第82号住居に掘り込まれている部分を除き、壁下を巡っている。上幅20~32cm, 下幅5~15cm, 深さ10cmで、断面形はJ字形である。

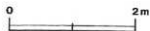
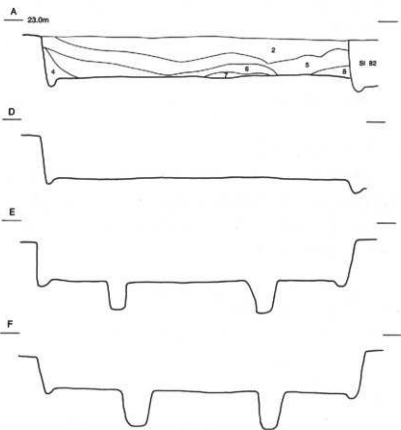
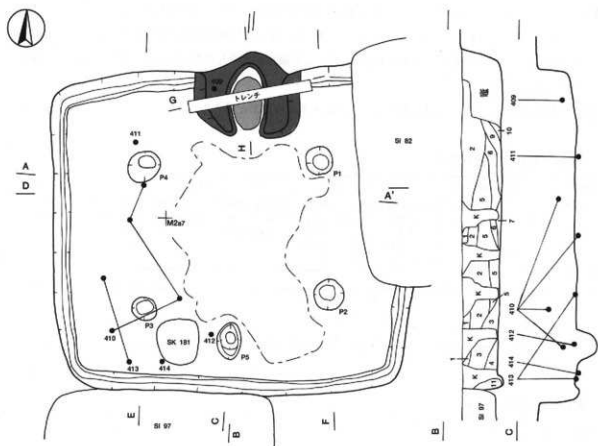
床 ほぼ平坦である。竈突口部からP 5にかけて踏み固められている。

竈 北壁の中央部に粘土を主体とした土で構築されている。天井部は崩落し、袖部が残存している。規模は、突口部から煙道部まで130cm, 袖部最大幅163cmである。煙道部は壁外へ20cm掘り込んでおり、標高は外傾して立ち上がっている。火床部は床面から5cmほど掘りくぼめられており、火熱を受け赤変硬化している。竈土層断面図中、第6・7層は袖部、第8~10層は火床部掘り方の埋土である。

竈土層解説

- 1 黒褐色 焼土小ブロック・粘土粒少量、砂粒微量
- 2 暗赤褐色 焼土粒中量、焼土中ブロック・焼土小ブロック少量、焼土大ブロック・砂粒微量
- 3 暗赤褐色 焼土粒中量、焼土中ブロック少量、焼土小ブロック・砂粒微量
- 4 赤褐色 焼土粒子多量、焼土小ブロック中量
- 5 褐灰色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土中ブロック・焼土小ブロック・粘土粒子・砂粒微量
- 6 近い褐色 粘土粒子多量、ローム粒子中量
- 7 暗褐色 粘土粒子多量
- 8 暗赤褐色 焼土粒子多量、ローム粒中量、粘土粒少量
- 9 暗褐色 ローム粒少量、焼土粒少量
- 10 暗褐色 ローム粒中量、焼土粒少量

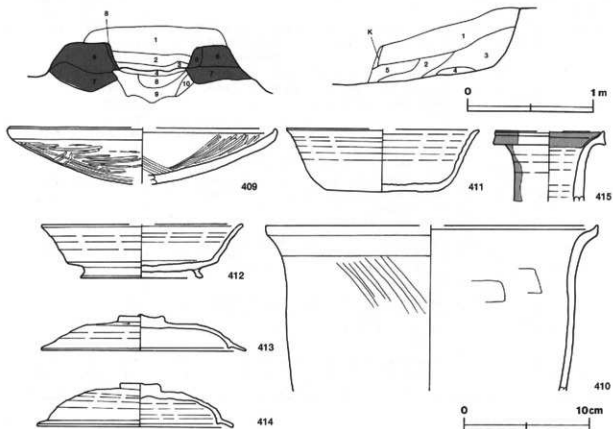
ピット 5か所 (P 1~P 5)。P 1~P 4 は径40~55cmの円形で、深さは45~63cmである。各コーナー寄りに配置されていることと形状から、いずれも主柱穴と考えられる。P 5 は長径58cm, 短径38cmの楕円形で、深さは34cmである。南壁寄りの中央に位置していることと形状から、出入り口施設に伴うピットと考えられる。



第146図 第81号住居跡実測図

G 22.0m

H



第147図 第81号住居跡・出土遺物実測図

覆土 11層からなる。レンズ状に堆積しており、自然堆積と考えられる。

土層解説

1	暗褐色	ローム粒子少量
2	暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量
3	暗褐色	ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
4	暗褐色	ローム粒子・炭化粒子少量
5	暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量
6	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量、粘土粒子微量
7	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
8	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子微量
9	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
10	にぶい赤褐色	焼土粒子中量、ローム粒子少量、粘土粒子微量
11	暗褐色	ローム粒子中量

遺物 土師器片641点（坏36、皿1、甕・瓶604）、須恵器片172点（坏・高台付坏60、蓋25、長頸瓶1、甕・瓶86）、鉄器・鉄製品3点（刀子2、不明1）、鉄滓1点が出土している。これらの遺物は南西部と北西部の覆土上層と覆土下層から床面を中心に出土している。覆土上層からの出土土器はほとんどが細片である。それらのほかに、混入した縄文土器片20点が出土している。第147図409の土師器皿は竈西袖部中から出土しており、袖部の袖補材として利用されたと考えられる。410の土師器瓶は、西部の床面と中央部の覆土上層、北西部の覆土中層、南西部の覆土中層から出土した破片が接合したものである。411~415は須恵器である。411の坏は北西部の床面から出土している。412の高台付坏は、覆土下層と南部の床面から出土した破片が接合したものである。413の甕は、西部と南西部の床面から出土した破片が接合したものである。414の蓋は、南西部の床面から出土している。415の長頸瓶は、覆土上層と第97号住居の覆土上層から出土した破片が接合したものである。出土状況から、411・414は本跡に伴う土器と考えられる。

所見 本跡の時期は、床面の出土土器から8世紀前葉と考えられる。

第81号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	寸法(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・完成	備考
第147図 409	甕 上師器	A [21.2]	体部から口縁部にかけての破片、 体部は大きく開き、口縁部は直立 する。	口縁部内・外面及び体部内面横ナ デ。体部内面に放射状の暗文。体 部外面輪積み痕残すヘラ磨き。	砂粒・白色粒子・ 赤色粒子 褐色。普通	40%
		B (4.4)				
410	甕 十師器	A [26.6]	体部から口縁部にかけての破片、 体部はほぼ直立し、頸部に歪み。 口縁部は外反し、端部はつまみ上 げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・ 外面横方向のヘラナデ。	小礫・雲母・砂 粒・白色粒子 にぶい橙色 普通	20%
		B (13.2)				
411	埴 須志器	A [15.4]	体部から口縁部にかけて一部欠 損。宇底。体部は外傾して立ち上 がり、口縁部はわずかに外反する。	体部内・外面及び底部内面クロク ロナデ。体部下端ヘラ削り後、ナデ。 底部回転ヘラ削り。	小礫・雲母・砂 粒・白色粒子 灰色。普通	70% P L 67
		B 5.0				
		C 7.4				
412	高台付埴 須志器	A [16.0]	体部から口縁部にかけて一部欠損。 丸底気味の底部にハの字状の高台 が付く。体部は外反して立ち上がり、 口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面及び底部内 面クロクロナデ。底部回転ヘラ削り 後、高台削り付け。	雲母・砂粒・白色 粒子 褐色 普通	60% P L 67
		B 4.3				
		D 9.8				
		E 0.8				
413	甕 須志器	A 16.3	口縁部から天井部にかけて一部欠 損。笠形の天井部にボタン状のつま みが付く。口縁部内側に短いか えりが付く。	口縁部及び外周部内・外周クロク ロナデ。天井部回転ヘラ削り後、つま み削り付け。	小礫・雲母・白色 粒子 褐色 普通	50% P L 67
		B 2.9				
		F 3.2				
		G 0.6				
414	甕 須志器	A 15.6	口縁部から天井部にかけて一部欠 損。笠形の天井部にボタン状のつま みが付く。口縁部内側に短いか えりが付く。	口縁部及び外周部内・外面クロク ロナデ。天井部回転ヘラ削り後、つま み削り付け。	白色粒子 灰褐色 普通	60% P L 67
		B 3.5				
		F 3.2				
		G 0.7				
415	長頸 須志器	A [8.6]	頸部から口縁部にかけての破片。 頸部は直立する。口縁部は外反し 、端部はつまみ上げられている。	口縁部及び頸部内・外面クロクロナ デ。口縁部及び頸部内・外面に自然 輪。	白色粒子・気泡 灰白色、釉色は黄 緑色。良好	10% P L 67
		B (3.6)				

第82号住居跡 (第148・149図)

位置 調査5区の西部、L 2j 8区。

重複関係 第81号住居跡を掘り込んでおり、本跡の方が新しい。

規模と平面形 長軸4.40m、短軸3.97mの長方形である。

主軸方向 N-7°-W

壁 外傾して立ち上がっている。壁高は73~77cmである。

壁溝 全周している。上幅18~32cm、下幅5~15cm、深さ8~10cmで、断面形はU字形である。

床 ほぼ平坦である。中央部が踏み固められている。

竈 北壁の中央部に粘土とロームで構築されている。天井部は崩落し、袖部の一部が残存している。規模は、
焚口部から煙道部まで130cm、袖部最大幅160cmである。煙道部は壁外へ80cm掘り込んでおり、煙道は外傾して
立ち上がっている。火床部は床面から5cmほど掘りくぼめられており、火熱を受け赤変硬化している。竈土層
断面図中、第5層は袖部、第10層は火床部の赤変硬化した層である。

竈土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土小ブロック中量、ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量
- 2 暗赤褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子少量
- 3 灰褐色 焼土粒子・粘土粒子中量、ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子・砂粒少量
- 4 黒褐色 炭化粒子中量、ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・粘土粒子・砂粒少量
- 5 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・粘土粒中量、焼土小ブロック・焼土粒子・砂粒少量
- 6 暗赤褐色 焼土粒子多量、焼土小ブロック中量、ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子少量
- 7 暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子少量
- 8 暗赤褐色 焼土粒子多量、焼土小ブロック中量、ローム粒子・焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子少量
- 9 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子中量、ローム粒子少量、粘土・砂粒微量
- 10 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量、焼土粒子・炭化粒子微量

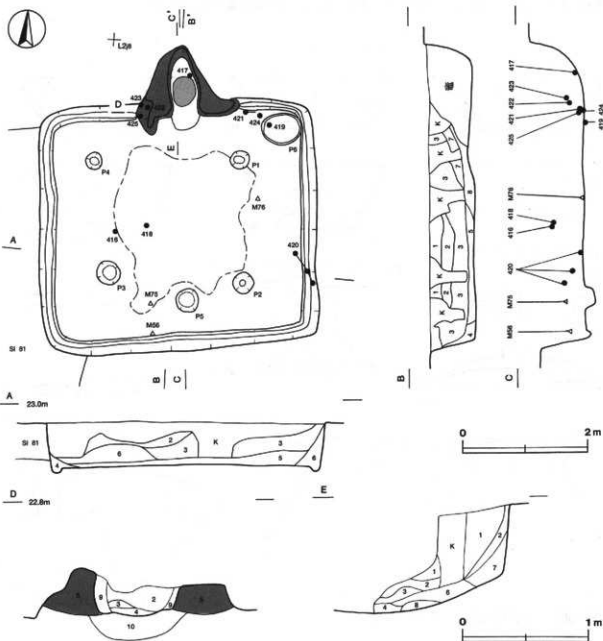
ピット 6か所 (P1~P6)。P1~P4は径25~38cmの円形で、深さは24~45cmである。各コーナー寄り

配置されていることと形状から、いずれも支柱穴と考えられる。P 5 は径35~38cmの円形で、深さは19cmである。南壁寄りの中央に位置していることと形状から、出入口施設に伴うピットと考えられる。P 6 は長径65cm、短径50cmの楕円形で、深さは17cmである。性格は不明である。

覆土 8層からなる。レンズ状に堆積しており、自然堆積と考えられる。土層断面図中、第1層は第3層よりも色調が暗い。

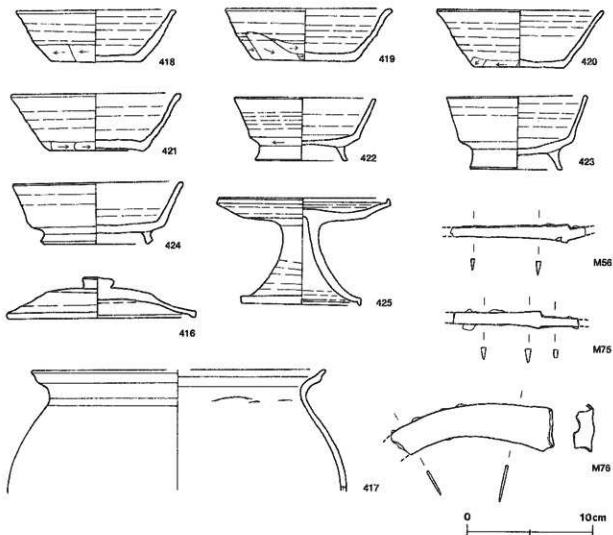
土層解説

- | | | |
|---|-----|--------------------------------------|
| 1 | 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 2 | 暗褐色 | ローム粒子少量、ローム小ブロック微量 |
| 3 | 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 4 | 暗褐色 | ローム粒子中量 |
| 5 | 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量 |
| 6 | 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 7 | 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・粘土粒子少量 |
| 8 | 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量、焼土小ブロック・炭化粒子・粘土粒子微量 |



第148図 第82号住居跡実測図

遺物 土師器片188点(坏9, 甕・瓶179), 須恵器片399点(坏・高台付坏160, 蓋55, 高盤3, 長頸瓶2, 甕・瓶179), 鉄器・鉄製品5点(刀子2, 鎌1, 不明2)が出土している。これらの遺物は, 覆土下層から床面を中心に全体的に出土している。それらのほかに, 混入した縄文土器片12点が出土している。第149図417の土師器甕は, 甕の覆土下層から出土している。418~421は須恵器坏である。418は中央部の覆土中層から, 419は北東部の床面から正位でそれぞれ出土している。420は, 東部の覆土中層, 覆土下層, 床面から出土した破片が接合したものである。421は, 甕の覆土中と北東部の覆土下層から出土した破片が接合したものである。422~424は須恵器高台付坏である。422は北部の覆土下層から横位で, 423は北部の覆土中層から斜位で, 424は北東部の床面から正位でそれぞれ出土している。416の須恵器蓋は, 西部の覆土中層から出土している。425の須恵器高盤は, 北部の覆土下層から出土している。M56・75の刀子は南部の覆土中層から, M76の鎌は東部の床面からそれぞれ出土している。出土状況から, 417・419・421・424・M76は本跡に伴う遺物と考えられる。所見 本跡の時期は, 甕の覆土中や床面の出土土器から, 8世紀後半と考えられる。



第149図 第82号住居跡出土遺物実測図

第82号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第149回 416	壺 須恵器	A 14.8	口縁部の一部欠損。釜形の仄肩部に擬定珠状のつまみが付く。口縁部は短く切り返している。	口縁部及び外周部内・外面ロクロナデ。天井部回転へう削り後、つまみ貼り付け。	小礫・雲母・白色 粒子 オリブ風 普通	65% P.L.67
		B 3.2				
		D 2.5				
		G 0.9				
417	壺 七師器	A [23.2] B (9.6)	体部上位から口縁部にかけての破片。体部は内壁して立ち上がり、頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は外反し、肩部は外上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面に輪積み状残る。	小礫・砂粒・白色 粒子 にぶい褐色 普通	5%
		A 12.7 B 4.2 C 7.3	口縁部の一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面及び底部内面ロクロナデ。体部下端平持ちへう削り。底部へう削り痕を残す1方向の手持ちへう削り。	小礫・雲母・砂粒・白色粒子 褐色色。普通	90% P.L.67
419	壺 須恵器	A 13.0 B 4.2 C 7.8	口縁部の一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面及び底部内面ロクロナデ。体部下端平持ちへう削り。底部多方向のへう削り。	小礫・雲母・砂粒・白色粒子 褐色色。普通	95% P.L.67
		A 13.4 B 4.5 C 7.2	口縁部の一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面及び底部内面ロクロナデ。体部下端平持ちへう削り。底部へう削り痕を残す1方向の手持ちへう削り。	砂粒・白色粒子 灰色 普通	80% P.L.67
		A 13.3 B 4.6 C 7.5	口縁部の一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面及び底部内面ロクロナデ。体部下端平持ちへう削り。底部回転へう削り。	小礫・雲母・白色 褐色色。普通	90% P.L.67
422	高台付壺 須恵器	A 11.1 B 7.0 D 5.2 E 1.1	口縁部の一部欠損。平底にハの字状の高台が付く。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部、体部内・外面及び底部内面ロクロナデ。体部下端平持ちへう削り後、高台貼り付け。	小礫・白色粒子 灰色 普通	95% P.L.68
		A 11.1 B 5.9 D 7.3 E 1.7	完形。平底にハの字状の高台が付く。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部、体部内・外面及び底部内面ロクロナデ。底部回転へう削り後、高台貼り付け。	雲母・砂粒・白色 粒子 褐色色 普通	100% P.L.68
		A 13.3 B 4.9 D 8.2 E 1.0	口縁部の一部欠損。平底にハの字状の高台が付く。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部、体部内・外面及び底部内面ロクロナデ。底部回転へう削り後、高台貼り付け。	小礫・雲母・砂粒・白色 褐色色 普通	95% P.L.68
		A 13.5 B 8.5 D 9.4 E 6.2	口縁部の一部欠損。裾部はラッパ状に広がり、肩部は屈曲して垂下する。体部は大きく開き、口縁部は直立する。	口縁部、体部内・外面及び底部内面ロクロナデ。底部回転へう削り後、高台貼り付け。	小礫・砂粒・白色 粒子 灰色 普通	95% P.L.67
		A 13.5 B 8.5 D 9.4 E 6.2	口縁部の一部欠損。裾部はラッパ状に広がり、肩部は屈曲して垂下する。体部は大きく開き、口縁部は直立する。	口縁部、体部内・外面及び底部内面ロクロナデ。底部回転へう削り後、高台貼り付け。	小礫・砂粒・白色 粒子 灰色 普通	95% P.L.67

遺物番号	器種	計測値					材質	特徴	備考	
		全長(cm)	刃長(cm)	身幅(cm)	重さ(g)	重量(g)				
第149回M36	刀	子 (10.8)	(9.4)	1.1	0.3	(1.4)	(12.6)	鉄	両端あり。切先・茎一部欠損	P.L.72
M75	刀	子 (10.0)	(7.0)	1.3	0.5	(3.0)	(13.8)	鉄	両端あり。切先・茎一部欠損	P.L.72

遺物番号	器種	計測値				材質	特徴	備考
		全長(cm)	背幅(cm)	刃幅(cm)	重さ(g)			
第149回M76	鏃	(12.8)	0.2	3.3	(37.2)	鉄	刃部先端欠損	P.L.74

第84号住居跡 (第150回)

位置 調査5区の西部、M2a9区。

規模と平面形 一辺3.50mの方形である。

主軸方向 N-13°-W

壁 外傾して立ち上がっている。壁高は45~55cmである。

壁溝 全周している。上幅15~30cm, 下幅3~7cm, 深さ5cmで, 断面形はU字形である。

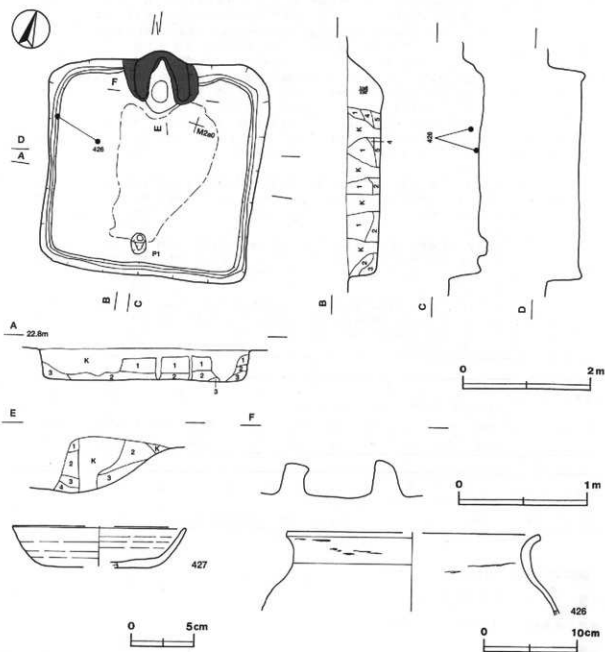
床 はほぼ平坦である。竈前部からP1にかけて踏み固められている。

竈 北壁の中央部に粘土, 砂とロームで構築されている。天井部は崩落し, 袖部の一部が残存している。規模は, 焚口部から煙道部まで95cm, 袖部最大幅115cmである。煙道部は壁外へ15cm掘り込んでおり, 緩やかに外傾して立ち上がっている。火床部は床面から4cmほど掘りくぼめられている。竈土層断面図中, 第3・4層は含有物や堆積状況から, 天井部の崩落土と推定される。

竈土層解説

- | | |
|--------|---|
| 1 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量 |
| 2 灰褐色 | 粘土粒子・砂粒中量, ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 3 暗赤褐色 | 焼土小ブロック・焼土粒子中量, ローム粒子・焼土中ブロック・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量 |
| 4 暗赤褐色 | 焼土粒子中量, ローム粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック・炭化粒子少量 |

ピット 1か所。P1は長径30cm, 短径20cmの楕円形で, 深さは17cmである。南壁際の中央に位置しているこ



第150図 第84号住居跡・出土遺物実測図

とと形状から、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 5層からなる。レンズ状に堆積しており、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
- 3 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、ローム中ブロック少量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量、砂粒微量

遺物 土師器片60点(坏10, 甕・瓶50), 須恵器片15点(坏・高台付坏11, 釜2, 甕・瓶2)のほか、混入した縄文土器片14点が出土している。第150図426の土師器甕は、西部の覆土下層と床面から出土した破片が接合したものである。427の須恵器坏は、覆土下層から出土している。

所見 本跡の時期は、床面や覆土下層の出土土器から8世紀前半と考えられる。

第84号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考	
第150図 426	甕 土師器	A [26.2]	体部上位から口縁部にかけての破片。体部は内埋して立ち上がり、頸部はコの字状に屈曲する。口縁部は外反し、頸部はわずかにつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。頸部外面と体部内面に輪積み痕跡。	小礫・砂粒・白色 粒に薄い褐色 普通	5%	
		B (8.2)					
427	坏 須恵器	A [13.8]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部、体部内・外面及び底部内面ロクロナデ。底部手持ちへう削り。	小礫・炭母・砂 粒・白色粒子 黄灰色。普通	20%	
		B 3.2					
		C [8.2]					

第85号住居跡 (第151図)

位置 調査5区の西部, M2c0区。

重複関係 第86号住居に掘り込まれており、本跡の方が古い。

規模と平面形 長軸3.83m, 短軸3.69mの方形である。

主軸方向 N-3°-W

壁 外傾して立ち上がっている。壁高は25~35cmである。

壁溝 第86号住居に掘り込まれた北東部を除き、壁下を巡っている。上幅10~20cm, 下幅3~12cm, 深さ5cmで、断面形はU字形である。

床 ほぼ平坦である。中央部が踏み固められている。

竈 第86号住居に掘り込まれ残存していない。床面に残る焼土から、北壁の中央部に構築されていたと推定される。

ピット 5か所(P1~P5)。P1~P4は長径23~30cm, 短径20~23cmの楕円形で、深さは30~42cmである。各コーナー寄りに配置されていることと形状から、いずれも支柱穴と考えられる。P5は長径25~38cm, 短径18cmの楕円形で、深さは19cmである。南壁寄りの中央に位置していることと形状から、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

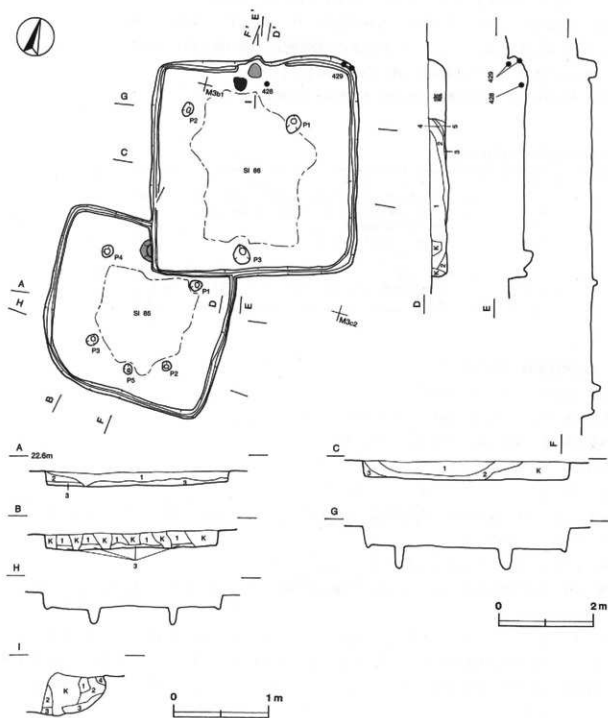
覆土 3層からなる。レンズ状に堆積しており、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量

遺物 土師器片26点(坏6, 甕・瓶20), 須恵器片11点(坏・高台付坏2, 蓋2, 甕・瓶7)のほかに, 混入した縄文土器片5点が出土している。いずれも細片で, 図示できるものはなかった。

所見 本跡の時期は, 出土土器が細片であるが, 重複関係から第86号住居よりも古いことと古墳時代の土器が認められないことから, 8世紀前葉でも第86号住居より古い時期と推定される。



第151図 第85・86号住居跡実測図

第86号住居跡 (第151・152図)

位置 調査5区の西部, M3b1区。

重複関係 第85号住居跡を掘り込んでおり, 本跡の方が新しい。

規模と平面形 長軸4.50m, 短軸4.30mの方形である。

主軸方向 N-12°-W

壁 外傾して立ち上がっている。壁高は34~42cmである。

壁溝 全周している。上幅8~22cm, 下幅3~13cm, 深さ5~8cmで, 断面形はU字形である。

床 ほほ平坦である。竈前面からP3にかけて踏み固められている。

竈 北壁の中央部に粘土と砂, ロームで構築されている。天井部は崩落し, 西袖部の一部が残存している。袖部の大半が残っていないため, 規模は不明である。煙道部は壁外に15cm掘り込んでおり, 煙道は緩やかに外傾して立ち上がっている。火床部は床面から6cmほど掘りくぼめられている。

竈土層解説

- 1 灰 褐色 粘土粒子・砂粒中量, ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 暗赤褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量
- 3 暗赤褐色 ローム粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック少量

ピット 3か所 (P1~P3)。P1・P2はそれぞれ長径40cm・30cm, 短径30cm・23cmの楕円形で, 深さは40cm・50cmである。北東コーナー寄りと北西コーナー寄りに配置されていることと形状から, いずれも主柱穴と考えられる。床面を精査したが, 主柱穴はほかには確認できなかった。P3は長径43cm, 短径32cmの楕円形で, 深さは20cmである。南壁寄りの中央に位置していることと形状から, 出入り口施設に伴うピットと考えられる。

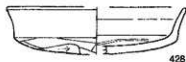
覆土 5層からなる。レンズ状に堆積しており, 自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量, ローム大ブロック微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック微量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック微量
- 5 暗褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック・粘土粒子・砂粒微量

遺物 土師器片90点 (坏20, 甕・甔70), 須恵器片34点 (坏・高台付坏17, 甕2, 瓶1, 甕・甔14), 鉄器・鉄製品2点 (刀子, 不明)のほかに, 混入した縄文土器片13点が出土している。第152図428の上師器坏は, 北部の覆土下層から出土している。429の須恵器坏は, 北東部の覆土上層と床面から出土した破片が接合したものである。

所見 本跡は, 覆土下層や床面の出土土器から, 第85号住居跡より新しい時期の8世紀前半と考えられる。



428



429



第152図 第86号住居跡
出土遺物実測図

第86号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考	
第152図 428	坏 上師器	A	114.3	底部から口縁部にかけての破片。 体部は内壁して立ち上がり, 口縁部は外反する。	口縁部内・外面積ナデ, 体部・底部外面へラ削り。底部内面へラ磨き。	砂粒・白色粒子・ 赤色粒子	40%
		B	3.7			土に白い褐色, 普通	
429	坏 須恵器	A	13.2	底部から口縁部にかけて一部欠損。底部は丸座気味。体部は外反して立ち上がり, 口縁部に至る。	口縁部, 体部内・外面及び底部内面ロクロナデ。底部外面手持ちラ削り。	白色粒子 灰褐色	60%
		B	3.5				
		C	7.6				

第87号住居跡 (第153・154図)

位置 調査5区の中央部, M3a3区。

規模と平面形 長軸3.05m, 短軸2.75mの方形である。

主軸方向 N-5°-W

壁 ほぼ直立している。壁高は45cmである。

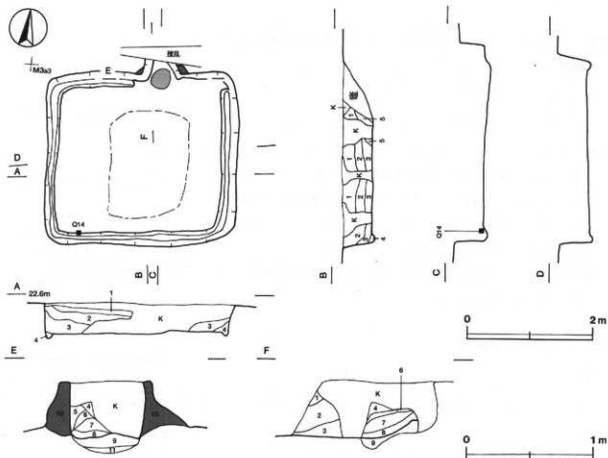
壁溝 東壁下から南壁下, 西壁下を経て, 北壁西部の下に至っている。上幅15~30cm, 下幅3~12cm, 深さ5~8cmで, 断面形はU字形である。

床 ほぼ平坦である。中央部が踏み固められている。

竈 北壁の中央部に粘土とロームで構築されている。天井部は崩落し, 袖部の一部が壁際に残存している。焚口部の一部が攪乱を受けている。規模は, 火床部から残存している煙道部まで45cm, 袖部最大幅110cmである。煙道部は壁外へ20cm掘り込んでいる。攪乱を受け, 立ち上がりの形状は不明である。火床部は床面から6cmほど掘りくぼめられており, 火熱を受けて赤変硬化している。竈土層断面図中, 第10層は袖部, 第9・11層は火床部掘り方の埋土である。

竈土層解説

- | | | | |
|-------|----------------------------|---------|---|
| 1 褐 色 | ローム粒子多量 | 8 暗赤褐色 | 子・砂粒少量 |
| 2 灰褐色 | 粘土粒子・砂粒中量, ローム粒子少量 | 9 暗赤褐色 | 焼土粒子・炭化粒子中量, ローム粒子少量 |
| 3 褐色 | ローム粒子中量 | 10 赤褐色 | 焼土粒子多量, 焼土小ブロック中量, ローム粒子・炭化粒子少量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子少量 | 11 暗赤褐色 | 粘土粒子多量, 焼土小ブロック・焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子・砂粒少量 |
| 5 灰褐色 | 粘土粒子中量, 砂粒少量, ローム粒子・焼土粒子微量 | | |
| 6 灰褐色 | 粘土粒子多量, 砂粒少量, ローム粒子・焼土粒子微量 | | |
| 7 赤褐色 | 焼土粒子多量, ローム粒子・炭化粒子・粘土粒 | | |



第153図 第87号住居跡実測図

覆土 5層からなる。レンズ状に堆積しており、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 緑褐色 rome中ブロック・rome小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 rome粒子中量、rome中ブロック・rome小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 暗褐色 rome小ブロック・rome粒子中量、炭化粒子少量、rome中ブロック微量
- 4 暗褐色 rome粒子多量、rome小ブロック中量、rome中ブロック少量
- 5 暗褐色 rome粒子・粘土粒子中量、rome中ブロック・rome小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量

遺物 土師器片27点(坏4, 壺・瓶23), 須恵器片15点(坏・高台付坏6, 壺3, 壺・瓶6), 石器1点(砥石)のほか, 混入した縄文土器片16点が出土している。第154図430の須恵器蓋は覆土上層から, 431の須恵器蓋は覆土中から出土している。Q14の砥石は, 南西部壁際の覆土下層から出土している。

所見 本跡に伴う土器がなく出土数も少ないため, 明確な時期判断が困難であるが, 時期は覆土中からの出土土器の時期と大きな差はないものと考えられ, 8世紀前葉と推定される。



第154図 第87号住居跡出土遺物実測図

第87号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第154図 430	蓋	A [16.6]	口縁部から外周部にかけての破片。口縁部の内側に短いかえりが付く。	口縁部・外周部内・外面ロクロナデ。	白色粒子 灰色 普通	5%
	須恵器	B (1.6)				
431	蓋	F 4.2	つまみ片。ボタン状。	つまみ外面ロクロナデ。	雲母・砂粒 灰褐色、普通	5%
	須恵器	G 0.7				

遺物番号	器種	計測値				石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第154図Q14	砥石	(7.0)	4.0	5.5	(153.8)	凝灰岩	紙面4面	P.L71

第88号住居跡(第155図)

位置 調査5区の中央部, L314区。

規模と平面形 長軸3.65m, 短軸3.62mの方形である。

主軸方向 N-2°-W

壁 外傾して立ち上がっている。壁高は32~50cmである。

床 はほぼ平坦である。竈全面からP1付近にかけて踏み固められている。

竈 北壁の中央部に粘土とロームで構築されている。天井部は崩落し, 袖部が残存している。規模は, 焚口部から煙道部まで95cm, 袖部最大幅125cmである。煙道部は壁外へ30cm掘り込んでおり, 煙道は緩やかに外傾して立ち上がっている。火床部はほぼ平坦で, 火熱を受けて赤変硬化している。竈土層断面図中, 第6層は火床部の覆土と考えられる。

壤土層解説

1	明褐色	粘土粒子中量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
2	暗褐色	粘土粒子多量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
3	黒褐色	焼土粒子・粘土粒子少量
4	灰褐色	焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土小ブロック・粘土粒子多量
5	赤褐色	焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子多量、粘土粒子少量
6	暗赤褐色	焼土小ブロック・焼土粒子・灰多量、炭化物少量
7	暗褐色	ローム粒子・粘土粒子少量、焼土粒子微量
8	極暗褐色	ローム小ブロック・焼土小ブロック・粘土粒子少量

ピット 1か所。P1は長径43cm、短径32cmの楕円形で、深さは20cmである。南壁寄りの中央に位置していることと形状から、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

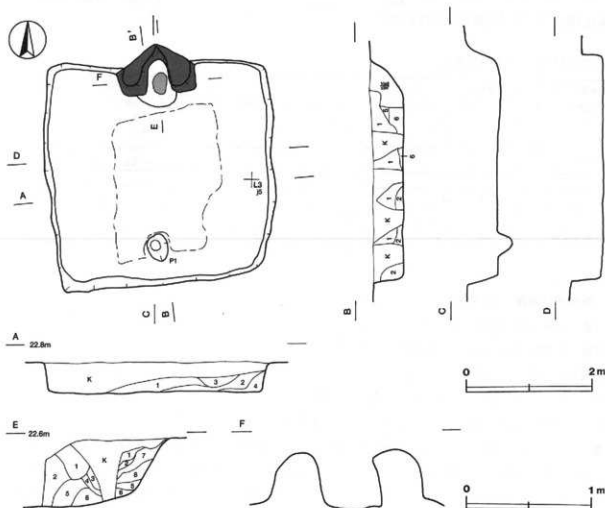
覆土 6層からなる。レンズ状に堆積しており、自然堆積と考えられる。

土層解説

1	極暗褐色	ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
2	暗褐色	ローム粒子中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
3	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量
4	暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック少量
5	赤褐色	ローム粒子・粘土粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
6	暗赤褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量

遺物 土師器片75点(坏6, 甕・瓶69), 須恵器片18点(坏・高台付坏片5, 甕・瓶13), 鉄器1点(刀子)のほか、混入した縄文土器片8点が出土している。いずれも細片で、図示できるものはなかった。

所見 出土土器が細片のため、明確な時期判断ができないが、出土土器がおおよそ8世紀から9世紀代と考えられるため、その時期の住居跡と推定される。



第155図 第88号住居跡実測図

第89号住居跡（第156図）

位置 調査5区の中央部，M3a6区。

重複関係 第92号住居に掘り込まれており，本跡の方が古い。

規模と平面形 東西軸は3.07mである。北部が第92号住居に掘り込まれて残存せず，南北軸は1.90mだけが確認された。平面形は方形または長方形と推定される。

主軸方向 N-18°-W

壁 外傾して立ち上がっている。壁高は27~32cmである。

壁溝 残存する壁下のすべてを巡っている。上幅12~25cm，下幅3~7cm，深さ5~8cmで，断面形はU字形である。

床 はほぼ平坦である。P1の北側が踏み固められている。

ピット 2か所（P1・P2）。P1は長径25cm，短径20cmの楕円形で，深さは20cmである。南壁寄りの中央に位置していることと形状から，出入り口施設に伴うピットと考えられる。P2は径30cmの円形で，深さは36cmである。性格は不明である。

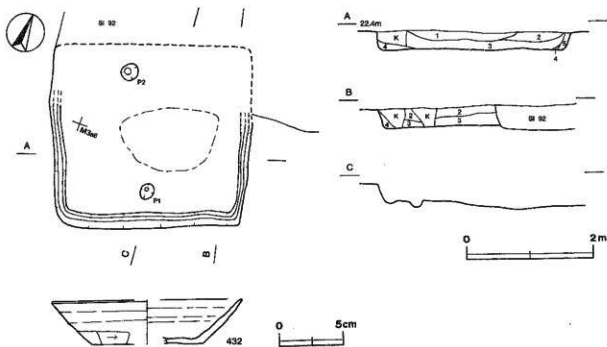
覆土 5層からなる。レンズ状に堆積しており，自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | |
|---|-----|------------------------------------|
| 1 | 暗褐色 | ローム粒子多量，ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土粒子少量 |
| 2 | 暗褐色 | ローム粒子多量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量 |
| 3 | 暗褐色 | ローム粒子多量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量，炭化粒子微量 |
| 4 | 褐色 | ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム中ブロック少量 |
| 5 | 褐色 | ローム粒子多量，ローム中ブロック・ローム小ブロック中量 |

遺物 土器器片33点（坏・高台付坏4，甕・瓶29），須恵器片25点（坏・高台付坏17，甕・瓶8）のほか，混入した縄文土器片2点が出土している。第156図432の須恵器坏は覆土上層から出土している。

所見 本跡に伴う土器がなく大半が細片のため，明確な時期判断が困難であるが，時期は覆土中の出土土器と大きな差はないものと考えられ，8世紀中葉と推定される。



第156図 第89号住居跡・出土遺物実測図

第89号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徵	手法の特徵	胎土・色調・焼成	備考
第156図 432	坏 須臬器	A [15.0] B [3.5] C [8.4]	底部から口縁部にかけての破片。 平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部、体部内・外面及び底部内 面ロクロナデ。体部ト染・底部手 持ちヘラ削り。	胎土・白色粒子 黄灰色 普通	10%

第90号住居跡 (第157・158図)

位置 調査5区の中央部, M3a5区。

規模と平面形 長軸は3.70m, 短軸は3.63mの方形である。

主軸方向 N-4°-W

壁 ほぼ直立している。壁高は60~65cmである。

壁溝 東壁下から、南壁下、西壁下を経て、北壁西部の下までを巡っている。上幅18~25cm, 下幅3~15cm, 深さ5~10cmで、断面形はU字形である。

床 ほぼ平坦である。中央部が踏み固められている。

竈 北壁の中央部に粘土と砂、ロームで構築されている。天井部は崩落し、袖部は壁際の一部が残存している。規模は、焚口部から煙道部まで135cm, 袖部最大幅150cmである。煙道部は壁外に85cm掘り込んでおり、煙道は緩やかに外傾して立ち上がっている。火床部は床面から5cmほど掘りくぼめられており、火熱を受けて赤変硬化している。竈土層断面図中、第9層は袖部である。

竈土層解説

- 1 灰黄褐色 粘土粒子・砂粒中量、ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子・焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム小ブロック・ローム粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子少量
- 4 黒褐色 ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 5 灰褐色 ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 6 灰褐色 ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量
- 7 黒褐色 ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量
- 8 灰褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量
- 9 灰黄褐色 ローム粒子・粘土粒子・砂粒中量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 10 暗赤褐色 ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量
- 11 暗赤褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量

ピット 1か所。P1は長径50cm, 短径34cmの楕円形で、深さは16cmである。南壁寄りの中央に位置していることと形状から、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

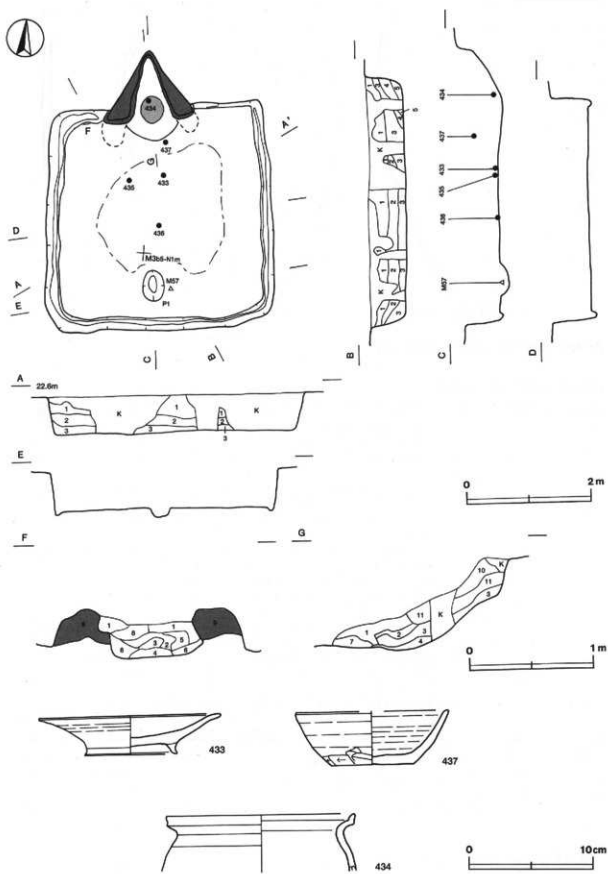
覆土 5層からなる。レンズ状に堆積しており、自然堆積と考えられる。

土層解説

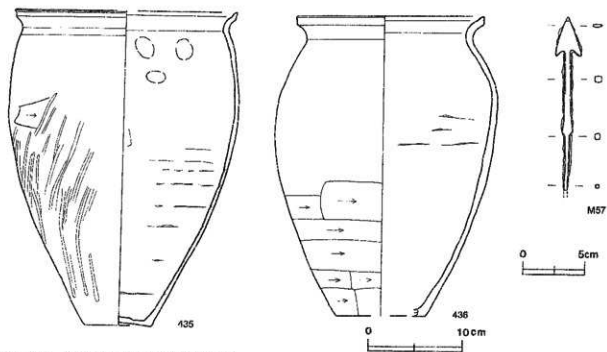
- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
- 4 暗赤褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 5 暗赤褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量

遺物 土師器片239点(坏・高台付坏46, 甕・甕193), 須臬器片231点(坏・高台付坏83, 釜9, 甕・甕139), 土製品1点(支脚), 鉄器・鉄製品2点(鏃, 不明)が出土している。これらの遺物は竈内と中央部の覆土下層から床面を中心に出土している。それらのほかに、混入した縄文土器片6点が出土している。第157図433・434, 第158図435・436は土師器, 第157図437は須臬器である。433の高台付甕は中央部の覆土下層から, 434の甕は竈の覆土下層から, 436の甕は中央部の床面から出土している。435の甕は, 覆土上層から下層と中央部の床面から出土した破片が接合したものである。437の坏は, 北部の覆土上層から出土している。第158図M57の鏃は, 南部の床面から出土している。出土状況から, 434・M57は本跡に伴う遺物と考えられる。

所見 本跡の時期は, 竈内の覆土の出土土器から9世紀中葉と考えられる。



第157图 第90号住居跡・出土遺物実測図



第158図 第90号住居跡出土遺物実測図

第90号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第157図 433	高台付蓋 土 胎 器	A 11.5	口縁部の一部欠損。平底にハの字状の高台が付く。体部は大きく開き、口縁部は外反する。	口縁部、体部内・外面及び底部内面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り後、高台削り付け。	雲母・砂粒・白色 粒子 褐色 普通	80% P L 68 二次焼成
		B 3.2				
		D 7.4				
		E 1.0				
434	蓋 土 胎 器	A 15.1 B (4.6)	頸部から口縁部にかけての破片。頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は外反し、頸部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。	雲母・砂粒・白色 粒子 赤褐色 普通	5%
		A [23.2] B 33.1 C 7.0	底部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、上位に最大径を持つ。頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は外反し、頸部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘタ削り後、縦方向のヘラ巻き。体部内面ヘラナデ、指頭圧板・輪轆み痕残る。	雲母・雲母・砂粒 にふいり褐色 普通	30%
第158図 435	壺 土 胎 器	A 19.5 B 31.5 C 1.94	底部から体部にかけて一部欠損。体部は内彎して立ち上がり、上位に最大径を持つ。頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は外反し、頸部はつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横方向のヘラ削り。体部内面に輪轆み痕残る。	雲母・砂粒・白色 粒子 にふいり赤褐色 普通	60% P L 68
		A [12.4] B 4.3 C 6.6	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部、体部内・外面及び底部内面ロクロナデ。体部下縁手持ちヘラ削り。底部多方向の手持ちヘラ削り。	白色粒子 灰黄色 普通	30%
		第157図 437	坏 須 器	A [12.4] B 4.3 C 6.6	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部、体部内・外面及び底部内面ロクロナデ。体部下縁手持ちヘラ削り。底部多方向の手持ちヘラ削り。

遺物番号	器種	計 測 値							材質	特徴	備考	
		全長(cm)	腹身長(cm)	腹身幅(cm)	頸部長(cm)	頸部幅(cm)	重長(cm)	厚さ(cm)				重量(g)
第158図M57	壺	(13.6)	(2.9)	2.1	6.5	0.6	(4.7)	0.5	(19.5)	鉄	具 3 内形式	P L 73

第91号住居跡 (第159・160図)

位置 調査5区の中央部, M3b6区。

規模と平面形 長軸は3.93m, 短軸は3.77mの方形である。

主軸方向 N-21°-W

壁 外傾して立ち上がっている。壁高は21~38cmである。

壁溝 全周している。上幅15~35cm, 下幅5~10cm, 深さ5cmで、断面形はU字形である。

床 ほほ平坦である。中央部が踏み固められている。

竈 北壁の中央部に粘土と砂で構築されている。天井部は崩落し、袖部が残存している。規模は、焚口部から煙道部まで105cm, 袖部最大幅125cmである。煙道部は壁外に30cm掘り込んでおり、外傾して立ち上がっている。火床部は床面から5cmほど掘りくぼめられており、火熱を受けて赤変硬化している。火床部の中央から円錐状の焼土塊が出土しており、その上に須恵器片が逆位で重ねられた状態で出土している。坏は、二次焼成を受けておらず、内・外面に焼けた粘土が付着していることから、焼土塊の上に坏を被せた後、粘土を貼り付けて支脚として使用していたと推定される。粘土塊のすぐ北側に須恵器高盤が正位で出土している。竈土層断面図中、第8層は火床部の覆土である。第9~12層は袖部で、地山の上に粘土と砂を積み上げて構築している。第13層は火床部掘り方の埋土である。

竈土層解説

1 灰褐色	ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量
2 灰褐色	ローム粒子・粘土粒子・砂粒中量、ローム小ブロック・焼土粒子少量
3 暗赤褐色	焼土粒子中量、ローム粒子・焼土小ブロック・炭化粒子・灰少量
4 暗赤褐色	焼土粒子多量、焼土小ブロック中量、ローム粒子・焼土中ブロック・炭化粒子・灰少量
5 近い赤褐色	焼土粒子多量、焼土小ブロック中量、ローム粒子・焼土中ブロック・炭化粒子・灰少量
6 暗赤褐色	ローム粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量
7 暗赤褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
8 灰褐色	灰多量、焼土粒少量
9 暗赤褐色	焼土小ブロック・焼土粒子・粘土粒子・砂粒中量、ローム粒子・焼土中ブロック少量
10 灰褐色	粘土粒子多量、焼土小ブロック・焼土粒子・砂粒少量
11 灰褐色	粘土粒子多量、焼土粒子・砂粒少量
12 灰褐色	粘土粒子多量、焼土粒子・砂粒中量、焼土小ブロック少量
13 暗赤褐色	焼土小ブロック・焼土粒子中量、ローム粒子・焼土中ブロック・炭化物少量

ピット 2か所(P1・P2)。P1は長径45cm, 短径33cmの楕円形で、深さは20cmである。南部壁寄りの中央に位置していることと形状から、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P2は径30cmの円形で、深さは20cmである。竈の正面で確認されているが、性格は不明である。

覆土 8層からなる。レンズ状に堆積しており、自然堆積と考えられる。

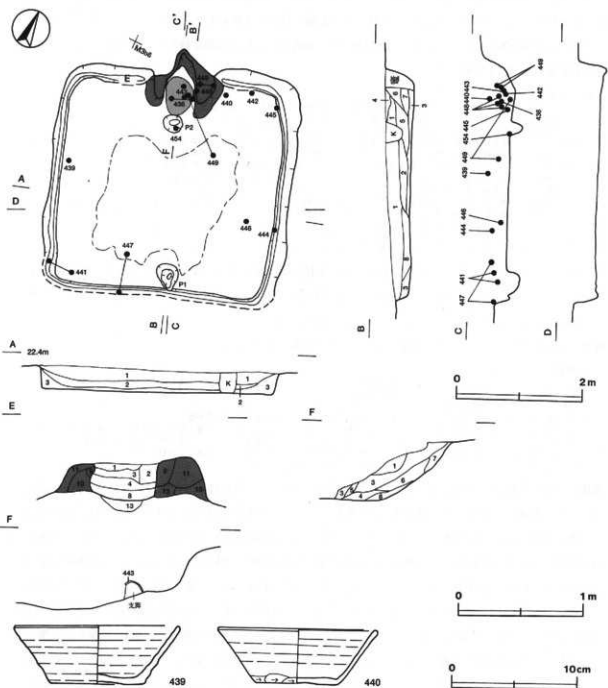
土層解説

1 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量、ローム中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
2 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量、ローム中ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
3 暗褐色	ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量
4 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
5 暗褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量
6 暗褐色	ローム粒子中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
7 暗褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量
8 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量、ローム中ブロック少量

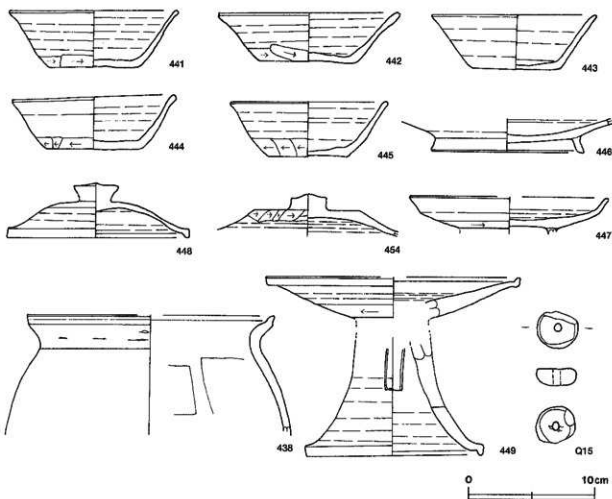
遺物 土師器片174点(坏4, 甕・甔170), 須恵器片179点(坏・高台付坏97, 壺15, 高盤2, 甕・甔65), 土製品1点(支脚), 石製品1点(紡錘車), 鉄器1点(刀子)が出土している。これらの遺物は、竈内と、竈周辺の覆土上層と覆土下層を中心に出土している。出土土器の時期差はあまり大きくなく、本跡は廃棄後短い期間で埋没したと推定される。第160図438の土師器甕は竈内の覆土中層から出土している。第159図439・440, 第160図441~445は須恵器坏である。439は、覆土上層と覆土中層と西部の覆土上層から出土した破片が接合したものである。440は、北部の覆土上層から出土している。441は、覆土上層と南西部境界の覆土上層, 南西部の覆土上層から出土した破片が接合したものである。442は北東部の覆土下層から, 444は東部壁際の覆土上層から逆位で, 445は北東部の覆土下層から正位でそれぞれ出土している。443は、竈内から出土した粘土塊の上に逆位で重ねられた状態で出土している。第160図446・447は須恵器甕である。446は、東部の覆土下層から出土している。447は、南部の覆土上層と南壁際の覆土上層から出土している。448・454は須恵器蓋である。448

は竈内の覆土中層から、454はP2内の覆土上層から出土している。口縁部がすべて欠損しており、あたかも故意に割られたかの印象を受ける。449の須恵器高盤は、坏部が竈内の覆土中層と北部の覆土下層から出土した破片が接合したもので、脚部は竈支脚のすぐ北側から正位で出土している。Q15の紡錘車は覆土中層から出土している。出土状況から、438・443・448・449・454は本跡に伴う土器と考えられる。

所見 本跡は、竈の前面からP2が確認されている。P2覆土上からは貼床が確認されず、その覆土中からの出土土器は本跡の土器とほぼ同時期のため、本跡に伴うピットと考えられる。竈の使用に支障が生じる位置にあることから、本跡の廃棄時に何らかの目的で掘られたと推定される。時期は、出土土器から9世紀前葉と考えられる。



第159図 第91号住居跡・出土遺物実測図



第160図 第91号住居跡出土遺物実測図

第91号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第160図 438	土 師 器	A [19.4]	体部上位から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は外反し、輪部は外上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ヘラナデ。頸部外面に輪轆み痕残る。	小礫・雲母・砂粒・白色粒子にぶい橙色 普通	5%
		B (9.5)				
		C				
第159図 439	環 須 恵 器	A 12.8	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部、体部内・外面及び底部内面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り。	雲母・砂粒・白色粒子・赤色粒子 褐灰色、普通	55% P.L.68
		B 4.7				
		C 7.4				
440	環 須 恵 器	A 12.5	体部から口縁部にかけて一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面及び底部内面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ切り痕を残す2方向の手持ちヘラ削り。	雲母・砂粒・白色粒子 褐色 普通	60% P.L.68
		B 4.4				
		C 6.4				
第160図 441	環 須 恵 器	A 13.2	体部から口縁部にかけて一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面及び底部内面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ切り痕を残す1方向の手持ちヘラ削り。	雲母・砂粒・白色粒子 褐灰色 普通	90% P.L.68
		B 4.5				
		C 7.0				
442	環 須 恵 器	A 14.0	底部から口縁部にかけて一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部、体部内・外面及び底部内面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ切り痕を残す1方向の手持ちヘラ削り。	小礫・雲母・砂粒・白色粒子 黒褐色 普通	70% P.L.68
		B 4.0				
		C 7.6				
443	環 須 恵 器	A 13.1	体部から口縁部にかけて一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部、体部内・外面及び底部内面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り。	砂粒・白色粒子 灰色 普通	90% P.L.68
		B 4.5				
		C 7.0				